都市戦記
妖魔アルディーン

井上ほのか



妖魔アルディーン――凶悪な犯罪都市、ネオ・ナリタの人々ですら、この名を聞けば、恐怖に震える。とり憑かれた者は、我を失い、血に飢えた殺人鬼と化し、破滅するという。

連邦暦２１１年。アカデミアのＩＱ２５０の天才少年・涼は、この魔都で明るく生きる真夜子と出会う。そして、闇から街を支配する〝悪〟の存在を知ったある日、彼のなかにアルディーンの声を聞く。危険きわまりない妖魔に選ばれた涼の冒険が、いまはじまった！



TEEN'S HEART
X95-8

講談社X文庫

都市戦記・妖魔(ようま)アルディーン

井上ほのか



目次

プロローグ　都市伝説〝闇の皇子〟――10
第一章　アカデミアの天才児――18
第二章　闇の皇子・アルディーンの復活――64
第三章　ナイトハンド登場――二人の黒衣の影――118
第四章　美しい沙羅――174
第五章　七賢人都市――最後の決戦――223
エピローグ　闇の皇子の冒険――293
あとがき――298


犯罪都市ネオ・ナリタで明るく生きる女の子。新聞記者志望で、気が強い。
涼・雨宮 IQ250の天才少年。寂しがりや。妖魔アルディーンにとり憑かれるが!?
範・来龍 「ナリタ・アカデミア」での涼の同期生。涼にとって貴重な友人。
三日月真吾 ネオ・ナリタ警察の警部。ガールハントが趣味の正義漢。
アルディーン」登場人物



↘真夜子

↙ケンショー・佐矢霧　妖魔アルディーン（闇の皇子）伝説の熱心な研究者。

↘ナイトハンド　ネオ・ナリタを支配する七賢人を激しく憎む。冷酷な殺戮者。

↑沙羅・アッシャー　ネオ・ナリタの金持ちの娘。冷たい心を持った美少女。

「都市戦記・妖魔

おもな

イラストレーション／瀬口恵子（せぐちけいこ）

都市戦記・妖魔（ようま）アルディーン

世界設定 ―― ネオ・ナリタについて

このストーリーの舞台となるネオ・ナリタという街は、近未来の都市だと思ってください。……〝いつか〟、〝あるかもしれない〟、そんな街です

ネオ・ナリタは、空港と、郊外にあるアカデミアが、市としては重要な存在です。過去一世紀のあいだに、さまざまな悪条件がかさなって、悪名高い犯罪都市となっています。

……約七〇年ほど前、この街にひとつの邪教の教団が存在していました。『七賢人教団』と呼ばれていた彼らは、市の中央……いわゆる〝旧市街〟に巣くい、さまざまな呪法や祈禱によって、一時はネオ・ナリタ全市をおびやかすほどでしたが、『アルディーン』と呼ばれたその力の源を失ってからは、いつのまにか解散してしまいました。

闇から生まれたものは、いつかは闇にかえるのです。

さて、それから何十年もたって……七賢人教団と血の儀式が、ただのおとぎ話に変わりかけたころに、ネオ・ナリタに新しい魔人があらわれました。

彼はデュークと名乗り、またたくまにネオ・ナリタ〝旧市街〟を支配してしまい

ました。彼のやり方は大胆で、残忍です……邪魔になりそうな人間は、最初にかたっぱしから抹殺していったのです。

7年前、デュークはこの街の主要な工場の持ち主等、有力者7家族を、一夜にして家族ごとみな殺しにしてしまいました。

（注・この事件は〝七賢人の虐殺〟と呼ばれています）

デュークはまた、闇のなかから七賢人教団を再生し、生け贄の儀式なども復活させてしまいました。ただデュークの力というのは、もとの七賢人の魔力とはどこかが違うようなのですが……。

現在、市中央にある〝旧市街〟はスラム化し、犯罪多発地帯となっています。ここに住む人々の生活は貧しいので、ひょっとすると今より不便かもしれません。最新の設備は限られたお金持ちか、警察などの機関のもので、ふつうの家には自動車も電話もないようです。

七賢人教団の支部が数か所、堂々とこの旧市街に存在していますが、警察も手を出せません。なぜなら、七賢人教団の信徒や内通者は、警察や市の職員のなかにも大勢いるからです。もちろん彼らは違法な武器や銃器を用意しています。

……連邦暦221年、ネオ・ナリタはまさにそんな最悪の状態にあったわけです。

プロローグ——都市伝説〝闇の皇子〟

〝さあ、これからゾッとする話をしようじゃないか？〟

ネオ・ナリタの市警察署の文書庫の奥深くには、一冊の黒革のファイルがある。

さほど厚くはないそのファイルは、7年あるいは17年ごとに必ず取り出され、血ぬられた記録が書き足されていくことになっている……これこそが、ネオ・ナリタの都市伝説『闇の皇子』についてのただ一つの公式ファイルである。

……悪名高い犯罪都市、ネオ・ナリタでは血が流れることも、人が死ぬことも日常茶飯事であり、誰も驚いたりはしない。この街の人々が恐れる闇は、もっと深いものだ。

その恐怖には古くからの名前がついており、彼の名をアルディーンという。

〝闇の皇子〟あるいは〝アルディーン〟と呼ばれるこの怪奇な現象は、通常7年……または17年を周期に、ネオ・ナリタの旧市街にのみ、あらわれる。

それは強力で、破壊的な霊的パワーであり、予定の年にあらわれて、ネオ・ナリタの旧市

街……いわゆるスラム地帯で、かならず一人の犠牲者を見つける。
それは男性でなければならない。
20代……まれに10代の、若者が多いようである。
こうした条件を備えた人間は、もちろん旧市街にも星の数ほどいるが、その中の一人にアルディーンの力がとりつくのだ……。〝アルディーン〟にとり憑かれた人間はどうなるか？
まず彼らは、肉体的能力が飛躍的にあがる。
素手で鋼鉄を曲げることも、ドア錠をねじ切ることも不可能ではない。個人差はあるが建物の3階くらいまでなら、楽々と跳躍できるようである。
また、記録に残るかぎりではわずか2名であるが、合体がうまくいった者には、一種の念動力があらわれることもあるらしい。
しかし、〝闇の皇子〟の影響はそればかりではない。
とり憑かれた犠牲者たちは、その理性と人間らしさのいっさいを失う。
——彼らは、完全な殺人鬼になる。
ひとつの例として、連邦暦180年の犠牲者、ケン・二階堂の名前をあげておこう。
彼はナリタ市の市職員であり、母親と妹とともに旧市街のアパートで暮らしていたが、予定の年のある朝、不幸にもアルディーンの犠牲となってしまった。
いつもどおり、朝食の席にあらわれた彼の姿を見て、母親はすぐ異変に気がついたらし

い。とっさに妹を外に逃がそうとしたが、はたせなかったようだ（のちの現場検証から、そのようすがうかがわれる。母親はドアのそばで、少女をかばうようにして死んでいた）。

〝闇の皇子〟の虜となった彼は、肉親を血まつりにあげたあとで表に出て、同じアパートの住居人を狂ったように惨殺していった。

実際に、彼は発狂状態にあったのだ。

駆けつけてきた婚約者の娘は、周囲が止めるのもかまわず、たった一人でアパートの中に入っていき、首を折られて殺された。ナリタ署は一日がかりで彼を旧市街の一角に追いつめ、火炎放射機の部隊でかこみ、焼き殺した。死者・負傷者はあわせて52人にもなっている。

話によれば、彼はそれまで温厚で優しい性格だったという……闇の皇子の犠牲者の多くがそうであった。その朝まで、優しい兄、夫、恋人だった人間が、突如として発狂し、血に飢えた怪物になって人を襲うのである。

ネオ・ナリタ旧市街に住む人々は、かぎりなくこの現象を恐れている。

闇からあらわれ、人の姿に顕現しようとする妖魔の力〝アルディーン〟。

それが誰になるのか、予想する方法は、いまのところ発見されていない。

誰が、どう調べてみても、過去の犠牲者たちのあいだにつながりはなく、人種・肌の色・髪の色、その他の特徴で目につくような共通点は、何もなかった。

ただ7年、あるいは17年ごとに一人だけ、かならず旧市街の人間がアルディーンの宿主と

される。

――ふせぐ方法は、まるでないのだ。

断言するが、これはけっしてたんなる殺人犯罪ではない。

多くの事実が、超常現象の特徴をあらわしている。

アルディーンの力に憑かれた人間は、常識で説明のつかない強さを身につける……銃弾、あるいは刃物による傷も、驚くべきスピードで回復していく。

姿もやがて人間らしさを失う……時間がたてばたつほど、闇の皇子の犠牲者は異様な怪物に近くなっていくのである。

くりかえして言うが、絶対にたんなる殺人犯罪ではない。

いったん〝闇の皇子〟と化した者は、死ぬまで殺戮をやめることはない。だが、人の手でアルディーンを殺すのは非常に困難である。なにしろ、銃もナイフも彼にはきかないのだから……事件が終わったとき、死体はしばしば目をおおうような状態になっているものである。

――これはそもそも何の理由によるものであろうか？

――旧市街の人々が、この力をアルディーンと呼ぶのはなぜか？

ナリタ署は、とうにこの妖力の正体を捜すことをあきらめてしまっている。予定の年、彼らは神経をとがらせて通報を待ち、知らせがありしだい殺戮の現場へ駆けつけ、憑かれて

しまった宿主をなんとかして処分する……そして、あの黒革のファイルに被害と宿主の名前が書き入れられるのだ。

ネオ・ナリタのある警察官が、筆者に絶望的に語った言葉を借りれば、〝ほかに何ができるのか？〟というわけである。なにしろ相手はこの世のものではないのだから……。

だが筆者には、ある仮説がある。

まだ確かなものではなく証明もできないので、あえてくわしくは記さないが、筆者の調査によれば、この怪奇現象は、約半世紀前からネオ・ナリタ旧市街に起こりはじめている。

――そしてネオ・ナリタはまた奇妙に邪教とかかわりの深い街でもある。

旧市街の人々は、はっきりとは由来を知らずに、街にふりかかる黒い翼を、〝闇の皇子〟または〝アルディーン〟と呼んでいるようであるが、その名にこそ、かの力の正体があると筆者は思う。

それはかつてこの街を支配していた、七賢人教団と呼ばれる邪教の一群の用語である。疑いなくこの教団は超常の力を持っており、彼らが崇拝するのは、〝闇の皇子〟だった。彼らの力の源は、すべてただ一人の少年からきていたのだ。

邪悪な血の儀式と、生け贄をささげられる黒衣の少年のイメージは、現在でもネオ・ナリタの人々が無意識に忌む悪夢であるが、その彼がアルディーンと呼ばれていたことは、なぜかあまり広くは知られていない。



七賢人がその呪力を失い、砂が散るようにちりぢりにくだけてから約半世紀にもなる。だが旧市街にはいまでもなお、呪われた力の名残がさまよっていると、筆者は信じるのだ。

……かつて筆者は七賢人の祭壇の跡を求めて、ネオ・ナリタのとある地下道を探険したことがある。

現在は下水の流れるルートになってしまった場所であるが、壁にはまだかすかだが黒衣の少年の像とわかる浮き彫りがあり、かたわらに一枚の銅板が残されていた。

それは闇の皇子にささげる一編のオマージュであり、ネオ・ナリタの異才の幻想派詩人リー・渓守が以前に記したものであった。ここにその全編を掲げておく。

……竜と魔女とのあいだに生まれた、六番目の魔が闇の皇子である。
彼は少年の姿に似るが、力は妖魔をもしのぎ、
その牙でたやすく魔物たちを引き裂く。
彼の名をアルディーンという。
闇であり、力であり、破滅であり、無敵である。
……すべてが幻で、傷つくことがない。
妖光輝く闇の皇子。
アルディーンのあるところ、魔物ですら夜を恐れる。

悪夢を超える妖魔の皇子。双眸は血よりもなお赤く、かなたへと闇をつらぬく……。

……これが、ネオ・ナリタの都市伝説〝闇の皇子〟のすべてである。

前回の事件から数え、7年目の年はすでになにごともなくすぎている。だから次に彼が旧市街にあらわれるとしたら、予定の年は17年目。すなわち連邦暦211年になるであろう……。

ケンショー・佐矢霧著、『都市伝説〝闇の皇子〟研究』より抜粋。

（注・ここでいう〝七賢人教団〟はデュークの教団ではありません）

第一章　アカデミアの天才児

……連邦暦211年。

ネオ・ナリタの市とアカデミアは、ちょうど双子都市のような位置にあった。

この時代、〝アカデミア〟と呼ばれる教育機関は全世界に5か所。

モスクワ、パリ、ワシントン、カイロ、そしてここネオ・ナリタであり、それぞれの地域の誇る、最高教育学府となっていた。

ひとつのアカデミアに、生徒は約1000人。

選りすぐったエリートでなければ、受けいれられないのだ。

アカデミア出身者といえば、そのままエリートコースの頂点にいることを指している。

モスクワとパリは共学、ワシントンは女子のみ……と、地域によって違いはあるが、ナリタ・アカデミアに集められるのは男子のみとされていた。

——精神と肉体の理想を求める。

それが〝アカデミア・ネオ・ナリタ〟と呼ばれる白亜の別世界に入った少年たちに、最初

に教えられる言葉であった。
もちろん、あくまでも理想であり、これに近づける者などふつうはありえない。
アカデミアの水準は高く、頭脳ばかりでなく、身体も、精神も同時に厳しく鍛えられた。
入学審査はつねに厳格。カリキュラムについていくのはさらに難しく、そのなかで、すべてのカリキュラムに秀でた能力があるとすれば……それはもう生きている奇跡だ!!
しかしながらアカデミアの歴史のなかで、わずかだが理想どおりの……理想にきわめて近い者たちも、あるにはあったのだ。
たとえば、その名前を涼。涼・雨宮という……。

アカデミア・ネオ・ナリタの体育館は、地下2階、地上5階の建物で、各フロアが、それぞれ運動施設として作られている。
授業以外の時間でも、利用したい者がいれば、ここは自由に開放されていた。
3階のフロアではちょうど、マーシャル・アーツの模擬戦がはじまっている。
――アカデミア体育課程のうちには、数種のマーシャル・アーツ（格闘技）も含まれていた。
かならず習得しなければならないものではないが、護身術として必須授業科目のなかに

入っている。

上級クラスになれば武器や防具を使い、場合によっては真剣での模擬戦もおこなわれた。

――約6メートル四方の白いライン。模擬戦の境界線である。

ここに実際にあがるのは6人ずつ、左右、二組のチームである。

いま、このラインの中にいるのは全員がマーシャル・アーツにおいてはAクラスの生徒ばかりで、多くは最高学年だった。

年齢は最年少者が16歳……上が20代前半までである。彼らはみな、一種の防具のようなスーツを身につけている。手袋、胸あて、顔面（特に目）を保護するゴーグル……マーシャル・アーツの授業で使う規定の練習着だった。

約100人もの生徒たちが、その場に見物にきていた。というのも、アカデミアは卒業の時期になっていたので、Aクラスではこれから大半の者が卒業していってしまう……これが最後の試合になるはずだった。

正規の授業ではないので、クラス全部の人間が試合に参加するわけではなかったが、それでもかなりの見物になる。

さきにも言ったように、正規の授業ではなかったので、チームはそれぞれの大将が勝手に選んでよいことになっていた。つまり、これぞと思われる上級者をどうやって味方にとるかが、彼らの腕の見せどころになるわけだ。

このスカウト合戦は毎年はげしくなる傾向にあり、教授たちの一部の眉をひそめさせていたが、一方で声援を送る教官もいたので……とりあえずは黙認という形になっていた。

噂では、今年は右サイドのチームが有利だという話だった。

なぜなら左サイドのチームリーダーになっていた範・来龍が数日前にケガをして、試合に出られなくなっていたからである……豪力で知られている来龍が出られなければ、このチームに勝ち目は薄い。

左サイドのチームの中で、いちばん背が高く大柄なのが、範・来龍の姿である。

噂どおり彼は試合には出ないらしく、ゴーグルをはじめから外していたが、その顔は陽気に笑っていた。

……それぞれのチームのメンバーが発表されるときになって、彼の自信の理由があきらかになった。

「右サイド、1st……ケネス・田村」

「左サイド、1st。ハル・大久保」

名前を呼ばれた者たちは、そのとき軽く右手をあげてそのチームの列にくわわる。どのチームに誰がはいっているのか、そこではじめてはっきりするのだ。

「最後に、左サイド……涼・雨宮」

どこからかアッという声がした。

静かに手をあげて列にくわわったのは、まだ十五、六の少年だ。その場の誰よりも小柄で、ほっそりしている。まだ少女のように優しい顔だちのようだった。

相手チームの主将の顔色が大きく変わった。

「ちょっと……待ってくれ！」

作戦タイムと称して、急遽集合はしたものの、どうすることもできない。

「……まさか涼・雨宮がいたなんて！」

相手方の誰かの声を聞いて、来龍がニッと笑った。

――くどきおとすのに、どんなに苦労したことか。だが涼がいれば、少なくとも大将戦はこっちのものだ！

不注意でケガをして、思いがけなく大将戦をあきらめねばならなくなったとき、試合はすでに数日後にせまっていて、代わりになる人材はことごとく相手に押さえられていた。

メンツにかけても負けたくないのは来龍も同じことで、彼は必死になって可能性を考えた結果、涼・雨宮に白羽の矢をたてたのだった。

涼はついこのあいだ16歳になったばかりで、ゴーグルをかけてしまえば、初等科の生徒らに混ざっても見分けはつかないほどだったが、学年ははるかに上の最高クラスで、すでに卒業をひかえるばかりになっている。

アカデミアのなかでも、特別な天才とみられていた。ＩＱ２５０以上、わずか9歳でナリ

タ・アカデミアに異例の入学を許され、ふつうで10年かかるアカデミアの全課程を6年で終了してしまっている。

アカデミアに次々とおとずれる客員教授の誰もが、涼には感嘆して去っていった。

下級生のみならず、おなじ学年の人間にさえ、もはや神秘的な存在として見られていた。

授業以外ではあまり人前で見せなかったが、射撃・剣技……マーシャル・アーツの授業においても、涼はあきれるほど優秀だった。

自分の倍ほどもある相手を、素手で投げとばせることを思いだして、来龍はニヤリとした（彼自身、授業中に何度かふっとばされたことがあるのだ）。

まだ16で小柄なのはどうしようもないが、それでも模擬戦なら、だんぜんトップクラスで戦えた。あえて弱点と呼べるところを捜せば、気性が優しくてすぐに攻撃の手をゆるめてしまうことだろうか。

教官の秘蔵っ子である涼が、試合には参加しないでいたのも、それが理由だった。

――気の弱い……というのじゃないが、涼はいつでも他人を傷つけることをひどく嫌うんだ。

涼とは実は寄宿舎で同室だった来龍は、そのよしみで涼の気性は、だいたいのみこんでいた。

ふだんはもの静かで、年上の来龍よりずっと落ちついている（もっとも、来龍も年齢より

騒がしいほうだった)。人よりむしろ素直なほうだったが、不正なことに対しては目をみはるほど気性の激しい反応をする……だから脅しや、きたない誘惑は絶対にきかない。

真剣でやる模擬戦のメンバーにかりだすことは、はじめからまず無理だと思われていた。だが来龍だけは、ウスウス知っていた。

——説得できないとなれば、涼には泣き落としがいちばんだ!

相手チームの主将は、ずっと青い顔で来龍をにらんでいたが、来龍とて不正な手を使ったわけではない。確実に勝利が手にはいると、思いこんでいた彼の読みの甘さだ。

日ごろから、やや短気な面があると評判の彼は、すでに口もとにあせりが浮かんでいる。

……試合が進んで、いよいよ双方のラストの決戦になった。

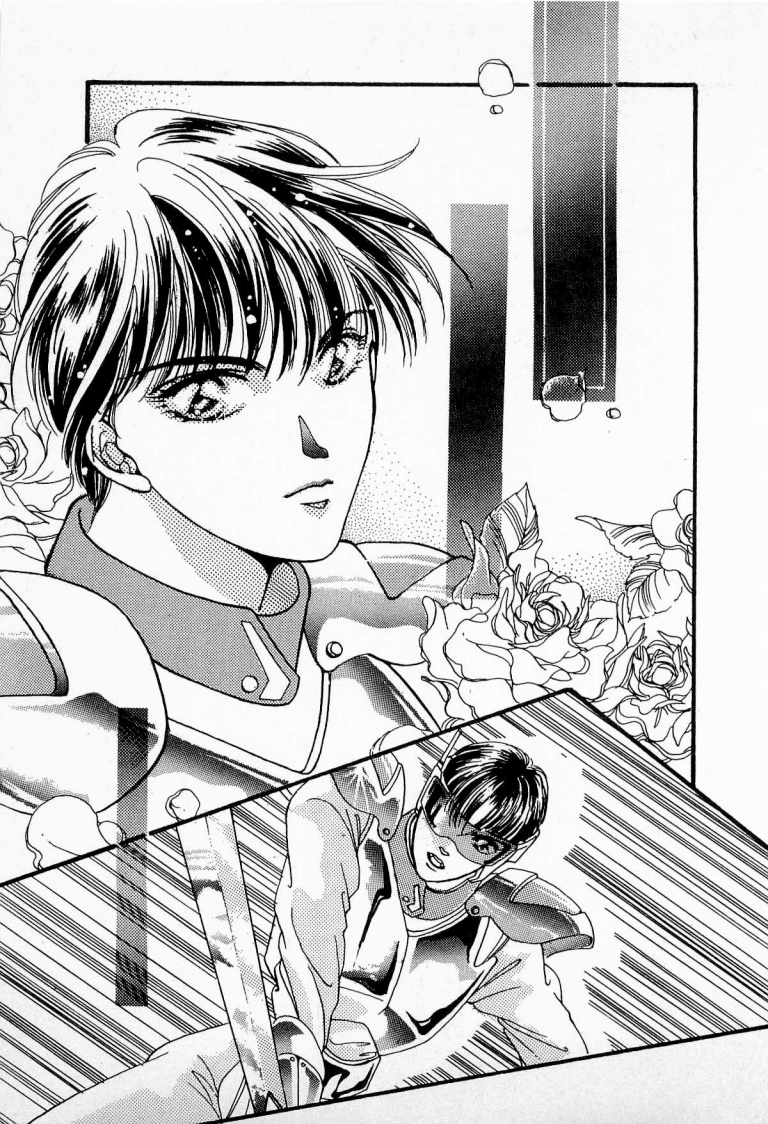
来龍の側はもちろん涼・雨宮……相手側の主将もこわばった表情のまま、フロアの位置についた。

「構えて」

アカデミアの剣技で使われるのは、フェンシングの剣に似た細身の、しかし両側にも刃がある一種のサーベルだ。

はじめのうち、戦いは互角だった。そうなると涼よりも体格のまさっている相手方が優勢かと思われたが、すぐに変化があらわれた。

押されているかのように見えていた涼よりも、相手の攻撃に乱れが目立ちはじめた。



見物の多くは、涼の動きを見るのははじめてであり、しだいに目を奪われていた。

――すべての動作が、流れるようになめらかだった！

嵐のような攻撃を的確に受けながすその技量は、教官の指導にも見たことがないほどだ。

息が切れるほど攻撃させてしまうと、わずか一瞬で勝負が決まった。

あせって踏みこんだ相手のサーベルを、涼の手が空中にはねあげた。

いきおいと、足をすべらせたために、むこうは自分から床にはいつくばって倒れてしまった。涼はすぐ剣をおろし、左手に持ちかえると、相手の健闘をたたえる笑顔を浮かべて手をさしだした。

「ジャック・安藤、お見事でした。どうぞ手に……」

つかまって……と言おうとした瞬間、アッ、という声とともに腕を押さえて涼はあとずさった。彼が身をかがめた瞬間、相手は落ちていたサーベルをひろって下から突きあげたのだ。

「ま、まだだッ……まだ勝負は終わってないぞ！」

――よせッ、なんてことを！

来龍が怒鳴ってフロアに飛びだしていった。

「やめろ、この卑怯者ッ、彼はもうゴーグルもおろしているんだぞ！」

傷ついた涼の腕からは、血が流れている。激しいあせりの表情で、相手はそれを見たかと

思うと、ヤケになって真剣を頭上からふりおろした。
先端をのぞいて鋭い剣ではなかったが、それでも全力でふりおろされたら、ただではすまない。
「……涼、逃げろ！」
誰もがそのとき、ハッと息をのんだ。
涼は傷ついているのに逃げようともしなかった、それどころか、棒立ちのまま左手のサーベルをふりすてたのだ。次の瞬間、勢いに負けたひざがガクンと床におちていた。
しかしサーベルはひたいの上、わずか数センチの位置で止まっている。
白刃取り!?　フロアじゅうがドッとざわめいたそのとき、
「いったい、このさわぎは何かッ!?」
騒ぎを知ったアカデミアの教官が、ようやく駆けつけてきた。彼は、即、人々を引きはなして、
「当事者は前へでなさい」
こうした命令は絶対である。二つのチームの全員が教官の前に並んだ。
……それから約40分。
その場にいた人々から事情を聞いたあと、教官はまず来龍にむかって〝最高学年でありながら、このような騒ぎの原因を作った〟ことをきびしく叱責した。

「……本来なら謹慎処分と思うが、時期的な問題もある。ほかの教授とも相談する必要があるので、あとで来るように」

相手チームの対戦者は、さすがに目を見開き、死人のように青ざめていた。

教官は氷のような表情で彼にむかい、

「君のこの種の事件はこれでたしか三度目になる。三度とも、試合中だったはずだ……」

それから無造作に手を出して、

「ジャック・安藤。認識票をはずしなさい。はずして、私に返すように」

その場のほかの者たちも、全員凍りついたような表情に変わっていた。これほどの罰だとは思わなかったからだ。

アカデミアの認識票は3×7センチメートルほどのプレートで、喉から胸元にさげるようになっていた。プレートには磁気で、学生番号ほかの記録の書きこみがなされている。

一人に一枚ずつ、ひとつとして同じものはない。教室、すべての資料室、食堂、割りあてられた自室のカギなど……学内のあらゆる場所での身分証明にもちいられ、アカデミアの生活では絶対に必要なものだった。就寝中といえども、生徒ならはずしたりはしない。

それは規則でもあったが、学院生としての誇りでもあった。

これを返させられるということは、そのまま〝退校〟……アカデミアからの追放を意味していた。

数回くりかえしても言うとおりに渡さなかったので、教官自身が手をのばして、胸元から認識票をむしりとった。

そのあいだずっと、彼はショックで身動きもならずにふるえているだけだった。

「ほかの者は全員帰ってよろしい」

誰もが目をそむけるようにしながらフロアを出ていく。出口のところで一人の少年が、隣に声をひそめてささやいていた。

「しかたないよな！　ジャックも今度は相手が悪すぎるよ。なにしろ彼は涼・雨宮を傷つけたんだから……」

それから数時間後、こってりお説教をされた範・来龍が、自室にもどってきた。

アカデミアは全寮制で、初等科・中等科のうちは6人部屋だが、高等科になるとややゆったりした二人部屋がもらえるのだ。来龍の同室者は、涼・雨宮だった。

「ウウ、助かった！　なんとか謹慎だけは、まぬがれたらしいぞ！」

「そう、来龍、よかったね」

それだけを言って涼は目をふせ、膝の上に開いていた本を読みはじめた。ケーブル回線で画面に映されるタイプの資料よりも、昔どおりの本がなぜか好きだった。

横顔が、いつになくくもっている。来龍もそれに気づいた。
「どうしたんだ、顔色がよくないぞ……傷はかなりひどかったのか？」
そういえば今夜は食堂にも、とうとう姿を見せなかったようだ。
「……慣れないことにひっぱりこんで、ケガをさせてすまなかったな。でもまさか、あんなことになるとは思っていなかったんだ」
あやまる来龍に、気にしないでほしいと涼が言った。
「傷はたいしたことないよ、食事にもいった……ただ、みんながあの話をしていたから、すぐにもどってきたんだ」
来龍は陽気に肩をすくめてみせた。
「そりゃそうだ。今夜は食堂じゅう、噂でもちきりだったもの。特にお前のことをはじめて見た下級生の連中なんかがね！」
「うん、そうだったね」
涼は軽くうなずいただけで、それ以上何も言わず、黙って続きを読みはじめた。
――涼はどうしたのだろう？
彼は今日はどこかおかしい……ひどく気になったが、それ以上どうやって聞きだしたらいいかもわからないので、来龍も黙ってしまった。
この範・来龍は、今年22歳になる。

アカデミアのこの学年としては、平均的年齢である。
外見は涼とは対照的に大柄で、とかしてもとかしてもおさまらないボサボサ頭と、いつも戦っている。成績は、マァ、それほど……アカデミアの学生としては、めずらしいほど豪放、かつ大雑把な性格をしていたが、そのぶん親切ないい男だった。
涼とは4年間、一緒の部屋にいて気性はのみこんでいた。
――怒っていないと涼が言えば、本当に怒ってはいないのだろう。だが、まだ怖がってなぞいるわけがないしなあ。
涼は見かけはおとなしいが、気性に弱さはない。暴力で涼を怒らせるのはむしろ得策ではないと、来龍はふんでいた。
――それなら、なぜ、彼はいまもこんなに青い顔をしているのだろう？
青い顔で、ときどきタメ息をつく。本なんか、実際は読んでいないに違いない。まさか悩みでもあるのだろうか……。
しかしIQが少なくとも250以上、アカデミアの最終試験を首席で通るような人間にどんな悩みがあるのか見当もつかない。
来龍は故郷に（こともあろうに）9人の弟がいた。
そいつらがもし、こんな青い顔をして、わけを言わずに黙っていたなら、迷わず足を持って逆さにし、白状するまでゆすぶってやるだろうと、彼は思った。

――だけど、IQがこっちの2倍はある相手に、そんなことできるか⁉

心配してやっているのに……なんだか腹がたってきた彼は、小声でつぶやいた。

「……いいさ、いいさ、隠してろって」

それからしばらくして、ページをめくる音がやんだ。そして、

「隠すつもりじゃないよ。ただ、食堂でみんなの話を聞いたんだ。あの……彼は僕にケガをさせたから退校になったって。みんな、どうしてそんなことを言うんだろう？」

〝涼・雨宮を傷つけたんだ。退校にもなるさ！〟

〝涼にケガをさせたら、処分はそりゃ厳しいに決まっているって！〟

来龍も、それはほうぼうで聞いていた。

「アア、そんなのを気にしていたのか……噂だよ。おい、優しいにもほどがあるぞ！」

それから急に真顔になって、

「教官の言葉はウソじゃないぞ。ジャック・安藤はいままでに2回、試合中に暴力事件を起こしているんだ。おれは知っていたし、それに今日のあれは……彼は本気でお前に切りかかっていた！」

〝試合中だから、たいしたことではないんじゃないか？〟などという、馬鹿げた意見には来龍は賛成できない。

――ルールが存在する試合中だからこそ、大問題なんだろうが！

「彼は自分の攻撃性をコントロールできないんだ。そのことだけで、もう彼の退校処分は決まったも同然だろう？　お前が責任を感じる必要などないんだ」

それから強い口調で断言した。

「相手がお前でなくても誰でも、その時点で教官は確実に彼の認識票を取りあげていたはずだ……アカデミアの規律はそうしたものじゃないか？　欲望をおさえられずに暴力をふるう人間に、ここで学ぶ資格はない！　絶対にない!!　涼、お前にだって、それはわかりきったことじゃないか……なにクヨクヨしてるんだよ？」

みんなにも本当はわかっているのさ……ただ噂をすこし派手にしたい気持ちが、誰にもあるのだ。自分もそれで少々楽しんできた来龍には、よくわかっていた。

――〝相手が涼だった！〟ってところがニュースになるのさ。

だが涼はいっそう青い、こわばった表情になって、ふるえる声で、

「でも……なぜみんな、そんなふうに言うんだろう？」

「そりゃ、マア、お前は特別だから……おい、涼ッ」

バンッ、とものすごい音をたてて、涼が力まかせにテーブルに本をたたきつけたからだ。涼がこうした乱暴な動作をするのを、はじめて見たような気がする。

「なぜいつもいつも、僕を〝特別〟だと言うんだい!?」

「なんでって、お前それは……」

来龍は手をあげ、頭をバリバリかいた。

――だってさ、IQ250以上。9歳でアカデミアへの入学を許され、おれたちが汗水たらして10年かかるアカデミアの全課程をたった6年で、しかも首席で卒業するような人間が、特別でなければなんだって言うんだ？

だが目をあげると、涼は本気で怒っている。おまけに、くちびるがいまにも抑えかねるようにふるえているではないか。

本能的に、彼は相手の肩に手をまわして隣に腰をおろした。

「どうしたんだ？　いいから、ゆっくり話してみろよ……お前、何を考えているんだ？」

涼は一度、タメ息をついてから話しはじめた……。

「僕にもよく、わからないんだ。来龍、いきなり怒ってすまなかった……」

「それはいいから」

「……わからないけどつらくてたまらないんだ。僕は昔、このアカデミアへの入学が決まったとき、とてもうれしかったのをおぼえている。それまで僕はひとりぼっちだったから」

そうだろうな、と来龍はただうなずいた。

――ふつうはかけ算をおぼえる年齢のころ、涼ならユークリッド定理を理解できただろう。

「アカデミアなら、僕と同じ人間がたくさんいるのだと思っていた。だけど、そうじゃなく

て、僕はここでもやっぱり一人だったみたいだね」

アカデミアで同級生になったのは、つねに涼より離れた年代だった。はるか年上の同級生にかこまれて、しかも涼はここでも水準を大きく上まわっていたのだ。

「それでも、ここはよかった。教授や教官がいて、みんながいて……来龍、君はとくに優しくしてくれた」

涼にとっては、どこよりもここがホームだった。

「だけど、それでもまだ僕は特別だとみんなに言われる！　何をしてもふつうじゃないって……君までそう言うんだね？　教えてくれよ、来龍ッ……僕のどこがそんなに特別だい？　みんなと、どこが違っているの!?」

「違わないさ、どこも……」

どちらにも嘘だとわかっていた。来龍がかすかにタメ息をつく。

――お前がもっと、おれたちを見下すような嫌な奴ならよかったのにな。

アカデミアでも成績の優秀な者たちは、やはりエリート意識が強くなりがちだった。来龍の大嫌いな何人かは、優越感たっぷりで、自分以下の者に氷のように冷たい。けれども、そうした連中の一人になれれば、少なくとも涼にとってはさいわいだったろう。その気になれば、おおぜいの取り巻きを従えて、なんでも命令できたはずだ。

だが、あいにくと涼は違っていたのだ。

——こいつはむしろ人より優しい。素直で、優秀で、すべてに群をぬいているくせに、それをふりまわさなかった。どうしてこんなふうになれるのか、いつも不思議に思っていたくらいだ……。

うつむいたまま、ひとりごとのように涼がつぶやいている。

「僕はもうじきアカデミアを卒業する、ここを出ていかなきゃならない。そうしたら急に怖く……なったんだ。来龍、ここを出れば、僕はいまよりもっと一人になるのだろうか？　それからいつまでも一人で、一人きりで……それを考えると怖くてたまらなくなる！」

彼はアカデミアが見つけた最高のダイヤモンドだった。

みがけばいくらでも光を増す。

——ああ、そうだ。だから、教授たちもこいつをダイヤモンドのように扱っていた！

〝涼・雨宮の能力を傷つけるな！〟

少しでもその恐れのあることは、彼らは決して涼のまわりに近づけさせなかった。

たとえば、アカデミアの同室者はコンピューターで無差別に決められる。

だが一部の人々は、できるなら涼の同室者も選びたかったのだ。もっと成績・家柄ともに、非のうちどころのない生徒を選びぬいて一緒にさせる……しかし、さすがにこれはアカデミアの平等主義に反するとして、学長が許可しなかったという話だ。

学生たちでさえ、なんとなく涼を別格として考えていた。

〝涼は自分たちとは違う〟

つねに見つめるだけで、誰もうかつにそばに来ようとはしない。

来龍でさえ、この前、涼の肩に手をおいたりしたのは、いつのことだったか思いだせなかった。

「……なぜ僕だけがこうなんだろう？　僕だけいつも一人だ。何がいけないのか、どうしてもわからない……ふつうでないのは、僕のせいじゃないのに」

「涼、そうじゃなくて、おれたちはただ……」

とつぜん来龍の心に、怒りに似た感情がひらめいた。

――アカデミアのやり方は正しかったんだろうか⁉

アカデミアの方針に疑問をいだいたのは、これがはじめてだ。だが、

――涼に関するかぎり、何かが間違っていた。おれたちはみんな、彼の能力だけを大事にして、そのあまり近づきすらしなかったんだ。だがコンピューターなみの頭脳を持っていても、こいつはコンピューターなんかじゃない！　そんなふうに扱われたら、かえって傷つくんだ‼

いつのまにか彼はこんなに傷ついている。なぜ気がつかなかったのか……とっさに心が痛んだ。

「……本当に、ちょくちょく逆さにしてつるしてやればよかったな」

「え？　来龍（ライロン）？」

来龍は苦笑して立ちあがった。

「なんでもない。それより涼……お前、卒業したらどうするつもりでいるんだ？」

アカデミアの最上級生は、卒業の間近（まぢか）になると、それぞれ希望する方向を文書にして学長に提出する。大半が、各政府の機関の要職についていた。

「おれは結局、ヒンドゥースタンの副公使になったよ。笑うなよ、秘境（ひきょう）もいいところさ！　でも、まあ郷里のそばだし、のんびりやるつもりなんだ」

各自の行く先が決まってしまうと、誰もが涼の今後について知りたがっていた。

ところが、これがいっこうに決まらない。何か大きな問題があって、差し止められているようすなのだ。だが、何が問題になるのだ？

涼・雨宮が望むなら、どんな難関も開かれないはずはないのに……。

「まさか、いきなり国家元首になりたいなんて言うんじゃないだろうな？　いくらお前でも、いきなりは無理だぞ……」

なかばは本気の顔で来龍がたずねる。まさか！　やっと少し笑いながら涼が首をふった。

――まあ涼なら、そうだな……どこか欧州の公使なんてのが適当かな？

するといったい何が問題なんだ……と言う来龍の問いに、涼がまた顔をふせた。

「僕の希望は、アカデミアの教官として残ることだったんだ」

「なんだって!?」
「アカデミアの教授は名誉職で、経験がいる。僕は……できるならアカデミア初等科の教官になりたかった。僕とおなじ年ごろの……」
そう言う涼の声が、やや低くなった。
「だけどひどく反対されているよ。学長からも、何度も呼び出しを受けているしね」
来龍の手が無意識にあがって、また頭をかきむしった。うなり声にギョッとした涼が顔をあげる。
あっけにとられた涼が見守るなか、そのまま彼はかなりのあいだ、あたりを歩きまわっていたが、やがて窓のそばで立ちどまってふりむいた。
「学長が反対するのは当たり前だ。それはいけない……それはダメに決まっているよ！」
――どうしよう、こいつは完全に間違っているんだ。学長の反対は当然だ！　おれは涼ほど頭がいいわけじゃない、でもこれだけはわかる、知らせてやらねば……。
「涼、お前は間違っているぞ!!　おなじ年ごろのなかにいたって、お前の欲しいものはたぶん手にはいらない。それとも、一人じゃないと自分に言いきかせるつもりか？　すぐにウソだとわかるだけさ！」
相手の目がくもるのを見て、困ったような顔になる。だが、
「……だが、そうなるんだ。涼、お前にはおれたちなんかの倍以上の能力がある。いいや、

実際あるんだからしかたがないだろう!?　お前の気持ちはわかるよ。だけど、そんなふうに自分の力を殺して……ないふりをしようとしたって、きっといまより、つらくなるだけだ」

それから、窓の外にまた目をやった。

「それにね、涼。うまく言えないけど、お前の力は絶対、使わなければならないんだ……」

そして、手招きで窓のそばへ呼びよせた。

「見ろよ、ネオ・ナリタだ」

遠く、南東の方向にネオ・ナリタの夜景が見えていた。

暗い夜の海に浮かぶ、夜光虫のようにネオンが光っていた。

「あそこに行ったことがあるかい?」

涼は首をふった。

「そうだろうな、おれも、ここにくる途中で一度、飛行場に降りただけだよ」

アカデミアが創設された当時は、ネオ・ナリタもまだ新進の都市だった。

最新の空港があり、環境もアカデミアが設置されるにふさわしいと思われていたのだ。

しかし、過去半世紀のあいだにネオ・ナリタの街はどんどん荒廃していき、現在では最悪の犯罪都市と呼ばれるようになっていた。

ナリタ・アカデミアの移転も何度か計画されていたが、さまざまな事情で実現はしなかった。だが、もう数十年のあいだ、ネオ・ナリタの都市とアカデミアはほぼ完全に切りはなさ

れ、分離した状態にあった。
　アカデミアの生徒が市街に入ることは、基本的に禁止されていたし、好奇心の強い来龍も行ったことがなかった（何しろ生命の保証がまるでない）。まして涼・雨宮には教官の許しが出るはずもなかったのだ。
「……噂じゃひどいところらしい。特にあのあたり、旧市街は。おれはセスナで上空から見ただけだったが、めちゃくちゃ荒れていたよ。犯罪都市とか……もっと悪い噂も聞いたしな」
　悪い噂？　涼がふと小首をかしげた。犯罪都市よりも、悪い噂？
「えたいのしれない教団や、人が化け物になるみたいな話も、昔聞いたんだ……おれもよくは知らないが、かなり悪質な迷信がはびこっているみたいだぜ。
　だけどな、涼、そんなの本当はここだけじゃないんだ！　おれの故郷にだって、ああしたスラムみたいな場所はあった。マア、あれほどじゃなかったけどね……学院育ちのお前は知らないだろうが、アカデミアのような場所は世界にわずかしかない。ここは別世界だ。外には……暴力や犯罪が勝っているひどいところが、いくらでもあるんだぜ！」
　彼は強く涼の肩をつかんだ。
「涼、お前は強い。そう生まれついているんだ。知力も精神力も、何もかも！　だからその力を絶対、捨てちゃいけない。それは何かに使わねばならないものだ。お前の義務で……逃

げることはできないんだよ！」

——それでも来龍、一人はつらい……どんなにつらいか君にだってわからないだろう。僕はもう、耐えられない！

「ああ、泣くなよ、涼、よく我慢してきたよな。えらいぞ……」

いつしか来龍の声は、なだめるように低くかわっていった。

「……泣くなよ。お前はおれら同期の誇りなんだぞ！　ネオ・ナリタの学生、あわせて１００人もが涼・雨宮を理想にしているんだ。おれたちはみんな、お前を誇りに思っているんだから……」

その１週間後、涼はアカデミアの学長室に呼ばれていた。

進路のことではない、別の用件だった。

「ネオ・ナリタの新しい市長が、かねがね君に会いたがっていたのだよ。16歳の首席の話を聞いて、ぜひ会ってみたいとね。それで今朝とうとう、官邸から招待状がきた。行ってくれるかね？」

学長は好意のこもった目で、涼を見て微笑んだ。

「そこのファイルケースの中に、君が在校中に提出した論文がいくつか入っている。私の一

存で、選ばせてもらったが……市長にお見せするといい」
みずから立って、ケースを手渡した。
「しっかり持っていくのだよ、涼。君の在学中の貴重な成果だ」
「はい、学長」
さすがに誇らしげに頬をそめて、涼がケースを受けとる。ナリタ・アカデミアの学長は、その任にしてはまだ若いほうで、詩人として著名な人物だった。
アカデミアの生徒はあわせて1000人もおり、学長が個人的に面談することはあまりない。涼でさえめったに会うことはなかったが、それでも全生徒に敬愛されていた……鷹のような知的なまなざしは、時には厳しく、時には力づけるように柔和である。
アカデミアの学生の中でも、特に涼は彼を尊敬していた。おそらく涼に両親がなかったせいもあるのだろう。学長はときたま涼をこの部屋に呼んで、語らう時間をもってくれる。
めったにないことだが、それでもその時間は涼にとっては大きな楽しみだった。彼の前に立つと涼はいつも暖かい、誇らしいような気持ちになれてうれしかった。
涼にとって、彼は父にも似た存在となっていた……。
「君の進路について、まだ考えは変わらないのかね」
「……はい」
ためらいがちにだが、涼がうなずいた。先日、来龍に言われた言葉は、彼の心に強い印象

をあたえてはいたが、まだ決心はつかなかったのだ。
学長も一度吐息をついたが、わざと明るい表情を見せて、
「いいだろう、とにかく今日は行ってきたまえ！　市長からの招待は名誉なことだ。それに、実を言えば私も我がアカデミアが誇る英才を、おおいに自慢したいのだよ！」
一礼して去っていく涼の姿を、彼は笑顔で見送った。
アカデミアの白の礼装が、なんとよく似合うのだろう……。

屋上のヘリポートから、アカデミアの特別機が飛びたつ。
「……すこし横風が強いが、心配はいりません」
腕に自信のパイロットが、そううけあった。
風が強く、二人乗りの小型機はときどき大きく揺れる。気分は悪くないか……心配して声をかけてくれたパイロットに、涼は、
「ありがとう、でもまだぜんぜん平気です……乗り物には強いみたいだ」
やがて、ネオ・ナリタの上空にきた。
「ほら、ネオ・ナリタ……旧市街です」
――ここが、来龍の言っていた……。

涼はふと窓の外を見た。アカデミアの来龍は、その数日前すでに赴任先のヒンドゥースタンにたっていた。〝じゃあな、涼！　ひと足お先に〟と軽く手をふって行ってしまったあとは、やはりポッカリとさみしくなった……。

涼が身をのりだすようにして、下を見おろしたときである。

「おッ、しまった!!」

突然、パイロットの叫び声がして、機体がガクンと揺れた。

「どうしたんですか!?」

「……そ、操縦桿がきかない！　故障かッ……」

こんなときにッ……それでもこのパイロットは何度となく機体のバランスを立て直そうと試みたが、この日は風がとても強く、思うようにいかなかった。下はあいにくネオ・ナリタの市街だったので、不時着もできない。

――もうダメだ、この機は落ちる!!

絶叫するひまもなく、機体は斜めになったままネオ・ナリタの旧市街につっこんでいき、続けて乗員は激しいショックを受けた。

……衝撃から先に意識を取りもどしたのは、後部座席にいた涼のほうだった。

パイロットはまだ操縦席で気絶している。彼を機外に運びださねばならない、とまず思った。すぐにも機体が爆発するかもしれないのだ。

さんざん苦労したあげくに、なんとかパイロットを引きずりだすと、呼吸を確認した。

――まだ時間があるだろうか？

涼はふりかえって、もう一度機内に戻ろうとした。学長から渡されたファイルケースを助けたかったのだ。

だが、それにはもう遅かった！

機体から、わずか数歩まで近よったとき、ドーンという音とともに目の前が燃えあがった。火柱が立ち上がり、爆風が涼の身体を簡単に数十メートルも後ろへふっとばした……。

……今度は気がつくまで長い時間がかかったらしい。

目をあけると、涼は自分がゴミ置き場に半埋まりになっていることを発見した。爆風でここまで飛ばされていたのだ。

たまたま、積みかさねてあったダンボールの山にぶつかったので生命があったようだ。

だが、たたきつけられた身体じゅうが痛んで、ひどくめまいがした。

むこうではまだ炎上が続いていて、すでに消防や警察の車などが集まっているようだが、涼の意識はまだぼやけたようにうまくまとまらず、離れた場所から、あのパイロットが救急車に収用されるようすなどを、ただボウッと見ていただけだった。

煙を吸いこんだ喉が、ひと呼吸ごとに焼けるように痛む。
——そうだ、水を……。
狭い汚い小路をへだてた向こう側に、水道管が見えていた。そこまで行けたら、きっと水が飲めるはず……まだぼんやりした頭で涼がそう考え、ふらつく足で歩きだしたときだった。
「あぶないッ。どいてよ、このまぬけッ！」
ちょうど通りの端から全速力でつっこんできた赤い自転車の主が叫んだ。
彼女は立ちすくむ涼をよけようとして、かえって自分から両方をまきこんで路上に倒れこんでしまった。
横倒しになった自転車の下から、景気よくののしる声がひびいた。
「……いったいぜんたいどこに目をつけて歩いてんのよ！　このバカッ、ウスノロの大まぬけ！」
ガンガン怒鳴りながらはいだしてきたのは、ポニーテールに赤いジャンパーを着た少女だった。そばかすだらけでやせていて、おっそろしく気が強そうだ。
「お猿ッ、昨日二本足で歩きだしたばかりってやつなんでしょう!?　しっかり動物園で練習してからでてらっしゃいよねッ。まったく、あんたみたいなバカ見たことないわ!!」
……ふいに涼は、その少女から目が離せなくなってしまっていた。

「ああ僕……僕、そんなこと言われたの、生まれてはじめてです」
少女はあきれ顔で、指をつきつけた。
「フン、あッきれた！　どこの星から来たのよ？　地球の尺度じゃ、あんたはトンマよ！」
わざと手荒く、音をたてながらガタガタと自転車を起こす。
――チェッ、手も貸さないのね！　レディーが困っているのに！
涼はただ、めまいがして身体が動かせなかっただけなのだが……。
自力で自転車を起こし、あたりにふりまいた荷物を拾いおえてから、最後にもう一度、彼女はふりかえった。相手はまだグッタリして、路上に横たわっている。
のぞきこむと、笑顔だけは一人前に、
「あ……大丈夫ですから」
「バカバカッ、大丈夫なわけないでしょう!?　もうッ、世話がやけるわねえ！」
少女は驚くべき意志の力でもって、涼と大事な自転車の両方を手放さずに（すこし目をはなすと盗まれてしまう）、近くの食堂にかつぎこんだ。
「マスター！　マスターってば！」
ようやくかつぎこんだ涼を、手荒くテーブルの席に座らせると少女は大声で、
「あのねマスター、このバカに食べ物やって、ハンバーガーがいいわ。ダブルでねッ」
「おやおや、友達かい？」



「ううん、こんなまぬけの知り合いいないわよ。やんなっちゃう。こいつったら、ゴミ箱をあさろうとしてたんだから」

「ちょ、ちょっと待って！　それは違いま……」

しかし少女は意外なほど優しい声になって、涼の手をとり、

「いいのよ、恥ずかしいことなんかないんだから。お腹が空いていたんでしょ？　わかっているんだから、バカね」

見つめられて、なぜか涼は何も言えなくなっていた。

「あたし真夜子、あんたは？」

「……涼です」

真夜子と名のったこの少女は、赤茶けた髪を後ろでポニーテールにしていた。

そばかすだらけでやせた顔に、目だけが油断なく大きい。

彼女の目にうつる涼は、顔も着るものもまっ黒に汚れていて……アカデミアの礼装もズタズタになっていた。爆炎とゴミ置き場につっこんだ結果である（真夜子の自転車のタイヤも一役かっていた）。

……どう見ても、宿なしの浮浪児にしか見えなかった。

――腹ペコのくせに見栄はっちゃって、ゴミ置き場でへたばっていたくせに。とんでもないバカだわね！　よかった、今日はお金があるからおごってやれるわ……。

彼女は、顔いっぱいに大きな笑顔を浮かべた。

マスターは二人分のハンバーガーを作って持ってきた。
「ひとつは私のおごりだよ。二人で食べるといい」
気がつくと、涼は本当にひどい空腹になっていた。時計を見ると、もう4時……本当なら、市長官邸で昼食会に出ているはずだったのだ。
かけら一つ残さず食べおえた涼を見て、〝そら、ごらんなさい〟というように真夜子が笑った。
「フフン、さあお腹もいっぱいになったらグズグズしないでね。来なさいよッ」
言うなり、乱暴に腕をつかんでひっぱりだした。
「あ……あの、どこへ行くんですか？」
「家に決まっているでしょう、ボンクラ！」
何も言うひまもなく、真夜子は強引に涼を、住んでいる場所まで連れ帰った。
そこは旧市街の、使われなくなった廃品集積場である。
一角に、昔の倉庫があって、そこが真夜子の〝家〟だった。
廃車にされたトレーラーやバスなどが、背景に山と積まれている……錆びた鉄くずと、金

気の匂いが強くあたりにただよっていた。
頑丈な錠前のナンバーを合わせて、ひっこぬいた真夜子は、
「さあ、開いた。はいんなさい！」
「あの……真夜子さん」
「真夜子でいいわ」
そう言ってから、彼女はクルリとふりむいた。
「あんた絶対言っておくけど、もし一人で寝ぐらもないくせに、なんとかできるなんて考えているなら甘いわよ。あんたみたいなドジはね、日が暮れたらアッというまに人狩りにあっちゃうわよ！　そしたらどうなると思う？　バラバラにされて、移植用の臓器として闇で売られちゃうんだから……運がよくても強盗に殺られるだけだし、つきについていても朝までには、身ぐるみはがされているわ！　で、三日後には街角でのたれ死によッ」
「そ……そんな、でも僕は……」
恐ろしい予言を次から次に並べて、ドギマギしている涼をなかに押しこんだ。
「なぐるわよ？　これ以上、つべこべ言うと」
目を見ると、本当になぐりかねないようすである。
涼はつい、うなずいてしまった……ポケットに手を入れると、アカデミアのコールボタンに触れる。アカデミアの生徒が、学外に出るときにはかならず持たされる発信連絡装置だ。

たとえどこにいても、このボタンを押せばたちどころにアカデミアにその居場所が伝えられる。

涼はポケットから取りだして、そばの棚の上にそれをソッと置いた。

――明日、連絡をとればいい……。

家の中は、外観よりずっとましで、意外にも居心地がよさそうだった。

二つのしきりが床を三つにわけていて、台所、大きい部屋（居間）、真夜子が寝る部屋、となっているようだった。

真夜子は自転車を大きい部屋まで持ちこんだ。ここには、どこからか拾ってきたらしいテーブルや椅子、ソファーなどがあり、お粗末だが緑の鉢植えまである。

部屋の隅に上につながる階段が見えていて、真夜子はそこを指さして、涼のベッドは上だと言った。涼はおとなしくうなずいた。

「はい、真夜子さん」

「真夜子でいいったら！　ところで、まずあんたは絶対に身体を洗ってちょうだいッ。そのままじゃ、人か生ゴミかわかりゃしないわ」

涼もつくづく自分の姿を見て、同意見だと思った。

……おとなしく湯をあびている涼に、ドアごしに真夜子が声をかける。

「これ不潔みたいだから焼いちまうわよ！　代わりに服をかしてあげるから」

出てきて、用意された真夜子のセーターなどを着た涼を見ると、真夜子はまず目を大きくみはり、続いてケラケラ笑いだした。

「やだ、あんたって、女の子みたいな顔してるのね！」

なぜ笑われるのだろう？　涼にはよく理解できなかった。

でもきっと喜ばれているんだ……涼がそう考えて、おずおずとはにかんだような微笑みを返した。ところが、真夜子はうってかわって不機嫌な顔つきにかわると、邪険にギュッとつねってから、

「……ニヤニヤしないのよッ！」

今度はなぜ⁉　いったい、何が気にさわったのか……涼はとまどうばかりだが、真夜子の気持ちはおだやかでない。

――なに、こいつ、男のくせに……もしかして、あたしよりずっとかわいいじゃないの⁉

機嫌をなおすと真夜子は、涼を相手にさかんにおしゃべりをはじめた。

鉢植えに水をやったり、くるくる動きまわりながら、たえまなくよくしゃべる。質問もあったが、自分のことも熱心に話した。

この少女は、どうやらずっと一人で暮らしてきたらしい。

家で、おしゃべりを聞かせる相手がいるのがうれしいのだろう……楽しそうな声を聞いてるだけで、涼もなぜか楽しかった。

——なぜかなあ？　この人の声を聞いていると、とてもいい気持ちがするんだ。いい気持ち、すごくいい気持ち。

長いことかかっていた病気がなおったみたいな。

……すぐに涼は、真夜子が自分とおない年であることも知った。だが、それにしても不思議でならない。彼女はたった一人でここに住んでいるのだろうか？

両親は、きょうだいはどうしたのだろうか？

「誰もいないわ。あたしは捨て児だったから」

真夜子はあっさり言って、肩をすくめた。

「旧市街じゃめずらしくもないわよ。涼、あんたは？」

いません……その答えを聞いて、真夜子はふと優しい笑顔を見せた。それからわざと大きくのびをしてから、

「アーア、あんたのおかげで今日はサンザンだったわ！　写真撮りそこねちゃった」

——写真？

「そうよ、事故があったでしょう？　どこかの小型機が落ちたのよ。すぐそばにいたから、すっ飛んでいっていちばんに撮ろうと思ったのに、どっかのボケがあたしの自転車の前にフ

ラフラ出てくるんですもの」

事故……思いだして、涼の身体がすこしふるえた。

「……でも、事故の写真なんか撮ってどうするつもりですか？」

「あたしね、新聞記者になりたいの！」

真夜子は手をあげて、後ろの本棚を指さした。

「……見て、あれみんな本なのよ。あたし捨て児だったと言ったでしょう？　育ててくれたのはオーエンっていう人で、新聞記者だったの。すっごくいい人だったわ……」

「その人は、いまどこにいるのですか？」

涼の質問に、真夜子は少し小さな声になって、

「もうだいぶ前に死んだわ、取材中に流れ弾にあたって助からなかったの」

上のベッドは以前、その人のものだったという。

「オーエンはあたしに勉強も教えてくれたわ、だからあたし読めるし、書けるのよ！」

ネオ・ナリタ旧市街に学校はない。

子供たちの多くは、字もろくに習わずに大きくなる……涼には、どれもはじめて聞くことだった。

「だけど、あたしはオーエンから習ったこと忘れやしなかったわ。見て、涼、あれみんなオーエンの本で、あたしもぜんぶ読んだんだから……それで、あたしもいつか新聞記者にな

りたいわけ！」

誇らしげに真夜子が言う。涼がその本棚を見ると、たしかにたくさんの本が積んである。〝みんな読んだのよ！〟。それはつまり、この少女が学校にもいかず、勉強するチャンスもなしに、この街で……そのオーエンとかいう育ての親に教えられたことだけをたよりに、たった一人でやってきたということにほかならない。

本棚、一つ分……アカデミアにくらべれば、ものの数にもならないが、その努力を思うと涼は驚かずにはいられなかった。

「……どれも社会関係の本ばかりだ。すごいな、むずかしかっただろうに……」

感動した涼がつぶやくと、とたんに真夜子の手が飛んできた。

――ウッ、痛い！　どうして⁉

「あんた読めるの⁉　生意気ッ！」

「……い、痛かったァ」

目に涙までためている涼に、真夜子は、

「うるさいわねェ、なによ……男でしょう？　我慢は薬よ！」

理不尽なことを言う。

――こ、この子、かなり乱暴なんだ！

涼もさすがにギョッとなって、思わずあとずさり、真夜子の手のとどかない場所に引っこ

んだ。次、いつなぐられるかわかったものではない。

真夜子は平気な顔で、

「そうよ、あたし新聞記者になるのが夢なの。だけど、もちろん簡単にはいかないわ。いまなんか、ただの配達係だものね。オーエンのいた新聞社の編集長が、前に約束はしてくれたの……いい記事がとれたら採用してくれるって。だから、待ってなさい……いつか特ダネをつかんで売りこんでみせるんだから！　ねッ、涼、どう思う？」

目をキラキラさせて、ふりむいた。

そこで、涼のコンピューターとまで呼ばれた頭脳に、何か大きな手違いが起こったようである……ついさっき、彼女になぐられた記憶が完全に消去された。

「……あたしいつか、新聞記者になれるかな？」

自分からそばにもどってきて、足もとにうずくまった。生き生きした真夜子の目や表情を、できるだけ近くで見ていたかったのだ。そして、

〝もちろん、あなたならきっとなれる！〟

そう言うつもりだったのに、なぜだろう？　今度は突然声がうまく出ない……。

涼はひたすら笑顔で自分の気持ちを伝えようとした。

警戒心をかけらも持たない、澄みきった明るい目をして、ただもう一心にうなずいている……真夜子はそれを〝バカ〟だと思った。

――こいつ、どうせわかってないんだわ……頭が悪いから！
だけどかわいいところもあるわね？　真夜子はフフンと鼻で笑ったが、それでも少しうれしそうだ。
「ね、ちょっとお腹すかない？」
寝る前に、軽い夜食を作ろう……真夜子は涼に命令した。
「たいしたものはないわよ！　でもパンがあるし……トーストができるし」
目玉焼きをのせたトーストができる。
「あんたは居候なんだから働くのよ。卵、焼きなさい！」
さっさと涼にフライパンを持たせると、自分はちょっとキッチンをはなれてしまった。
フライパンを押しつけられて、その場にたたずむ涼。
アカデミア代表の彼に、たった一つできないことがあるとすれば、それは料理だった。
――卵を、焼く？
フライパンを見つめて推理する。彼女がこれを手渡した以上、この道具を使うのだろう。
旧式のガスコンロがある……火はこれに違いない。
どうにかコンロに火をつけたところで、真夜子がむこうから叫んだ。
「……ちょっと！　できた？　ちゃんとバターひいた？」
「アッ、はい！」

あわててフライパンをコンロにかけ、卵をソッと置き、（言われたとおり）バターをひとさじくわえてみたが、

——何かが変だ。

という感じが、どうしても消えさらない。新聞をかかえてもどったきた真夜子をふりむいて、

「あの……これで？」

——キャー、このバカッ!!

新聞をほうりだして駆けよったのだが、時すでに遅く、パーンッ！　という音高く、卵は破裂した。

（作者注・あぶないからけっしてマネしないでください！）

熱くなった黄身と白身が、部屋いっぱいに飛びちる。

「真夜子、ケガはッ!?」

叫びかけたところでギクリとした。

——ハッ、これはむちゃくちゃ怒られるぞ！

涼の声が喉のあたりで凍りついてしまった。怖い。僕はこれからどうなるのだろう？

頭をかかえてしゃがみこんでいた真夜子は、やがて大きく息をついてから顔をあげて涼のほうを見た。

その目がうるんでいる。

――かわいそうッ……こんなにも頭が弱いなんて！　こんなの放りだされたら、もうおしまいじゃないの、死ねって言うようなものよね!?　いいわ、これからはあたしが面倒見てやるわ！　食堂のマスターが人手が欲しいと言っていたっけ……明日、連れてってやろうっと。

「大丈夫、心配しなくていいわ。あんたも大丈夫ね？　でも、もう卵がないから夜食はパンだけよ。我慢できる？」

「はい、もちろん、真夜子！」

いい子ね……という顔をしてから、真夜子はあたりの壁を見まわして、

「アーア、台所じゅうメッチャクチャね。これ、明日あんたがかたづけるのよ！」

もちろん涼は大きくうなずいた。

パンだけの食事がすむと、真夜子は、もう寝るからはやく上に行くように……と涼を追いあげた。

「……ほら、いい？　ベッドに入った？　電気、消すからね」

明かりを消して、真っ暗になった……上では涼がゴソゴソと固い毛布を身体にまきつけている気配がする。真夜子はふと、自分のベッドから声をかけた。

「ねえ、涼。あんた、もともとこの街の人間じゃないでしょう？　ちょっと違うわね」
「ええ……遠くから来ました」
上から、ためらいがちな答えがあった。
指先が、喉にかけたアカデミアの認識票にふれている。
それからすぐに涼は寝てしまったらしい。なにしろたいへんな一日だったのだ。
だが、真夜子のほうは、まだしばらく暗闇で起きていた。
毛布のはじを握って、ちょっと考えている。突然、見も知らぬ他人の涼を住みかに入れる危険が、頭に浮かんできたからだった。
——あんな情けない奴だもの、大丈夫だと思うけど……。
それでも、夜中、強盗にナイフで喉を切られた事件などが頭をチラチラした。
それに……真夜子はそうっと起きあがって、戸棚から古いショットガンを出してきた。弾は1発だけはいっている。
——あんな顔でも男は男なのよね？　男なんて、みんな狼だっていうし……もし、夜中にここに来るような気を起こしたら、いいわよ、これで膝を撃ってやる！
これほど無駄な用心もちょっとない……真夜子はそれから約30分、ベッドでショットガンを抱いてがんばっていたが、そのうちあきて寝てしまった。
涼はといえば、2階で朝までグッスリ眠った。

アカデミアの優等生は、そんなことはしないのだ。

さて、ようこそ涼……悪霊と魔人の伝説が息づくこの街、ネオ・ナリタへ！

〝あやしげな教団と化け物の話〟悪質な迷信だと来龍は笑いとばしたが、彼の知らないことがらは、この世にまだまだたくさんある。

アカデミアの涼でさえ、知らないことはまだあるのだ。

この街には邪教も悪霊も、たしかに存在する。

ネオ・ナリタをいま、支配しているのは邪教の力だったが、悪霊のほうだって忘れてはならない……アルディーンと呼ばれるその魔力と、涼、君はこれから戦うことになるのだから。

この夜から魔都ネオ・ナリタに、まぎれもなく変化の風が吹きはじめていた……。

第二章　闇の皇子・アルディーンの復活

それから2週間……ネオ・ナリタ旧市街には、まだなんの変化もなかった。

……ここで少し、この街について話をしておきたい。

この街は晴れた日でも空の色が灰色で、ビルとビルのあいだの狭い通りは夜になると闇に沈み、そこでは何があるかわからない。

警察はほとんど機能しておらず、今年新しく市長になったサー・雪村が、旧市街の治安回復をめざし必死の犯罪撲滅作戦を進めてはいたが、そんなの誰も信じてはいなかった。

なぜなら、この街を支配しているのは、実際には〝七賢人教団〟であったからだ。

七賢人教団。

この奇妙ないまわしい名前がはじめてネオ・ナリタで聞かれたのは、はるか昔のことである。彼らは旧市街を本拠地として、奇怪な儀式や暗殺の呪法をおこなっていた。

彼らは一時、なかなかの勢力を得ていたが、いつのまにかその力を失い……もときた闇のなかに消えていってしまった。それが約70年ほど前になる。

ひとにぎりの人間が細々と教団を続けてはいたが、それだけの話だった。
そして時がたち……人々が教団の悪夢を忘れかけたころに、デュークがあらわれた。
――どこからか突然あらわれたデューク、彼が、七賢人教団をよみがえらせた。
教団の組織をのっとり、生け贄の儀式を復活させた。
再生した七賢人は、以前にもまして凶悪になった。
〝欲望をかなえたいものは来たれ〟。これが新しい七賢人教団の呼びかけになった。
計画された強盗、殺人、武器・麻薬の密売、そしてネオ・ナリタのお家芸・人身売買……まるであらゆる悪のコレクションをするかのように、デュークの名ですべてが行われた。
彼には不思議な噂があった。
――デュークには、なにか人知を超えた恐ろしい力があるとか？
いずれにせよ、彼とその組織に歯向かう人間は、いまのネオ・ナリタには一人もいない。
7年前、彼はあらわれるのとほぼ同時に、この街で彼の邪魔になりそうな有力者を全員、その家族ごと一夜のうちにみな殺しにしてしまったからである（この事件は通常〝七賢人の虐殺〟と呼ばれている）。
そう……ネオ・ナリタはいまや完全にデュークの手のうちにあった。特に旧市街の状況は厳しかった。七賢人とその犯罪の中心地。おとなしく暮らしていても、明日は何かの犯罪のまきぞえになるかもしれないのだ。

教団の人間は別として住民はみな豊かではなく、流血沙汰はしょっちゅう……しかも今年は伝説の魔物アルディーンの復活の年でもあった。

前回は17年前。旧市街に住んでいたごくふつうの青年がとり憑かれて死んだ。

いや、正確には自分の家族5人をひき裂いたところで発見され、追いつめられて殺されたのだ。今年は誰だろう？　大人たちは、しばしば神経をとがらせていた。

まさにネオ・ナリタ最悪の年……逃げだせるものならこんな街から逃げたいと、住民の誰もが言っただろう。

――だが、涼だけは、ここでこのうえなく幸せだった。

「涼、いる？　マスター！」

夕方。例によって、嵐のように飛びこんできた真夜子が、狭い食堂を見まわして叫んだ。

「ああ、すぐもどって来ると思うよ。ちょっとそこに座って待っておいで」

あの事故の日から、ちょうど2週間……涼はまだ旧市街の、真夜子の家にいた。

アカデミアへの連絡は、まだされていなかった。

事故の翌日、真夜子は朝いちばんで涼を（強引に）この食堂に連れていき、マスターに（強引に）やとわせた。

「しっかりやるのよ、さぼると承知しないからッ」
そう言いすてて、自分の仕事に出ていってしまう。あとには、呆然としている涼とマスターが残されていた。
「ええっと、涼といったっけ……君、料理できる？」
「いいえ」
「レジ、打ったことがある？」
「……いいえ」
さあ、困った……あきらかに不安そうな顔つきのマスターを見て、涼もうつむいてしまった。マスターは声をはげまして、
「それじゃあ、その……何ができるかな？」
言われて、涼はちょっと考えこんでいる。
——幾何と科学は得意だった。文系の講義もなんとかできるだろう。シミュレーション（模擬）だったけど、中型都市国家の統治もしたことがある。あるけど……。
どう考えても、ここで役にたつことがらではないぞ。
——食堂で……医師免許って……いるだろうか？
爪をかみながら、一人で首をふりつづけている涼の肩を、マスターの手がポンとたたいた。

「よし、それなら床掃除と皿洗いからやってみようかね。それならできるだろう？」
「はい、それならできそうです！」
よしよし、とマスターはわりにあたたかい目で、熱心に床をはいている涼を見守り、夕暮れになって自分の仕事を終えた真夜子が戻ってくると、ニッコリうなずいてみせた……。
それから数日のあいだ、涼は何度も棚にのせたコールボタンに目をやった。
――今日こそ、今日こそ連絡をしなければ。
しかし、ボタンはついに押されなかった。
心配しているはずの人々のことを考え、アカデミアへの義務を思い、そして真夜子の元気な声を思いだすと……どうしても押せなかった。
――あと一日だけ、せめて……。
そして一日ごとに、涼の心のなかでアカデミアは遠くなっていった。
昼はマスターの食堂で働き、夜は真夜子と廃品置き場の〝家〟に帰った。
彼はよく笑うようになった。真夜子は、よくそれをしかりつけた。
まだ認識票はいつでもその胸にさげていた。だが、アカデミアのコールボタンは、いつのまにか棚の奥へ……本やスニーカーのゴタゴタしているあいだに押しこまれてしまっていた。
……事故から、ついに2週間がすぎたその日、アカデミアは涼・雨宮の名前を、死亡者と

して正式に卒業者名簿から抹消した。ネオ・ナリタの雪村市長からは、正式な哀悼の手紙が送られてきた。

涼はもしかしたら、この街の本当の恐ろしさをまだよく知らなかったかもしれない。はじめて知った幸福感に夢中で、多くを見ようとはしなかったからだ。

旧市街の街並みは暗く汚く、みんな貧しいみたいだった。廃品置き場での生活も、すべてがアカデミアとは比較にならないくらいお粗末だったが、それがなんだというのか？　真夜子は素敵で、マスターは親切だった。食堂の客はそろそろ涼の顔をおぼえてくれていた。

一度だけ、夢に来龍がでてきて、責めるような目で見ていたことがあった。

このままネオ・ナリタにいれば、どれほど恐ろしい運命が彼を待っているか、涼はまだ知らない。だがわかっていたとしても、彼はたぶん……。

それほど毎日が夢のように楽しかった……空の見えないこの街で。

……食堂の椅子に座り、足をブラブラさせている真夜子は、マスターに話しかけていた。

「あのバカ、どう？　ちゃんとやってるかしら？」

マスターは太鼓判をおした。

「いやあ、いい子だよ！　ほんと、よくやってくれているんで大助かりさ。よく働くし、ま

じめで素直だし、真夜ちゃんにはお礼を言わないといけないねえ」

そう？　……と、真夜子はうれしそうだった。

真夜子の目も、それなりに鋭かったのだ。

――あいつ、どこから来たのか知らないけど、手がゼンゼン荒れてなかったわ。きつい仕事なんかしたことないはずだわね。食堂の仕事だってけっこう心配したけれど、よくがんばっているじゃないの……感心感心。

そのくせ真夜子は、にくまれ口をきいた。

「とにかく救いようもないうすのろなんだから、せめて真面目でなきゃあね！」

「ウーン……真夜ちゃんの言うほどバカな子かねェ？」

マスターは、やや首をかしげた。

「はじめはたしかに、いろいろとびっくりしたけど……」

はじめて涼を連れて来た日、真夜子はまずマスターを店の隅に引っぱって行くと、かなり緊張したようすで〝ひょっとしたら、2かける2もわからないバカかもしれない〟と、ささやいたものだった。〝お願い、使ってやってよッ〟。

「……そう言われてもねェ。あのときは実際、うらめしかったよ。でも、ありゃかなり賢いほうだと思うよ。ちょっと世間知らずで、素直すぎるみたいなところはあるけどね」

それに、けっこうメカに強いんだ……マスターがうれしそうに手をもんで言った。何年も

前にダメになっていた電子オーブンを手はじめに、涼は目につく故障をかたっぱしから直してしまった。

家の後ろに廃品集積場があるのを幸い、足りない部品などもそこで捜しあててくるので、

――もう手放せないね、こりゃ。

真夜子はあきれはてたような顔で、ポニーテールをふる。

「うそうそ、マスター。あいつは根っからのノータリンよ！」

その証拠もあるのだ。

――だって、涼ってあたしがどんなにカンシャク起こしても、まるで怒らないのよ。何を言われても、にこにこしちゃってさ……てんでわかっていないのよ！

たとえば真夜子が、ちょっとしたことで腹をたてて涼に怒鳴りちらす。

〝もうッ、涼のボケ！　ボンクラ！　役たたず！〟

息を切らせ、真っ赤になって怒っている真夜子が、ふと見ると、涼ときたら幸せそうな、ウットリしたような表情でこっちを見ている。まぬけそのものだ。

〝ちょっと……何か言いたいことあるわけ？　あるんでしょう!?〟

〝ええ、あの……もっと言ってください〟

――理解できないわァ、あの頭の中身。きっとくさってんのね？

いつもにこにこしている涼が、勝ち気な真夜子には、歯がゆくてならない！

「そりゃあ、ちょっとばかり機械にくわしいかもしれないけど……でも、どっか根本的にたりないんだから!!　涼にはあたしがついてなきゃダメなのよ、あのまぬけ、世話がやけるったらないわ！」

「真夜ちゃんの〝世話〟ねェ……（恐ろしい話だなあ）」

「なによ？」

マスターは苦笑して、

「まあ、とにかく彼は、真夜ちゃんを頼っているみたいだしね。うまくいってるようじゃないか……あの子、ずいぶん明るくなった。本当に君をしたっている感じだよ」

真夜子は満足そうに笑い、

「真夜子さまの弟分よ！」

マスターの表情が、おもしろそうに動いた。

――弟分？　オヤオヤ、涼もかわいそうに……。

マスターの目から見て、変わったのは涼だけではなかった。真夜子もまた、

――ずっとおだやかになったし、ようやく女の子に見えるようになったねえ。

荒っぽいところはあいかわらずだし、涼を見るとすぐ怒鳴りつけている。

――おまけに涼にしても、見てると自分の気持ちが半分もわかってないようだしね。あまりにも、おっとりしているっていうか……そんなところがまた真夜ちゃんにバカにされるわ

けだ。これはまだまだ先が大変だよ。
　涼がいま、何をしに出かけているか……うすうす知っていた彼は、こっそりほくそえんだ。
「ねえマスター、涼、どこへ行ったの？　ちょっと遅くない？」

　そのころ、涼は近くの通りを急ぎ足で歩いていた。
　手に、もらったばかりの給金をにぎっている。2週間分……それと、マスターは修理のお礼として、いくらかつけてくれていた。
　働いて給金をもらう……涼にとっては、はじめての経験だった。
　それまでアカデミアで、経済学の単位はとってきた。歴史も、シミュレーションも十分にやってきた。
　――だけど、本当は僕はなんにも知らなかったんだな！
　涼の頬が、恥ずかしさで少し赤くなっていた。
　――いちばん、かんじんなこと。お金がないと、何も買えないんだ。
　アカデミアでは、必要なものはいつでも支給された。お金がないとどうなるのか……この街にきて、はじめてわかったのだ。

――お金がなければ食べるものも着るものも手にはいらない。お腹がへっても、寒くても、我慢するしかないんだ。

そして……はじめて真夜子に会った日のことを考えた。

〝マスター、このバカに食べ物をやって！〟

――あのとき、真夜子は僕におごってくれた。僕の分だけを注文したんだ。なぜって、真夜子にはそれしかお金がなかったから……あの日はマスターが好意で二人分を持ってきてくれた。だけど本当なら、真夜子は自分の分はあきらめて我慢するつもりだったんだ。

そのことを思いだすと、いつでも胸がドキドキするくらい、うれしくなった。

――真夜子は僕に食べ物をくれた。自分は食べられなくなるのに。見ず知らずの泥だらけの僕に……アカデミアの首席でもない、この僕に！　ただの涼に!!

誰がなんと言おうと、真夜子は優しい。

怒鳴ってもらうと、すごくうれしいのだ。

――僕はバカで、ボケなんだけど、真夜子は優しいから怒鳴ったりなぐったりして、面倒見てくれるんだ。いいや、なんにもできないまぬけの役たたずだからこそ、気にかけてくれるんだね！

予想もできない暴力がまた素敵なんだ!!

〝お荷物〟でいいんだ、いつまでも真夜子のそばにいたい……せつないほど、いまはそれが

涼の望みだった。

さて……いま、マスターからはじめての給金をもらい、涼はそれをしっかりと手のひらに握って、ウキウキしながら急いでいた。

この街に来て、よくわかった。お金があれば食べるものや着るものが買える。もっとお金があれば、きれいな服や贅沢でいい食べ物が手にはいる。そして、

――17Gあれば、真夜子にあの髪飾りが買える！

通りの一軒の店で見つけた赤い髪飾り、旧市街の店にしては、しゃれたかわいいデザインで、だから値段もそれなりに高かった。

買うと涼の給金など、ほとんどなくなってしまうのだが、それでかまわない。

――だってあれが真夜子の髪にとまれば、きっとよく似合うだろう。真夜子はちょっと自分の髪を気にしているみたいだし……。

はっきり言ったほうがいい。真夜子は涼の抜けるような色の白さや、混じりけのない黒髪をかなり妬んでいた。

〝なによ、男のくせに！　こんなサラサラの髪いらないでしょ!?　みっともないわよッ〟

髪を洗ったあとなどは、涼としてもよくよく注意しないと引っぱられて痛い目にあうのだ。

――と、とにかく、あれならきっと真夜子に似合うし、きっとよろこんでくれる！

さらに足を速めた涼は、ついうっかり人にぶつかってしまった。
「このガキッ！」
相手はいきなり涼をなぐりつけた。思わず、よろめきながらビルの壁につきあたると、手からこぼれたコインが1枚、歩道に音をたてて落ちた。
「……いいもの持ってんだな。よく見せてみろよ！」
ぶつかった相手と、その仲間らしい連中が、すばやく涼を取りかこんだ。
涼は狂犬のような目をしている彼らと、冷静にむかいあった。むこうは涼よりずっと大きくて、いまから薄ら笑いを浮かべているが、ぜんぜん訓練された動きではない。
それなら、涼は自分が負けるとは思わなかった。
――これは僕のお金で、僕には必要なものだもの。悪いけど、あげるわけにはいかない！
それに君たちは、どう見ても〝正当な理由〟でお金がいるのじゃなさそうだ……。
ナイフを持ってるかもしれない……ケガをさせないように気をつけよう、と考えたとき、
「あんたたち、その子に何をするのッ!?」
心配になって捜しにきた真夜子が、案の定チンピラに取りかこまれている涼の姿を見つけたのだ。走ってきた真夜子は、それをかばうように背中にし、連中に向きなおった……涼がハッと息をのむ。
「やめてよ。こんな子、おどしてどうするのよ！　み……見ればわかるでしょ？　こいつは

チビで弱虫なんだから！　乱暴なことしなくても、お金なら渡すわッ」
涼があわてて手のなかのコインをぜんぶ地面に投げだした。わずかな金額に、不満そうな視線が走る。
「……なんだこれっぽっちか」
真夜子はふるえる手で、自分のブレスレットも外してさしだした。真夜子の持っていたった一つのアクセサリーだった。
「さ、さあ、もうこれしかないわ……みんな渡したんだから、もうこの子にかまわないでよ！　はやくどっかへ行ってちょうだい!!」
彼らが去ったあと、ようやく真夜子は息をついた。ものすごく怖かったのだ。
「……真夜子、ごめんなさい、ごめんなさいッ！」
泣きながら涼がしがみついてくる。
――ごめん真夜子、僕がバカだったから！　僕のためにッ……。
やたらに悲しくて、涙があとからあとからとめどなく出てくる。自分がどんなに真夜子を〝守りたい〟と思っていたかはじめてわかった。それなのにたったいま、僕のせいで……。
真夜子はといえば、なによりもまずホッとしていた。
「涼ったら……泣かないのよ。バカねッ、お金くらい……あんたナイフでさされるかもしれないところだったのよ」

「でも、真夜子の髪飾り……大事なブレスレットだって！」

聞いて、真夜子の口もとがちょっとふるえた。

――おバカさんね、そんなこと考えていたのね！　それでこんな夕方に、お金を手に持ったままウロウロしていたのね……あきれた、なんてバカかしら！

叱りつけてやらなきゃならないわ！　と思ったが、手はずっと涼の髪をなで続けていた。

……そのとき、行ってしまったはずのチンピラたちが、バタバタとこっちに戻ってくる気配がした。あわてて真夜子が涼の手をとって、ゴミ箱のかげに引きずりこむ。

「ちくしょう、おまわりだッ！」

彼らは警官に追われていたのだ。

――真夜子、警察だって！

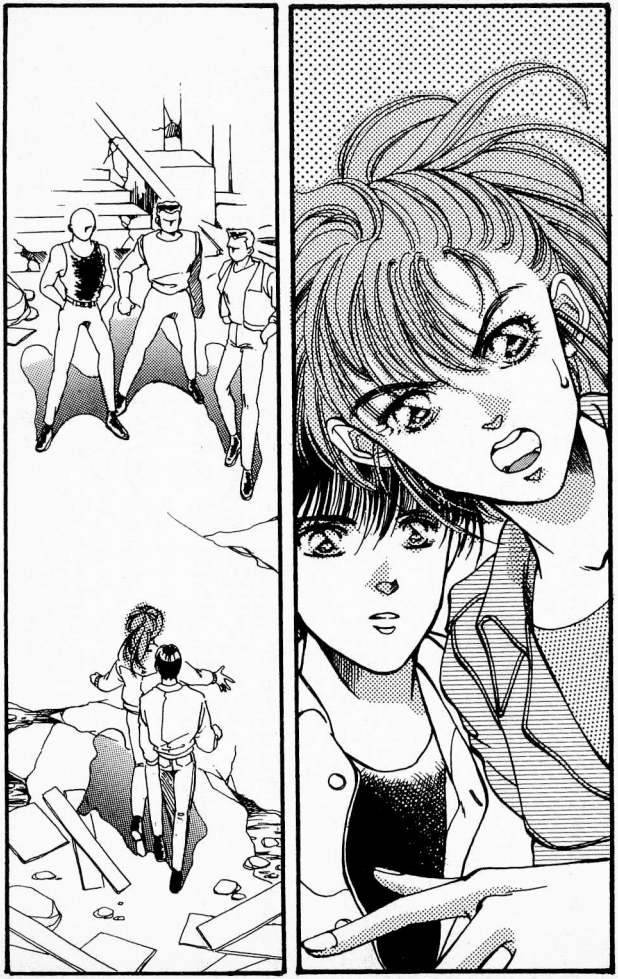
出ていこうとした涼を、真夜子が力ずくで押さえた。

「声を出しちゃダメッ！」

口も無理にふさいだ。どうして？　……すぐにネオ・ナリタの警察官が、路地に姿をあらわした。警官は涼たちの見ている前で全員を射殺し、ポケットから金を取りあげて去っていった。血が、真夜子たちの隠れている路地裏まで流れてくる。

長い時間がたって、安心だとわかるまで、真夜子は涼の口から手を離さなかった。

気が遠くなりかけている涼の耳に、低いささやき声が聞こえた。



「わかったでしょう？　涼……この街は、こういうところよ」

その夜から数日、涼は高い熱を出して寝こんでいた。
次々に怖い夢を見た。
アカデミアから人がきて、無理やり連れもどされる夢。同級生だった来龍が、なぜかアカデミアの白の礼装であらわれて、あの警察官に撃ち殺される夢。
真夜子を見つけに街じゅうを捜しまわり、あの路地裏の血だまりに倒れているのを見つける。
〝どうして!?　誰がこんなことを!?〟
必死に叫ぶと、離れたところにいた別の真夜子がクルリとこちらを向き、仮面のような表情で、
〝しかたないわよ、涼……この街はこういうところだものね〟
そのまま、ふりむきもせずに行ってしまう。追いつけない。
〝悪いけど、あんたとも、もういられないわ。あたし、殺されて死んだんだもの……〟
「……いやだ！　真夜子ッ!!」
悲鳴をあげて目をさますと、真夜子が心配で青ざめた顔でのぞきこんでいるのだ……。

熱がいちばんひどくなったころに、涼は続けて何度も同じ夢を見はじめた。
何度も、くり返して同じ夢を……。
――誰かが来て、僕のすぐそばにいる。
それはしきりに涼を呼び、何か叫び、涼の肩をつかんでゆさぶりつづけた。熱で身体がふるえてるせいだろうか？
――違う、誰かいる！　誰か……それとも〝何か〟だろうか、苦しい、ゆすらないで……僕にどうしろというの？
とまどいながら涼が目をこらすと、ほそい黒い影が一瞬、ゆらめいた。
それは恐ろしいものには見えなかった……むしろ、懐かしいような感じだった。
――言ってることが少しもわからない、風の音みたいだ。
でも何か伝わる……それは涼の中に入りたがっていた。
――寒いの？　それなら、ほら……。
おいでよ……と、何も知らない涼が夢で手をさしのべる。
急にすべてが静かになった。

「アッ、涼、気がついたのね」

ふいに意識がはっきりして、真夜子の声が耳に飛びこんできた。
「真夜子……僕は、いったい……？」
「よかった！　あんた、三日も眠り続けたのよ……心配したんだから！」
いつのまにか、三日めの朝になっていた。
泣き笑いのような顔で、真夜子が抱きしめてくれる。
「あと一日、目がさめなかったらお医者さんを呼ぼうって、マスターとも相談していたのよ！　でも、もう安心だわ。ね、涼、あたしがわかるでしょう？」
もちろん……うなずいた涼に、真夜子は温かいスープの鉢を持たせた。おいしかった。怖い夢をたくさん見たとうったえると、真夜子はいっそう優しくしてくれた。
それから、ふと涼が真面目な表情になって、
「真夜子、聞いてもいい？」
「なあに？　マジな顔しちゃって……」
「この街のこと。真夜子は知っているだろう？　あんな……ひどいことが、よくあるの？」
小声でたずねながら涼は、三日前の記憶をたぐっていた。
あのとき、連中をまるで虫けらのように撃ち殺す警官を見て、涼の心を支配したのは、恐怖ではなくて強い怒りだった。
秩序と規律が正しく守られていた学院では、経験したこともない強烈な感情である。

――まるで全身から炎がたつかと思ったんだ。
その激しさは、身体が耐えかねるほどで……あのとき自分は間違いなく、ショックと、あまりにも激しい怒りのために意識を失ったのだ。思いだすと、変に落ちつかない気持ちだ。
――そうだね、あんなのはじめてだったもの……。
真夜子も厳しい顔になったが、すぐ考えなおしたように、うなずいて言った。
「そうね、涼。あんたにもちゃんと教えておいたほうがいいのかもね。ネオ・ナリタではね、警察はぜんぜん信用されていないわ。全部が全部あんな奴ばかりじゃないけど……でもいい人がいたって、どうせ七賢人にはかなわないんだし」
――七賢人？
「僕は……その名前を、食堂で一度聞いたことがあるけど……」
ひそひそと話していた二人の客たちは、涼の好奇心に満ちた視線を感じると、すぐに黙ってしまった。
七賢人はネオ・ナリタを支配している組織の名前だと、真夜子は説明した。
「この街は、あいつらのものよ、ある意味ではね。くやしいけど逆らったら生きてはいられないんだもの、でもね」
真夜子が勝ち気な目をキラリと光らせてつぶやいた。
「でも、やっぱりあたしはあんな奴ら、軽蔑してやるわ。デュークの手下なんか！　あたし

だったら死んでもならないわッ。お金や願いごとがかなうから、自分から教団にはいる人たちもいるけど、たとえ何をくれるといっても、この真夜子は嫌ッ……絶対、お断りよ！」

怒っているときの真夜子はなんてきれいなんだろう……見とれている涼に気がつくと、

「バカね、涼。あんたはおぼえておかなくちゃダメよ。街でこんな印をつけた場所か、人にあったら、逃げるのよ。近づいちゃダメよ！」

そう言って、奇妙な炎のような形を指先で宙に描いてみせた。涼はうなずいた。

だが、まだ納得できなかった。人々はなぜ教団をそんなに恐れるのか……真夜子の話だと、警察までがかなわないとは。

「だけど、ネオ・ナリタの警察なら、武器もたくさんあるはずだろう？」

武器じゃないのよ……真夜子は少し青ざめて答えた。

「七賢人教団はただの犯罪組織じゃないのよ、デュークがいるわ……教団の主はデュークというの。めったに姿を見せないそうだけど、彼は人を……本当に思いのままにできる力があるって話なの。彼が死ね、と言ったら、誰でも死ぬしかないんですって」

——もっとひどい話も聞いたわ。デュークが殺せ、と言ったら、どんなに嫌でも……、まさか……涼の言葉に、真夜子は真顔で〝本当よ〟とだけ答えた。

朝なのに青ざめた真夜子の顔を見て、涼は驚いていた。低い声で思わず、

「どうしてだろう？　それでも、みんなこの街から逃げだそうともしないなんて……」

逃げて、どうなるのよ……真夜子が奇妙な、すこしきつい声で答えた。
「逃げるってどこに行けるの？　ここは旧市街なのよ、逃げたって、受けいれてくれるところなんかありゃしないわ！　スラムの人間がほかにどこへ行けるっていうの⁉」
うつむいてしまった涼を見て、真夜子の声がちょっと優しくなった。
「涼ったら……そんなに怖がることはないのよ。この街でだって、きっと生きていけるわ……いままでも、あたしやってきたもの。ビクビクすることはないの！　やだ、あんたって本当に臆病ねッ。そんな目をしてなにさ……真夜子がいるでしょ！」
涼はおだやかな笑顔で黙って真夜子を見ていた。
「真夜子って、怖いものはないんだね？」
あたりまえよ！　少女は勝ち気そうな笑顔をして、いばってみせた。
真夜子と会えて本当によかったな……と思いながら、涼は幸せな気持ちのままで、まっさきに頭に浮かんだ言葉をなにげなくたずねていたのだ。
「あのねえ真夜子、アルディーンって、何か知ってる？」
「……アルディーンですって⁉」
いきなり真夜子の顔が、灰色に近いほど変わったのにびっくりした。
デュークの名前がでたときより、もっと青い。
「いやね、涼のバカ！　ア……アルディーンがどうかしたの？　どうしてあんたがその名前

を知っているの!?　その名前、きっとマスターから聞いたのねッ」

涼がおそるおそる首をふった。

「違うよ……夢で見たんだ。夢のなかで黒い服の男の子が、その名前を言って……」

「やめてえッ！」

真夜子は急に身体を起こして、ひきつったような目で涼を上から下までながめ、そのまま……顔をおおって泣きだしてしまった。

涼は、仰天した。

「真夜子……真夜子、どうしたの!?　ねえ真夜子ッ、返事をして！」

「いやよ、涼、どうしてそんな怖いこと言うの？　ウソつき……ウソだって言わないとひどいから！」

「真夜子、ごめん……もう言わないから、ウソだから……」

ぎごちない手で真夜子の肩をなでている。思ったよりもずっと細いのだ。

――ああ、真夜子はずっと僕の看病をして疲れていたんだ。

突然の涙の理由が、すこしわかったような気がした。自分は何か、言ってはいけないことを口にしたのだ。疲れきっていた真夜子は、それで……。

やがて真夜子は泣きやんで笑顔を見せた。乱暴に目から涙をぬぐうと、

「……ちょっと恥ずかしいとこ、見せちゃったわね。でもあんたが悪いのよ、ヘンなこと言

うんだもの、バカな涼！　心配ばかりさせないでちょうだいッ、そうでなくてもここ3日、あたし怖くて怖くて、たまらなかったんだから……」

「ごめんなさい、真夜子……でも怖いって何が？」

――怖いものなんかないって、いま言ったばかりのくせに？

……真夜子はこころなしか赤い顔になった。

「わかんないわ、ただ……心配だったのよ。あんたってかわいいもの。死神っていうのが、もしいるなら、あんたみたいなのが狙われやすいんじゃないかと思ったの」

熱にうかされている涼をたった一人で見ながら、深夜、何度も後ろを振り返ったものだった。

――死神？

ククッと思わず涼が笑った。真夜子の頬にカッと血がのぼる。

「笑ったわね、おくびょうのくせに！　死神はいるわよ、アルディーンだって！　あんたみたいなの、ボヤボヤしてるからとっつかれやすいんだわッ」

――アルディーンって、死神の名前なの？

聞きたがりの涼がすかさず尋ねると、〝アルディーンはアルディーンよ！〟真夜子はぶっきらぼうに答えた。

「あんた、よそからきたから知らなかったのね。ネオ・ナリタではその名前、冗談でいう

ことじゃないわよ、特に今年は」

それから真夜子は簡単に話してくれた。

7年か……17年ごとに旧市街にあらわれる〝闇の皇子〟。昨日までふつうだったはずの人間が、突然血に飢えた殺人鬼になって、家族や恋人ですらかまわずに惨殺する。

時間がたてば、しだいに姿すら変わり、獣のようになるという。

「……それがアルディーンなのよ。とりつかれたら、それまでなの。あたしはまだ見たことないけど、前にマスターが話してくれたわ。マスターがまだ若いころ、16区で闇の皇子に憑かれた人がでて……家族5人を殺したそうよ」

「逮捕されたの？　なおったの？」

真夜子は首をふった。

「アルディーンになったら、殺されるまでやまないわ。闇の皇子には恐ろしい力があって、憑かれたら同じ力も出るのよ。16区のその人も、警察や近所の人にかこまれてボロギレみたいになるまで撃たれて、やっと死ぬことができたんですって」

ふと真夜子の手が動くと、涼の手をきつく握ってささやいた。

「涼……あんたが、そんなことあるわけないわよね？　違うわよね？」

まるで祈るような声に、涼はただ何度もうなずいた。

不安にかられた真夜子が一心にその目の中をのぞく……長いこと、それからホッと息をつ

いた。いつもどおりの優しい澄んだ瞳だ。
「涼のバカ！　あんたやっぱり食堂かどこかで聞いたのよ。それで、あんたって怖がりだから、きっと夢を見ちゃったのね？」
頭を一度たたいて仕事に出てしまった。涼にはあと一日寝ているようにと言って。
ひとりになると涼は、横たわったまま当惑したようすで、考えこんでいる。
——困ったなあ。
涼の記憶にあるかぎり、アルディーンの名前について聞いたのは、真夜子からがはじめてだった。少なくとも、人間の口からは……。
涼がもし、この街で育った人間だったなら、とっくにパニックをおこしていただろう。真夜子にはとても言えなかったが、たしかに自分の中に何かいる気配を感じるのだ。
夢で見たことがらは、思い出そうとすると、はっきりしなくなる。
——アルディーンだって？　でも……。
でも、自分は絶対に殺人鬼になどなっていない！　いつもどおりの僕だ！
寝たまま手を上にさしのばして、つくづくと見る。この手にたとえば……かぎ爪がはえてくると？
涼はひとりでクックッと笑いだした。
——やだ、おかしくなっちゃったなあ……〝闇の皇子〟だって！　暗示・集団幻覚の一種

だろうか？　すごく異常な例だけど、それでなんとか説明はつくよね。

たった一つ、説明がつかないのはいまの自分の状態だが、涼はそれを熱のせいにした。

それから、こっそり起きあがって下におりていった。家にいるなら、真夜子が帰るまでに何かおいしい夕食を作っておこうと思ったからで、まったくいつもの涼らしい行動だ（ちなみにほかのあらゆることと同様、料理についても涼はおどろくべきスピードでマスターしつつあった）。

階下の本棚の前を通ったとき、一冊の薄い本を見つけた。

『都市伝説〝闇の皇子〟研究』

彼はなべを火にかけたあと、なにげなくそれを読みはじめた。

まだ一種のおとぎ話として……。

さて……その夜は、満月だった。

その夜。ネオ・ナリタ署の三日月警部は、よくあることだが夜勤にでていた。

三日月真吾、まだ若いが警部である。けっこう有能で、行動派で、私生活では男っぽいごつい魅力で、ご婦人方になかなか人気があった（またマメでよくくどくんだ！）。

――ネオ・ナリタのあらゆる警察官と同様、彼も疲れきっていた。

夜勤の詰め所で、出番を待ちながら、コーヒーのカップにうつむいている横顔には、本人が自覚している以上の疲労がにじみでていた。

ネオ・ナリタの警察勤務は厳しい。

〝欲望をかなえたい者は来たれ〟。デュークの組織は武器も人員も豊富に持っている。死にもの狂いでむかわなければ、簡単にやられてしまうのだ。

泥沼のような毎日では、誰の神経もすぐにボロボロになる。怒りっぽくなる者、アルコールに逃げる者、薬に手を出した奴はストレートで組織の手先になりさがる運命である。

もう誰がまともで、誰がデュークの裏切り者なのかわからない……真吾警部の横顔は暗く、何もかも嫌になる寸前の状態だった……。

「警部！　旧市街の一角で人狩りがおこなわれているらしいという通報がありました」

ネオ・ナリタではときどき、暗闇で人狩りが行われる。

寝ぐらにあぶれて路上で夜明かししている浮浪者などが、まっさきに狙われた。

運悪くさらわれた人間はどうなるか？　彼らは生きたまま、あるいは冷凍の死体となって取り引きされた。どこか遠くの土地で、不正な人体実験のためのモルモットや、非合法な移植用の臓器提供者にさせられるのだ。

――時には教団は、もっと見た目の美しい者をさらって、儀式の生け贄にするという噂もあった。

「……出られるのは誰だッ？」

おり悪しく、彼と通報のあったことを知らせにきた刑事しか手があいていなかった。

「ちくしょう、たった二人かッ」

それでも、パトカーで現場に向かった……廃品置き場のはずれの、倉庫などが立ちならぶあたりだった。近づいてみると、人々の声や争う物音がする。

無線で応援を呼べッ……と叫んで、走りだす。すぐに後から追いついてきた刑事が、

「あっちです、警部！」

言われるままに方向を変えた瞬間、ふとヘンだと思ったのだが、疑うのが遅すぎた。角を曲がるとそこは行き止まりで、廃品の車が壁のように積んであるだけだった。

物音や争う声は、とうとつに消えてしまい、車の壁の上から男の声がした。

「よう、三日月」

見あげた真吾警部の顔がはっきりと青ざめた。

「黒須……貴様か」

ナリタ署内で間違いなくデュークの手先である警察官の姿を見て、はっきりと自分がおびきだされたことを知った。ふりむくと、通報のことを知らせた刑事はすでにピストルを出して、構えながらジリジリあとずさっていく。この男を信じたばかりに、ワナにかかったのだ。

「三日月、お前は何度誘ってもこちらにつこうとはしなかったな？　おまけに、組織に本気で立ち向かってくる。少し目にあまるんだよ」

月明かりであたりはこうこうと照らされていて、とっさに隠れる場所とてない。

たった一人の彼は、ひたいに汗を浮かべながら逃げ道をけんめいに捜そうとするが……。

黒須と呼ばれた警官は、笑いながら仲間に合図をした。

「逃がしっこないんだから、ゆっくりやろうぜ！　サアテ、はじめは誰が撃つ？」

……最初の銃声があたりにとどろいた。

……満月の夜。涼は数発の銃声で目をさました。階下で真夜子は、グッスリと眠りつづけている。そして、

——血の匂いがする。

涼はベッドからおりて、窓をあけた。かなり近い、廃品置き場のはずれあたりからだ。

起きているはずなのにまだ夢を見ているような、夢の名残のような感じが全身につきまとっていた。外からの風に乗って、新しい血の匂いがくっきりと流れてくる。

よく考えもせずに、窓から下に飛びおりた……かなりの高さなのに、ケガもしないのだ。

熱のせいだろうか？　身体がおそろしく軽い。

——あ……また銃声がした。

涼はちょうど黒須たちの裏から、その場所に近づいていった。

「……デュークの組織の邪魔をすると、こういうことになるのさ！　わかるのが少し遅すぎたみたいだがな」

真吾警部はその肩をおさえてうずくまっていた。血だまりが、手をつたわって足もとにできかけている。

あざけるような黒須の横顔を見て、涼は雷に撃たれたようなショックを感じた。

——あいつ、あの男だ!!

数日前、旧市街でチンピラたちを撃ち殺した、あの警察官だった。

彼は仲間とともに、誰かたった一人の男を上から狙い撃ちしているようだった。

誰だか知らないけど助けてあげる！　くちびるをきつくかんで、涼の目が光った。

燃えるような怒りがふたたび全身をつつんでいた。さえぎるものは何もなかった。

彼はその位置から、地面を蹴って、無造作に空中に身を躍らせた。

——ここから先は、黒須や三日月警部の見たできごとになる。

壁の上で、真吾警部を狙撃していた黒須たちは、ふいに背後に異様な気配を感じてふりかえった。信じられないことだったが、突然そこに一人の少年が立っていた。

……彼はまるで、上方から飛びおりてきたようにしか見えなかった。

少年はその手にいちばん近かった2人の男を一瞬のうちに投げ飛ばし、続けて数人を倒した。

「撃て……撃ち殺せッ！」

数発の銃声がかさなり、弾はたしかに命中したはずなのだが……。

ただ一度、衝撃でよろめいただけで少年は倒れもしなかった。

月明かりで、少年の顔だちは影になってよくわからなかったが、〝おかしいな？〟とでもいいたげな微笑みが口もとに浮かんでいるのだけは、なぜか誰の目にもはっきりと見えていた。

「ちくしょう……なんで、こいつッ」

一人の男がナイフを出し、少年の目にそれがうつったようだった。彼はそのとき、新しいやり方をおぼえたらしい……軽く手をあげて、空中をはらうようにした。

何メートルもはなれた男の手から、ナイフがはね飛ばされて下に落ちていった。

ワッと叫んで、数人が逃げだした。下からいっさいを見ていた真吾警部は、小柄な黒い影がまたたくまに、武装した男たちを倒す光景を、声も出せずに見つめていた。

最後に黒須一人が残った。その顔が汗でギラギラしている。

「逃げるな……僕はお前だけは許せない」

少年の口から、はじめて言葉がささやかれた。

「お前は三日前、4人もの人間を殺したな？」
「……4人？　アッ、まさか、だってあのときは誰も見ていなかったはずッ」
僕は知っているんだ……少年の言葉を聞き、影のように素早くこちらに近づいてくるのを見た彼は、ついに錯乱した。
「く……来るなッ、来るなあッ！」
はげしい恐怖の表情を浮かべて、自分から下に飛びおりてしまった。真吾警部の目の前に肩から落下してきた。その肩から、骨の折れる音が鈍くひびいた。
下に目をやった涼は、真吾警部が凍りついたような顔で見あげているのに気づいた。
――よかった、無事だったみたいですね。
ヒラリと飛びおりて、そばまでようすを見に行こうとした……おりると、血の匂いはさっきより、さらに強くなっている。涼には、むせかえるほどに感じられた。
ふいに自分が、何を目的にここにきたのかわからなくなった。
目の前に、一人の男がいて、肩にひどいケガをしている。傷口から流れるなまなましい血の色をみて、まぶしいときみたいに目を細めねばならなかった。
無意識に手をのばして触れようとする。僕の力ならこの傷を簡単に引き裂けるんだ……そうしたらもっと……血が……見られるんだけど……。
――えッ、まさかッ!?　違う、ストップ……やめろ、ストップだ!!

きわどいところで手が止まった……真吾警部はただ血まみれの肩を抱きしめられただけに終わった。

「お……お前は誰だ？」

ひきつった声音に、相手はニッと笑ってさも当然のように、

「アルディーン」

とだけ答えて消えてしまった。顔は最後まで影に隠れたまま……ただし瞳が血のように赤かった。

その後、彼は累々と8人もの人間が、あるいは傷を負って気を失い、あるいは錯乱している中に一人残された。うめき声のなかで、少しずつ顔から血の気がうせていった。

車に駆けもどり無線を取った。うわずった声がネオ・ナリタじゅうのパトカーに流れはじめた。

「……誰でもいいから早く来てくれ！　あれが出たんだ、闇の皇子だッ……アルディーン、本当に銃もナイフもききやしない！　……ちくしょう、どうして応答がないんだ!?　すぐ来い！　助けてくれッ、誰でもいいから頼むから早く来てくれ!!」

パトカー5台がほぼ同時に現場に到着したとき、ハンドルにしがみついたままヒステリーを起こし、泣きじゃくっていたのが誰かは……真吾警部の名誉のために〝永遠に秘密〟である。

朝、目がさめると着ているものの胸いちめんに、血がついていた経験がおありだろうか？

翌朝、さすがの涼も事態をシリアスに受けとめはじめていた。

――どうしよう、どうしよう、どうしよう!?

「どうしたの涼、朝よ！　なにさわいでるの？」

「は……入っちゃダメッ！　き、着がえ中!!」

シャツをベッドの下にけりこむと、ふるえる手を口もとにもっていき、まず深呼吸をした。冷静にならなくっちゃ！

頼みの綱は一冊の本だと思った。あの本、『都市伝説〝闇の皇子〟研究』。

著者の名前は、ケンショー・佐矢霧。

――この人に会いに行こう！

さいわいにも、その日は食堂の定休日だった。そして、本の裏には著者の住所が鉛筆で書きとめてあった。

この本のもとの持ち主、真夜子の養い親のオーエンの字らしい……いまとなってはわからないが、新聞記者だった彼はどうした事情でか、この著者の住所を知っていたのだろう。

旧市街の住所をたよりに番地を捜しはじめた。ようやく、捜しあてたのはふるいアパート

で、郵便受けの一つにたしかに〝佐矢霧〟の名前がある……そのころにはすっかり気持ちも落ちついていた。

「……3階の5号室か」

涼はドアの前に立って、古風な呼び鈴をならした。

……はじめ涼の姿を見るなり、ドアはバタンと閉じられてしまった。

あわててもう一度ノックすると、のぞき窓だけが細く開いて、

「押し売りお断りだ!!」

違いますッ……涼は懸命に本を顔の前に持っていった。彼の『都市伝説〝闇の皇子〟研究』。

「あのッ、と……突然おじゃましてすみません。あなたが闇の皇子の研究では第一人者と思ってうかがいました。ぜひ、お話ししたいことが！」

ドアがふたたび開いて、なんとか涼は中に入れてもらえた。

「佐矢霧だが、なんの用だね？」

意外に若い男で、神経質そのものの青白い顔をしていた。前髪がひたいにたれ、細い金縁の眼鏡をかけ、かなり意地が悪そうに見える。

涼は物珍しげにあたりを見まわした。奇妙な仮面や、剣、彫刻が部屋じゅうに、ところせましと置いてある。そうかと思えば、メーターのたくさんついた装置などもある。涼でさえ何に使うかよくわからない。

「ええと、あの……佐矢霧先生、話というのは、もし僕が……」

「僕のことはドクトルと呼びたまえ」

つっけんどんに訂正されてしまった。

「もしも僕がアルディーンに憑かれていると言ったら……どうでしょうか？」

佐矢霧は黙って、頭の横で指先をクルクルまわしてから、出口を指さした。

——やっぱりね！

涼はタメ息をついた。

やっぱり簡単には信じてもらえそうにない。だが、ウソでないことを証明する手立てが一つだけあるはずだった。

「ではお願いです。ネオ・ナリタの警察署に電話をして、三日月という人の身にゆうべ何があったか聞いてください。まだ、新聞にも載っていないニュースのはずです」

受話器をおいた佐矢霧は、口もとが少し厳しくなっていた。

すべての話を涼がしてしまうまで、彼は何も言わなかったが、

「……すると君は、自分がいま闇の皇子に憑かれている最中だというのかね？」

ジロジロとバカにしたような眼差しで、涼をながめている。小柄で、ほっそりして、見るからにおとなしげな姿だ。彼はフン、と言って眼鏡をはずし、涼が出ていくのを待つような素振りをくりかえした。

だが涼は、自分の人を見る目に自信を持っていた。この人物はかなり気むずかしいし、人嫌いで意地悪そうだったが、すべてを打ち明ければ僕を見捨てはしないだろう。

もし、最悪の場合でも……。

「本当に……本気かね？」

涼は彼の目を見て、一度うなずいた。彼は口の中で〝バカめが〟とつぶやき、

「それなら来たまえ！　君の考えが本当かどうか、判定する方法はあるんだからな。そら、ここに寝る！」

彼が指さしたのは、固定された粗末な担架で、そばに機械が据えつけられている。涼は言われたとおりにそこに横になった。すごい埃だ。

埃で少しむせている涼に向かって、彼はぶっきらぼうに、

「このコードを頭から左へ……いまから君の頭にα波を流す」

「……つまり僕は眠る？」

「そう（と、彼はここでチラリと涼の顔を見直してから）、睡眠深度が最高になったところで、こちらのスクリーンに君の生物波長をうつしだす」

生きとし生けるものなら、かならず持っている代物で、一般にはオーラと呼ばれている……と彼は説明した。

「これは絶対にごまかせないんだぞ。もし、君が現在……言うとおりアルディーンであるなら、その形のオーラが出る。ただの人間なら……」

彼は意地悪くニヤリと笑ったが、涼は上を向いてやや青ざめた顔で、身じろぎもしなかった。

「よろしい、はじめよう」

電源が入り、α波が流れはじめると、すぐに涼は睡眠状態にはいっていった。

――どうせ無駄に決まっている。この少年は外見からして違うしな。

これまでアルディーンにとりつかれた者は、例外なくその場で発狂し、姿もまたたくまに荒れすさんでいく。目の前の彼は、ごくふつうのおとなしそうな子供で、話し方も――主張する内容は別として――ちゃんと筋が通っていた。

99パーセントまで、たんなる妄想患者だとは思ったが、念のためを考えたのは、前回の〝闇の皇子〟出現から、今年が17年目にあたるからだった。

だが万が一、彼が闇の皇子で、なんらかの理由で発現が遅れているだけだとしたら……その顔がはじめて真剣にくもり、壁から一振りの長剣をはずしてきた。

――アルディーンなら一刻もはやく、宿主の生命を絶たねばならない。

それはたぶん自分の義務だし、この子供が凶暴化する前に、
「……殺すのが慈悲というものだ」
つぶやいてから、彼は急にバカバカしくなったらしい、鼻歌まじりで機械をいじり、スクリーンのスイッチを入れた。
――ふつうなら身体をすっぽりとおおうような、人型の形に発光体がでる。アルディーンなら形も色あいも紅蓮の炎のように見えるはずなんだ。
さて、とスクリーンに視線を向けた彼の目がガク然と見ひらかれた。発光体はまぎれもなく炎のように涼の身体を取りまいている。
「アッ……アルディーンだとッ!?」
ギョッとした手で、そばの刀をつかんでふりあげた……しかし、1分近くためらったすえに、彼はそれを下に置きなおした。
その炎のような発光体が純白に輝いていたからだった。
「白だ……魔物の血の色ではない。善意の意識だ……」
こんなことがあるわけがない……おそるおそる脳波計を見ると、涼はすっかり熟睡している波長だ。波形には、よけいな乱れは何もない。
彼はたしかに闇の皇子に憑かれている。だが、まだ完全に正気だった。
もう一度、佐矢霧は長剣を手にすると、思いきって自分の腕に傷をつけた。傷口からあふ

れた血を、用心しながら涼の胸のあたりにたらしていく……瞬間、そこの光だけがうす薔薇色程度まで変化したが、すぐもとの色にもどってしまう。

いまやひたいから汗をだらだら流しながら、ドクトルがうなっている。

――信じられん！　この少年はアルディーンを完全にコントロールしているんだ!!

長い長い時間がたってから、彼は手をのばして電源を切った……。

目をさました涼にもう一度くわしく話をさせてから、佐矢霧は黙りこんでしまった。

「僕は、どうなると思いますか？」

かえって落ちついた声で涼が彼にたずねている。

「僕は、その……この街の人間じゃありませんでした。だから、アルディーンというのが何か知らなかった。あなたの本によると、アルディーンはネオ・ナリタに半世紀ほど前から、周期ごとにあらわれ人にとりつくもので、とり憑かれた人間は例外なく殺人鬼になる。そうですよね？」

「そうだ、例外なく……いままではね」

頭をかかえたまま、横目で佐矢霧は涼を見ている。

「その正体はなんなんですか？　この本のなかで、あなたにはある仮説がある……と書いて



ありましたけど」

涼の差しだした自分の本を手にとって、パラパラめくりながら彼は話しだした。

「この中にもすこし書いたが、インチキや目の錯覚でない超常現象にはかならず高次元のエネルギーがかかわっている。妖魔や妖怪、有効な呪術などはかならず何かのエネルギーの助けを借りて存在するんだ。

こうした力は現在ではだいぶ数が少なくなっているが、それでもまだいく種類かたしかに存在している。アルディーンもそうだよ。

遠い昔から、人間もそれらの力を経験として知っていたし、それらとつきあう方法も少しはわかっている……〝力〟が信仰され、清らかな者たちの手で守られていればいい。だが、欲望のために利用されるとなると……」

彼はふと厳しい目をして、遠くをにらんだ。

「さて、闇の皇子の話にもどろう！　一般に、アルディーンもふくめて化け物には二種類ある。もとは神格化されていたものとそうでないもので、闇の皇子は前者だった。黒衣の少年の形をとる、破壊神の一種だった……ウン、〝闇の皇子信仰〟というのはもともとあったものなのさ」

話を聞く生徒としては、涼は真面目のうえにも真面目だった……彼もおおいに満足して先をつづける。

「……マアはじめから、闇の皇子は妖怪化しやすい傾向をそなえてはいたんだ。破壊神なのに対になる創造神がいなかったしな。だが、その性格を徹底的にねじまげ、魔物に変えたのは七賢人教団だった……」

「七賢人ですって⁉」

「そう。といっても、いまのデュークの教団ではない。その以前にもっと古い、先の七賢人教団があってね。彼らのしわざだったのだよ」

初耳です……涼が目をみはるのを、彼はすこぶる気持ちよさそうに、

「この街の人間でも知らない者が多いんだ！　もう一世紀近くも前のことだしな。先の七賢人教団もやはり邪教でね。もっとも得意としたのは、闇の皇子を使った暗殺だった。彼らはどこからか強い力……おそらくはＥＳＰをもった少年を手に入れて、それをアルディーンと名づけて闇の皇子の依童にしたんだ。わかるかね？　彼らは少年を通して闇の皇子の力をあやつる方法を見つけ、邪魔になる人間を殺す手段にしたわけさ」

早世した天才的幻想派詩人だったリー・渓守が闇の皇子を少年の姿でうたったのは、おそらくその直観がなせるわざだったのだろうか？

いわく、

……竜と魔女とのあいだに生まれた、六番目の魔が闇の皇子である。

彼は少年の姿に似るが、力は妖魔をもしのぎ、

その牙でたやすく魔物たちを引き裂く。
彼の名をアルディーンという。

「……どうして知ったのかなァ？　詩人のカンというのは時には超自然的だよ。だが、とにかくこの詩に出てくるアルディーンの姿は、僕の調査ともほぼ一致するよ。アルディーンは少年で、いつも黒衣の衣装を着せられていた……」
「その子は大人になる前に死にましたね？」
なぜわかる⁉　その問いに涼は、ただ知っているんだ……としか答えられなかった。
「たしかに、理由はわからないが、アルディーンはわりに早く死んだらしい。たぶん、身体が耐えられなくなったのかもしれないな。フン、その後はもちろん七賢人が闇の皇子をあやつることはなくなった。教団はいわば空中分解して、そのまま消滅するはずだったんだ……あの、デュークが来るまでは」
ドク・佐矢霧が沈んだ顔色になった。
「デュークについては、知っているね？」
「はい、噂だけは」
「僕にはわからない……あれが何者なのか。ふるい七賢人の教義とくらべると、いまの彼の教団のしている儀式はメチャクチャもいいところだ！　教団は生け贄の儀式まで復活させた

らしいが、やり方がまるで違うようだ。あれでは呪法として、なんの効力もない」

厳密な儀式の作法は、一手まちがえれば、効力は完全に失われる。

「しかし現在でも七賢人教団は、いろいろとあなどれない力を得ているらしい。だとすればそれはデューク本人の力だ」

「かつてのアルディーンのように……ですか？」

――そう、おそらくはね……十中八九、デュークはＥＳＰの持ち主だ。

「それも人の精神に働きかける能力だろうな。なにしろ、警察は七賢人の人間を逮捕しても、デュークに関することは何ひとつ質問できないんだ。しゃべらせようとすると、みんな死ぬ、自分で生命を絶つ……デュークの暗示ひとつでね」

デュークにはまた、人間の能力を最大限に引きだす力があるらしい。

彼の部下の中でも主だった者たちは、人の限界を超えた力を出すという証言もあった。

たとえば7年前、七賢人の虐殺の夜に、デュークの部下たちが虐殺したのは、ネオ・ナリタの有力者とその家族だった。

警備も厳重な邸宅やビルを、どうやって襲撃してのけたのか……。

「いまだに謎だと言われている。七賢人の信徒の数もいまよりは、はるかに少なかった……だが、デュークによって一人一人の戦闘力が増幅されていたのは間違いない」

知っているかね？　佐矢霧が陰気な目をして涼に言った。

「あくる朝、現場はどの屋敷もまるで死刑場のようだったそうだよ。連中は、その夜現場に居合わせた人間は、ことごとく殺している。使用人も来客もみさかいなしだ！　篠崎邸では泊まりにきていた娘の友人も殺されているし、エルクハート邸では主治医の一家も巻きぞえになっていた……」

それからさらに低い声音になると、

「血の話も殺された人数も、まったくゾッとさせられる。だが僕がなにより恐ろしいのはデュークの性格だ！　彼にはそもそも教団も犠牲も必要ではない、そなわったＥＳＰには、そんなもの関係ないんだ。なのになぜ教団に手を出した？　必要もない生け贄をなぜほしがる!?

ねえ君、僕には彼が楽しみのためにやっているとしか思えない……邪教の七賢人も、ネオ・ナリタも、みんな彼のオモチャのようだ。だとしたら、こんな残酷な話はないよ。彼の心は人じゃないみたいだ……本当にあれは人間じゃないんじゃないだろうか？」

僕にはデュークは魔人としか思えない……そしてドク・佐矢霧は立ちあがり、涼を上から見おろした。

「さてと……すると君はいまや闇の皇子であり、アルディーンとしての特徴もいくつかそなえているのだね？　聞かせてくれないか？」

涼は一つずつ、指を折って数えはじめた。ゆうべの異様な身軽さ、身体の活力、手を使わ

ずにものを動かせたこと、とりわけ銃弾があたったのに平気でいられたこと。
「……痛みはあったと思います。だけど、まるでかまわないような感じでしたし、傷も今朝はなくなっていました」
——まさしくそれは〝アルディーン〟の力だな。
「君はいまでは血が好きだね？」
涼は素直にはい、と答えた。佐矢霧はさっきの腕の傷をわざと涼の目の前に出して、
「どう思う⁉　これで君は人を殺したいような気分になるか？」
涼は首を振る。ゆうべは、一度だけ危険な瞬間があったが、それも我を忘れるほどのものではなかった。
「よろしい、とりあえずは合格だ。ふむ……僕の結論から言えばね。〝アルディーン〟の正体は暴走する高エネルギー体だ。先の七賢人の手で、半人工的に殺戮の傾向をあたえられている……一度は人に憑いたものだから周期ごとにそれをくりかえすが、とり憑かれた人間のほうは耐えきれずに発狂し、のっとられて暴れだすわけだ。それなのに君はそうして正気でいられるばかりか、たいして苦労もせずにそれを支配している……なぜだね⁉」
「……わかりません」
涼は首をかしげているが、ドク・佐矢霧は漠然とその答えを見つけていた。
目の前の涼を見れば見るほど、ただものではないと感じるのだ。

――この少年が、おそらくもとから持っていた高い知能、なみはずれた精神力、そしてめずらしいくらいの純潔さ……これらが〝アルディーン〟の支配を可能にしている。

涼・雨宮といった……そもそも何者だろうか⁉

「それより僕はこれからどうしたらいいんですか？」

涼はそのそばに、前にはなかった長剣があるのに目をやって、静かにたずねた。

「僕は死なねばなりませんか？」

それだったら、こんな剣なんか使わないでほしいと思っていた。

これではたぶん死ねそうもない。

この部屋にはいる前から、その可能性もあると覚悟してきていた。最悪の場合でも、研究者の彼なら確実な方法を知っているだろうと……。

――それなのにな ァ、これはちょっとひどいや！

がっかりしたような、軽蔑の眼でドク・佐矢霧の選んだ武器を見ている。聞かれたドクトルのほうが、かえってうろたえていた。

「わからない‼　君はいまのところアルディーンを完璧にコントロールしているように思えるが……」

「なんとかして追いだす方法はないんですか？」

ない……と、佐矢霧はきっぱり断言した。

「気の毒だが方法はない」
——ないばかりか……もしやったら彼は死ぬかもしれん、すでに一体化している確率がかなり高い。
「……ただ君はまれに見る強い資質の持ち主のようだから、百に一つくらいは可能性もないではない。ウーン、その場合追いだされたアルディーンはどうなるかな？　なにしろ前例がないからなんとも言えないが、17年目でもあるし、また誰かにとり憑くことも……」
「それでは、絶対にそんなことはできませんね」
涼は決まったことのように、あっさりとそう言った。
「僕の身体に入れておくしかない」
あらためてドクは、シゲシゲと涼をながめた。
「君は……恐ろしくはないのか？　ネオ・ナリタの人間でないとはいえ、その本を読んだのなら〝闇の皇子〟に憑かれた人間が、ふつうはどうなるか知っているはずだ！」
わざわざいく枚かの写真のページを開いて、つきつけた。
「怖くないと言えばウソになります……」
涼がどこか遠くを見る目でつぶやいた。
「だけど僕は以前、大切な友人から言われたことがあるんです。僕の能力は使うためにあるもので、そこから逃げるなって……これでやっと来龍との約束がはたせるかもしれない」

はじめて涼は自分がアカデミアから来たことを、ドクに打ちあけた。
アカデミアの人間が旧市街に!?　眉をつりあげた佐矢霧は、やがてハッと思いだした。
「待て！　もしかすると君はッ……先日アカデミアの特別機が旧市街に墜落して、乗っていた生徒が一人助からなかったと聞いたが？」
涼は黙って首を縦にふった。
目の前にいるのが、アカデミアの学生で〝16歳の首席〟だと知ると、彼はいきなりあわてだしたようだ。
「まずいな……そりゃまずいよ！　ナリタ・アカデミアの首席が旧市街に、なんて……そりゃよくない。といって君をもとの身体にして、アカデミアに返す方法なんてないんだが、しかし……しかしなァ！」
涼は苦笑して、アカデミアのことは忘れていてほしいと頼んだ。
「僕は、できるならずっとこの街にいたいのです。本当ですよ！　そのためには、闇の皇子をずっと押さえなければなりませんが」
チラリと本の写真に目をやってから、
「ええ、僕にはできるはずです。なぜなら……あなたの言うとおり、アルディーンと僕が強く結びついているとしたら……それは僕たちが似た心を持っていたからだと思います」
「アルディーンが!?　君と!?」

涼はうなずいて、彼に説明した。はじめの……生きていたアルディーンは七賢人の切り札として、教団の奥深くに隠されていたのだろう。いくつもの扉のむこうに閉じこめられた、黒衣の姿を夢で見たような気がしていた。

その力を必要とされるだけ、死ぬときまできっと一人きりだった。

一人で、誰の手をとる幸せも知らなかったに違いない。

「それはもしかしたら、彼自身のせいだったのかもしれません。だけど、その報いはあったんだ。それがどんなにつらいことか、僕はよく知っています。それがたぶん、僕たちの共通点で……」

かすかな吐息をついて、微笑みを浮かべた。

――僕もそうだった、一人だった……だけどいまでは違う。だからアルディーンはあんなにも僕に入りたがったんだ。

「……僕たちをつないだのは孤独の絆です」

闇の皇子のなかに、以前のアルディーンが残っていた……そんなことがはたしてあるのだろうか？　ドク・佐矢霧が自問した。

「いや、70年も前に死んだ者の意識が残っているわけはない……」

――しかし、彼の見た夢は、おそらくただの幻覚ではないのだろう。そうなると……。

佐矢霧も首をひねっている。

実際にそれ以後、涼が最初のアルディーンの声を感じることは二度となかった。

どこか遠く……はるかな忘却の岸にただよう魂が、悲しいこだまを一度だけ返したのだろうか。

——この少年の言葉が本当なら、彼は生きていたアルディーンと共鳴しているというわけか！

そして、いきなり彼は笑いだした。涼がびっくりした目で、その顔を見つめている。

「ハハハ、いや、すまない、笑ったりして……だがあんまりにもすごい話だから！　僕はね、君、長いことこの街にいて、闇の皇子を封じる手段を捜していたんだよ。どんな手だてを用いればいいかと、資料を捜しまわっても何も見つからなかった。それがどうだ！」

まだあどけないような涼の顔を見て、佐矢霧はつくづく感心した。

——そうか、こんな手があったとはね！

「さて、君はこれからどうするつもりかい？　もしも君が、このままアルディーンの暴走を押さえていてくれるなら、旧市街は救われる」

「ええ、そのつもりです」

「アルディーンの力はどうする？」

「使い道はあるでしょう？」

涼の頬にふと不敵な微笑みが浮かんだ。

この街にもう一人、魔人と呼ばれる男がいる。ネオ・ナリタを恐怖で支配している男。

デュークはまだ知らないのだ。彼に匹敵する新しい魔力が生まれたこと……黒衣のアルディーンがはじめて完璧な宿主にめぐりあったこと。

――いいとも、デューク、すぐにわかる！　すぐにこの僕が教える、もうネオ・ナリタはお前のものじゃない！

「僕はこの街がとても好きです。だから、もう七賢人の好きにはさせたくない……させるものか！」

目を丸くしている佐矢霧の前で、涼がにっこりと笑った。

――わからせてやらなきゃね？　ね、アルディーン。

第三章　ナイトハンド登場——二人の黒衣の影

すこしずつ……魔都の暗闇に変化がおとずれる。
ネオ・ナリタの奇妙な噂。〝七賢人の前を、誰かがさえぎっている〟。
教団の手による犯罪や人狩りが、何度か続けて邪魔をされた……あるはずのないことだが本当だった！
夕刊を開いたドク・佐矢霧が窓ぎわの影をふりかえった。
「派手にやっているようじゃないか？」
「ええ、まあ……」
たったいま、窓から入ってきた涼は優しい声で答えた。佐矢霧は手荒く新聞をたたみながら、
「どうでもいいが、窓から入ってくるのはやめてくれないか？　ここは3階なんだぞ！」
「すみません、つい、その……楽なものだから」
〝闇の皇子〟は無邪気にあやまって、佐矢霧を見あげた。

相談したいことがあったのだ。

……あの日、別れる前にドク・佐矢霧は、涼にこれからいくつか注意すべきことを忠告してくれた。

「とめても無駄なのだろうな、きっと？　それなら、いくつか君に教えておいてあげよう」

涼の目を真面目に見ながら、彼は言った。

「……まずいちばん忘れてはならないのは、君は本当は不死身でないということだ！　闇の皇子は不死身だが、とり憑かれている人間はみんな、殺せば最後には死ぬんだ。

これまでのケースとは違って、君には理性がある。獣のように、ただやみくもに狩られてしまう心配はないだろう。

だが、それにしても、アルディーンが君と一体化している以上、君の意識がなくなればアルディーンの力も役にはたたない。現にさっき君が眠っているあいだ、私は一度この剣で君を殺そうかと思った。本気で行動していたが、邪魔だてする力はやはり何もなかったよ。

闇の皇子は無敵だが、君は結局生身の身体なんだ。そのことは絶対に忘れてはならない」

〝身を守れ〟ということである。

「次に君は絶対に自分を失ってはいけない!!　アルディーンの魔性を甘くみるんじゃない

ぞ！　君と彼とのバランスを崩すものがあるとしたら、それは血の欲求だ……君の目にはいまは流れる血は輝いてみえるのだろう？　だが、それに誘われてはいけないんだ」

別人のように厳しい表情で、彼は言った。

「いいかね？　一度でも血の誘惑に負けたが最後、君は過去の宿主たちと同じ魔物になる」

涼は澄んだ瞳でうなずいた。

「ありがとう、ドクトル。忘れないようにします」

けっして親切とはいいかねるこの人物が、知識を総動員して教えてくれるのが不思議である。

佐矢霧も、やや恥ずかしげな面持ちで、

「別にいいんだ、礼なんて……ウーン、どうしてかな？」

自分でも驚いているところだったのだ。

「ただ僕は……そうだな、きっとあの光を見たからだろう」

スクリーンにでたこの少年のオーラは、輝くような白だった。

白はこの場合、善意の徴だ。

「……あれほど美しい白光は、もう長いこと見ていないように思うよ」

心を動かされた。

「だから僕は君の力になりたい。本気で七賢人と戦う覚悟なら、君にも助けがいるだろう。

僕にはたいしたこともできないが、すくなくとも君とアルディーンの関係にアドバイスがいるのなら、いつでも来てくれ……力になる」

「……いまではすこし後悔しているんだ」

佐矢霧は椅子に埋まりこんでブツブツ言っていた。

……彼の前にいる涼は彼に背を向けて、テーブルに皿の用意をしている。このところ、涼はいつも夜、佐矢霧をおとずれていた。昼はいろいろ仕事があるし、

――どういうわけか夜になると、動きたくてしようがないんだよね。

ネオ・ナリタの誰よりも、はっきりした変化を感じていたのは、当然涼だった。

夜がくると、彼の中でアルディーンの力が増す。

身体が軽くなり、力が凄まじく強くなる。

外見もわずかだが変化する……それを聞いたドクトルがくわしく聞きたがると、涼は説明しにくそうに、

〝すこしだけ、身体がしなやかになります……あと声が硬くなるかな？〟

実際に夜、来させてみて佐矢霧も納得した。

〝たいした違いじゃないが、よく見るとどことなく、常人と違うな。関節の動きが蛇のよう

だ〟

声にも冷たさがくわわり、金属的でさえある。そして体温が、触れるとゾッとするほど冷たかった。

あまり眠らなくても平気になりました……と、彼はドク・佐矢霧に報告し、佐矢霧は涼が変化を冷静に受けとめているのを確認して、ひそかにたのもしく思っていた。

実際、涼はまったく恐れを知らないようすであった。

もともと、澄んだ鏡のような心の持ち主である。荒れ狂う妖気をうつしても、自分はくもらされることがない。

――フーン。彼にとっては、どうやらごく自然なことに思えるらしい。

〝まるで、あたりまえの成長の過程のようだな〟そう考えると、佐矢霧はなんとなくおかしかった。

ただし闇の皇子として七賢人を相手にするとき……見せはじめたあの大胆さはどうだろうか？　それはアルディーンの影響なのか、それとも涼がもとから持っていて、学院では表に出せなかった一面なのかは、本人にもはっきり区別ができないようだった。

また予想どおり、涼にはかなり強い念動力があらわれていた。

佐矢霧の協力もあって、涼はそれをコントロールする方法をおぼえていった。

「ウーン……すこし、むずかしいですね」

涼でさえ、何度かそう言って頭をかいた。狙った物体を動かすためには、非常な集中力を必要とする……かと思うと、ちょっとした感情のきっかけで爆発してしまうこともあるのだ。

「手で動かすほうが、早いなあ……」

その手は、いまでは鉄の棒を曲げられる。

いずれにせよ、闇の皇子の力を最大に解放しないと、手をふれずに物を動かすことはできない。そして能力を最大限に使うとき、涼の瞳の色は変わる。

血のように赤く輝くようになっていた。

――それはいいんだ。だが問題はそんなことじゃない！

「ああ、もう……僕は君とは深くかかわりあわないほうがよかったよ」

テーブルの前のアルディーンをジロジロ見ながら、不機嫌に佐矢霧がつぶやく。

「え？　なんですか？」

涼がふりかえった。

「僕は、〝闇の皇子〟の伝説に魅せられて、このうすぎたない街に住みついた研究家だ。封印の方法を知るために、一生を賭ける覚悟だった、奴となら本気で心中していいつもりだったのに！」

それがどうだ！　かいがいしく紅茶とケーキの皿を並べている涼は、〝わけがわからない〟

といった表情で佐矢霧を見ていた。
「あの……とにかくお茶でも？　僕、ケーキ持ってきましたから」
「それだよ、それ！　僕にはそれが我慢できない!!」
――君はあまりに家庭的すぎるんだッ！
「〝闇の皇子〟の戦慄はどうした!?　ロマンはどこへいったんだ!?」
恐怖を返せ！　と、ドクは言いたかったらしい……彼はちょっと勝手だと、涼は考えた。

「フン……エクレア、ね。君が作ったのか？」
はい、と涼はうれしそうに答えた。くやしいが、うまい。
「それで相談したいことって？」
「あ……たいしたことじゃないんです。ただ、決心がやっとついたので」
すこしばかり口もとをひきしめて言う涼を見て、佐矢霧はうなずいた。
「それがいい、長く隠しておけることではないしな」
ネオ・ナリタの人々は、突然あらわれたデュークへの挑戦者に、みな目をみはっていた。
まだそんな勇敢で無謀な者がこの街にいようとは思われなかった。
〝誰だろう!?〟

七賢人がしだいに血まなこになってきているのに、死にもせず、捕らえられたという話もきかないのだ。

いったい誰だろう!?　……涼はできるかぎり姿を見せないように、影として行動していたが、それでも、

「……すでに君がまだ少年で、それなのに常識では説明できない能力をもっていると知られはじめている」

新聞のこの記事を見たまえ……と、佐矢霧が言った。

「きわどいところだよ、アルディーン……もし教団がこの可能性に気がついたら、かならず君を消す手段にしてしまうだろう。なにしろ君はいまや〝闇の皇子〟なんだ！　旧市街の住民が知れば反応は一つだ……君は間違いなく火あぶりにあうよ」

約9000対1だ、勝ち目はない。

「それに君は関係のない人々と戦うのは嫌なんだろう？　それなら、先手を打て。正体をあかす必要はあるまいが、君がアルディーンであることだけは、公平な目で見てくれる第三者に、どこかで打ちあけておいたほうがいいと思う」

佐矢霧の言葉はもっともだとわかっていたが、涼は椅子の上で落ちつきなく身動きした。

それを見て彼は、力づけるように、

「ネオ・ナリタの人間たちは、君が思うよりずっとタフなんだよ。大丈夫、君がこれまで

の宿主と違うとわかれば、むしろ……」

自分自身の心をかえりみて、佐矢霧はうなずいた。

結局、一方にはデュークがいる。魔人と呼ばれる七賢人の主が……。

――魔界の闇の皇子だからこそ、賭けてみる気になったんだ。

〝そして問題はその方法だな〟……と、彼がつぶやく。

「それなら僕は新聞を使うつもりです」

涼はちょうどあった『ナリタ日報』を横目で見ながら、

「知り合いに、この新聞社の記者……いえ、見習い記者がいるんです。その子なら絶対に七賢人の信徒ではありませんし、記事がとれればよろこんで書いてくれるでしょう」

「ウン、いいかもしれないな」

しかし、涼はますますうつむいてしまっている。

――それしかないのはわかっているんだ。わかっている……わかっているけど……。

「……とにかく、決心がついたのはいいことだよ！　ためらう気持ちもわかるが、早いほうが絶対いいんだ。まったく、何をいつまでグズグズしているのかと思ったよ。そんなのは、いつもの君らしくないことなんだろう？　と……オイ、ちょっと!?」

佐矢霧はギョッとした声になって、椅子から立ちあがった。涼がうつぶせて泣きだしたからだ。

「でも……でも僕は真夜子に気味悪がられるかもしれません！　ドクトル、そうしたら僕はどうすればいいんです!?」

〝闇の皇子〟と聞いただけで、あんなにも怖がっていたではないか？

ほかの誰が認めてくれても、真夜子の目に怪物と映るなら……涼はそれだけで、もうふるえあがっていた。

「もし、万が一、僕がアルディーンだと知ったら……知られなくても真夜子に嫌われたら、嫌です、僕……もう生きてられませんッ！」

テーブルにガバッとふせてワアワア泣いている。

――なッ……泣くな！　頼むから泣かないでくれ……バカなッ、やめろ！　僕の目の前でそれだけはよしてくれ!!

……佐矢霧が心配するほど、涼が〝闇の皇子〟らしからぬわけでもない。

それからすぐのある夜のことだ。旧市街の暗い街路で、七賢人教団の人狩りが行われていた。今夜の獲物は生け贄用の若くてきれいな子供である。

「クソッ、どこに行きやがった!?」

今夜はなぜかことごとく獲物に逃げられる。追いつめても追いつめても、誰かが逃がして

でもいるように、しくじってしまう。

またしても袋小路で獲物を見失い……いらだちながら行き止まりを捜しまわっていた七賢人の手先たちは、ガラクタの陰で、ソッと動く人影を目にした。

おそらく浮浪者だと思ったのだが、わずかに見えた横顔はまだごく若い、十五、六の少年だった。必死で身を隠すつもりか、頭からすっぽりと布きれをかぶっていた。

リーダーの顔にニッと笑みが浮かんだ。

「おい上玉だ、あれを追え！」

少年は飛びすさるようにして、石畳の街路を逃げはじめた。

「いたぞ、そっちだッ！」

右に左に……いつのまにか彼らは空の倉庫についていた。たったいま、誰かが駆けこんだに違いない。目前の扉がかすかにゆれ動いている。

彼らは上手に中に誘いこまれていった。

人気のない建物の中は、うす気味が悪いものだ。獲物はさぞおびえているだろう。

ドアを蹴り開けながら、人狩り部隊はおもしろくてたまらない。

「……よしよし、うさぎちゃん。出ておいで」

「隠れても無駄だぞ、我々と来るんだ」

倉庫の中まで足を踏み入れたとき、彼らは意外なものを目にすることになる。

「こんばんは、〝七賢人〟のみなさん」
箱かなにか……積み上げた山の上で、さっきの少年が楽しそうに彼らに声をかけた。
布きれは下に落ちているが、いまでは顔半分を完全に隠すゴーグルをつけていて、わずかに見える口もとに、微笑みが浮かんでいた。
「こんばんは……僕の名はアルディーン」
奇妙に金属的な感じのするその声は、彼らの耳には不快に響くようだった。
一種独特な黒衣の衣装を身につけている。
全身黒ずくめ……手袋まで黒で、しっかりと身体じゅうをおおい隠し、肩から腰の辺まで短いケープがさがっている。
このケープは実は佐矢霧が涼に勧めたものだ。ネオ・ナリタで育った人間なら、黒衣の少年と黒のケープ姿には、本能的に恐れをいだくはずだ、と。
涼は嫌がったが、狙いはほぼ的を射ていて、七賢人の手先たちは、心なしか青ざめていた。
「お目にかかるのは、実ははじめてじゃない。まず、あなた方のお仲間とは三日月警部の事件のときに会っている。あれはたしか……この前の満月の夜だっけ？」
それから声は、彼が邪魔をした教団の仕事を次々と数えあげた。
聞いて教団の者たちの顔色がどす黒くなっていった。リーダーの男が、ひそかに後ろに目

くばせすると、心得ていたように一人がソッと銃をぬき、少年を狙っていきなり撃った。
轟然一発！
しかし、少年は平気な顔ですましている。
それどころか、あの高さから飛びおりてくると、銃を持っている男の手をとって胸もとに押しあて、
「撃ってみろ！　いいから、僕はアルディーンだ。銃もナイフも僕にはきかない！」
たて続けに引き金をひいた男は、悲鳴に近い声をあげてピストルを放した。
高い金属的な笑い声が、倉庫の天井にこだました。そしてゴーグルの陰で瞳が赤く光ると、窓という窓、扉がひとつ残らずすごい勢いで閉まった。
つかみかかる手を逃れて、10メートル近くも遠くに飛びのいた少年は、ふところから何かをとりだすと、床にたたきつけた。
あっというまに、倉庫に煙が充満し、教団の男たちはむせかえった。
あわてて手近の窓に飛びつくのだが、押しても引いてもなぜか動かない。
たった一つ、少年のそばにあった窓だけが開いて、黒い影はそこから外に消えてしまった。
「デュークに伝えろ！　これからは〝闇の皇子〟がお前の敵だとな!!」

窓から非常階段に飛びうつった涼は、そこでしばらく耳をすませた。
苦しげな激しい咳やわめき声が聞こえる。
――催涙弾だもの。1時間は死ぬほどの思いだろう。
すこし残酷すぎただろうか？　ちょっと考えてから、大きく首を振った。
あの連中は生け贄のために人さらいをしていたのだ！
――このくらい苦しい目に遭えばいいんだ!!
もう少ししたら、警察の三日月警部にでも電話で知らせるつもりだった。出口を外からふさがずにきたから、少しは逃げるかもしれないが、今回だけはそれでもいい。
デュークへ、最初の知らせが届くことになるだろう。
今夜こそ噂がはっきりとした形になるのだ……考えながら下を見おろしていた彼は、そのとき眉を寄せ、顔をくもらせた。ついに来た！
彼が見たのは、もちろんカメラをさげた少女である。いつものように赤い自転車に乗っている。
見下ろす者がいるとも知らずに真夜子は自転車を降り、あたりに用心しながらも、倉庫に近よっていった。
涼は静かにタメ息をつくと、この夜最大の冒険にとりかかった。

この姿のまま、真夜子に会うのだ。

さて、真夜子はといえば、最近よくこうしてカメラをさげて自転車で街を走りまわっていた。

特ダネになりそうな噂が流れているのだ。

——たった一人で七賢人に歯向かっているのって、誰!?

しかも、彼はただならぬ力を持っているらしい……考えれば考えるほど、真夜子の目がキラキラ光った。

——誰もまだ、彼とゆっくり言葉をかわした人はいないのね。素顔も、名前も謎のまま！見たいッ、知りたいッ、絶対に特ダネよ！

〝やめてよ真夜子、あぶないよ!!〟

いつもは半泣きでとめる涼も、今夜はなぜか黙って見送った。

ヘンな顔してたのよね……〝これでもう会えない〟みたいな。真夜子はふと身ぶるいした。

人一倍、度胸はあるし、すばしっこいし……怖いもの知らずの真夜子である。七賢人教団でさえ（少なくとも人狩りになんか）捕まらないようにする自信はあった。

だが、いま追いかけている相手は、正体が知れない。

――デュークに逆らっているからって、いい人なんかじゃないかもしれない。そうよ、彼のほうも残虐で冷酷な悪魔かもしれない……。

足音を忍ばせて倉庫に近より、ふるえる手で扉に手をかけたとき、突然背後から声がした。

「開けてはいけません……」

真夜子の心臓が大きく鳴った……それは静かだが、不思議に逆らえない声だった。

「……開けてはいけない。離れなさい。中ではいま催涙ガスが充満しているから、入ると君までまきぞえになってしまう」

棒立ちのまま、身じろぎもせずに真夜子はふるえていた、威厳というものをはじめて経験したのだ。

――彼だわ、間違いなく彼だわ！　どうしよう……やだ、動けない！

〝特ダネ！〟

かろうじて真夜子は振り返るのに成功した。

そこに立っていたのは、一人の黒衣の少年だった。素顔は見せたくないように、ゴーグルに隠されている。殺意や残酷さの気配は、みじんも感じられなかった。

「あ……あなたは誰!?」

「闇の皇子……アルディーンです」

キャッと、思わず声をあげて真夜子があとずさる……が、影はその場に立ったまま、動こうとはしなかった。相手が追ってこないので、真夜子もそれ以上逃げるのをやめて踏みとどまれた。

ひょっとして、あなたは新聞社の記者ですか？　彼は真夜子のカメラをさして聞いた。

「え、ええ……いいえ、ちがうのッ、まだ記者志願なのよ」

真夜子の少しうろたえた返事を聞いて、彼は一瞬だけクスッと笑った。その声がなぜか真夜子を落ちつかせた。

「あのね、あたし……あなたのことを追っかけていたの。あなたは誰？　不思議な力があるって本当!?　みんながいま、あなたの噂をしてることも知ってる？」

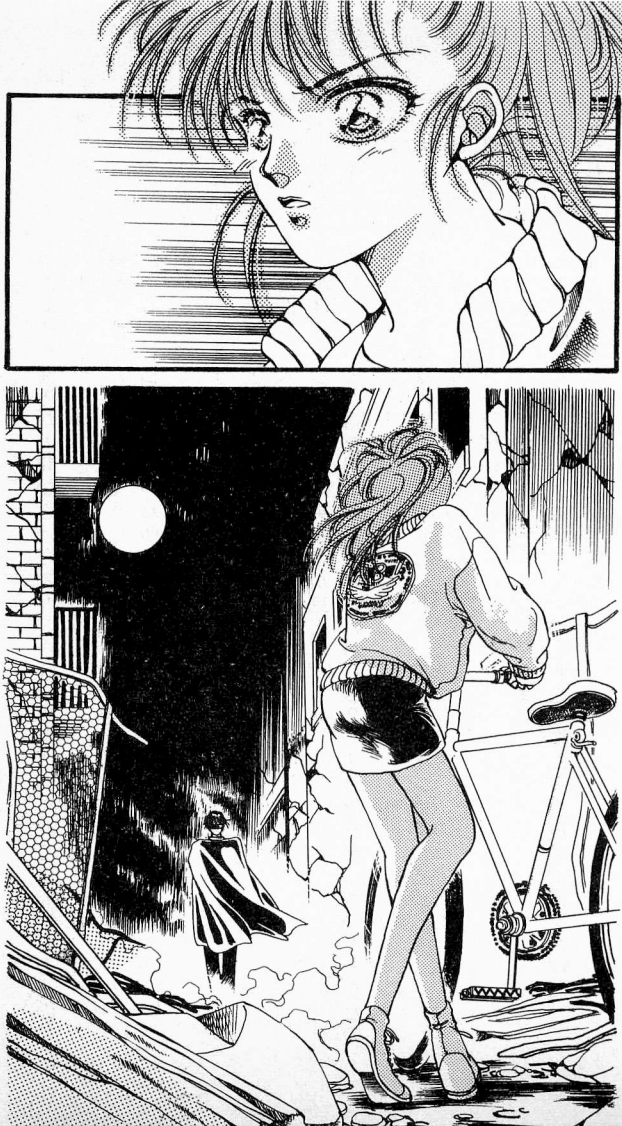
アルディーン……と名のるこの少年は、まず足もとから一本の鉄の棒をひろいあげると、軽く折り曲げて真夜子に手渡した。それから彼は細心の注意をはらい、真夜子の腕をとると、大事なものをあつかうようにして、そうっとそばの木箱に座らせた。

「……ウソみたい」

目をまん丸くしている真夜子に、彼はおだやかな口調で話しだした。

自分はたしかにネオ・ナリタの妖力〝闇の皇子〟17年目の今度の宿主であること。

しかし発狂も変身もせずに、その力だけを支配していられること。



「……いくつかの条件を備えた人間ならば、のっとられず宿主でいられる可能性もあるのです。そして、たまたま私がそうでした」

ドク・佐矢霧が、涼のために匿名でまとめたレポートを渡し、真剣にたずねた。

「よく見てください！　私はいま、いわゆる〝殺人鬼〟のアルディーンに見えますか？」

彼は全身黒衣をまとって、真夜子の前にたたずんでいる。

外見は闇の皇子そのままである。

……真夜子はつくづくと見てから、首をふった。

「いいえ、あなた優しい人みたいだわ」

アルディーンがほっとしたように微笑むのが見えた。

「お願い！　あたし、いまの話を記事にしてもいいかしら？　そのほうが、きっとあなたのためにもいいと思うんだけど……」

もちろん、名前や素顔なんかは聞きやしないわ！　アルディーンは笑って、

「ありがとう、そうしてくれればありがたいのです」

真夜子の目が興奮でキラキラ輝いている。

視線があったときに、なんだか懐かしいような気持ちまでした。

さあ、そろそろ行かなくては……アルディーンが立ち去る際に、真夜子は声をかけた。

「それで、あなたは噂どおり七賢人と戦う気なの!?」

もちろん……すでに身軽く倉庫の塀の上にいるアルディーンが、楽しげに答えた。
「すごいわね！　あなたならできるかもしれない、その力があれば……ねえ、どんなにか素敵な気分でしょうね？」
「そうでもありません……」
上からの声は、このときふと暗く……悲しげになった。
「……もはやこれは妖魔の身です。もしも……愛する人がいても、かなわぬ夢になるとしたら！」
思わず息をのむ真夜子をおいて、アルディーンは闇の中に消えていった。

翌朝。日がのぼるとともに、真夜子は猛烈ないきおいで記事を書きはじめた。
実は一睡もしていない涼が、そっと2階からおりてきて、ためらいながら声をかけた。
「……おはよう、真夜子」
「あら涼、起きたのねッ！」
鉛筆を噛みながら真夜子が食堂の机からクルリとふりむいた。
「聞いてよ、涼！　あたしね、会っちゃった!!　例の噂の彼……〝闇の皇子〟よ。ねッ、驚くでしょ、彼、本物だったのよ！」

「そう、それで……どんなだったの、〝アルディーン〟って？」
——やっぱり怖かった？　見るもおぞましい奴だと思った？
涼が歯をくいしばっているのに、真夜子は気がついてない。
陽気な声で、元気よく、
「それはそれは美しい人だったわァ!!」
——う、美しい!?
涼が音をたててコケたのにも、ぜんぜん気がつかない。ひとりで勝手にうなずきながら、
「あたし、あんなにきれいな人ってはじめて見たわ……白い肌、絹糸みたいな漆黒の髪、背がスラリと高くて気品があって、涼みたいなチンチクリンとは、優雅さが、てんで違うのよね！」
「……ウソつき」
「話をしたの！　その声も知的で、悲しげで、もうたまらなかったわ！」
うっとりと視線を宙にただよわせて、
「〝もはや妖魔の身です〟って言うの。ああ、お気の毒だわ、あんなに麗しい方が！」
そんなふうな真夜子の顔を、自分はまだ一度も見たことない、と涼は憤慨した。
一度だって、そんな顔、してくれたことがあったっけ!?
怒ることないんだ……涼は必死に自分をはげました。

――怒ることなんかなんにもないッ！　よかったんだ!!　あんなに……悩んでいたのが大丈夫だったんだもの。嫌われるより、どんなにいいか……。

「涼、あたしやるわよ、あの人のために最高の記事を書いてみせるわ。アルディーン……なんて素敵な人かしら、こんな気持ち生まれてはじめてだわ……」

思わず涼はフライパンをコンロにたたきつけた。

「うるさいわよ、涼ッ、書いてるときは静かにしてよ……あ、でもなんかご飯ちょうだいね」

やっぱりどこか、わりきれない!!　どうしてこんなに腹が立つのか？

――闇の皇子がなんだい！　ちょっと黒い衣装にケープがついただけじゃないか!?

涼の気持ちとはおかまいなく、真夜子の装飾過剰の文章はネオ・ナリタの人々に妙にうけた。

『人か、妖魔か、いずれにせよ彼はぬばたまの闇より美しく、彼こそネオ・ナリタのあらたなる守護者（ガーディアン）である』

〝闇の皇子〟の名前は、またたくまに、この街で新しい意味を持つようになっていった。

――ネオ・ナリタの人って、本当にタフだな！

涼は心から感心すると、おおっぴらに夜間行動を開始した。もう姿を隠したりもしない。黒衣の少年は、いまや堂々とネオ・ナリタの闇に出没し、毎晩のように七賢人の悪事をさまたげた。例の廃品集積場から、オートバイやいくつかの武器類も修理して手に入れている。

そして彼の次なる一手とは……。

食堂が定休日のある日、涼は家でひとりきりで、機械の調子をためしていた。

ヘッドホンをかけて、慎重にダイヤルを回し、周波をあわせている。ナリタ警察の電話に盗聴機を仕掛けてきたのだ。

――悪いこととは思うけど……。

夜の旧市街にでて、血の匂いだけをたよりに動くのでは、効率があまりにも悪いのだ……何度、たんなる交通事故の現場にぶちあたってしまったことか。

やはりここは、警察の情報をもらうしかない！　というわけで、涼は手製の盗聴機をナリタ警察の電話回線に仕掛けてきた。例の、三日月警部の電話である。

満月の夜、助けてあげたこの刑事は、なぜだか涼のお気に入りだった。

あやうく殺されかけるほど、七賢人の犯罪を手加減せずに捜査しているらしい。闇の皇子

として初めて会った人なのも、縁があるような感じがするし、アカデミアの友人来龍にも、心なしか似ているような気がしていた。

そんなこんなで、涼としてはつい彼の電話に盗聴機をつけてきてしまったのだ。

――三日月警部ならきっと毎日必死に仕事をしているのだろう。ウン、いい情報が聞けるんじゃないかな？

彼はナリタ警察の風紀の乱れを、あきらかに甘くみていた。

鈍いベルの音とともに、機械の赤いランプがついた。外部から電話がかかってきたしるしだ。

――やったね、なんだろう!?

涼がイソイソとボリュームをあげると、いきなり耳をつんざくような女の怒鳴り声がはいってきた。

〝真吾、この浮気者ッ！　見たわよ、夕べ、あの赤毛は誰ッ!?〟

――浮気!?　赤毛!?

やたらに甘ったるい真吾警部の声が、すかさず回線にはいってきた。

〝……ハニー、誤解だよ、それは絶対目の錯覚だって！　赤毛？　なに、それ、おれは知らないぞ。夕べは仕事でずうっと署にいたんだ〟

それから15分。顔から火が出るような会話が続いた。

〝わかった、ごめんね真吾、あたしがバカだったみたい、嫌いにならないでね〟
〝もちろんさ、久美子。愛してるよ！（キスの音）じゃあ今夜、いつもの場所で……〟
電話が切れたとき、涼はひたいにびっしょり浮かんだ汗をぬぐっていた。
——恋人からの電話だったのか……驚いたなァ、もう。
ちょっとショック。めまいすら感じる。
——すごいやきもち焼く人だなァ……真吾警部も大変だ。
しかし、次の電話も同じく女性、その次も、その次も……とくると、だんだん真相がよめてきた。〝彼女が正しい〟。捜査情報を記録するつもりで用意したメモには、とんでもないスケジュールが書きだされていく……。
7時……久美子、いつもの場所で。8時に薫。8時半……未央、彼女のアパート。10時、11時……リシェールとアリス、どちらもナリタ署署内。12時……。
「……不潔だッ!!」
ついに涼は手に持った鉛筆をノートにたたきつけた。怒りで目がつりあがっているぞ。
——そんな人だったのか、真吾警部！　来龍に似てるだなんて、とんでもないッ……不潔だッ、いっぺんに何人もの女の人を手玉にとって、信じられない！　許せない！
期待していただけに幻滅も激しかったようである。
その夜、はりこみ中の三日月警部の前に、やや殺気だったアルディーンがあらわれた。

「こんばんは、三日月警部」
言うなり彼は、かかえていたぶ厚いファイルを真吾警部の顔めがけて投げつけた。
「こ、これはなんだ⁉」
「ナリタ警察の職員で、七賢人に内通している人間のリストですよ。これも……ほら、これも！」
二つ、三つと続けて投げつける。
「痛いッ、何するんだ！　よせッ……だいたい、どうしてこれを⁉」
「教団の支部の金庫から持ってきました」
ちょうどいま、真吾警部が双眼鏡でみはっていた建物を指さして、冷たく答える。
「バカなッ、だってあの中には警察も容易に入れないんだぞ！」
七賢人教団の支部のいくつかは、頭にくるほど堂々と、ネオ・ナリタ旧市街の中にあった。
わかっているのに踏みこめないのは、内部に武器がごまんと用意されていて、流血の市街戦を覚悟しても、突破できるかどうかあやしいものだったからだ。
万が一、建物全体が自爆でもされたら、それこそ被害はどうなるかわからない。
だが真吾警部は不屈の根性をみせて、このところずっと建物を外から監視しつづけていた。

夜間はビルじゅうに熱感センサーつき警報装置がはりめぐらされていて、侵入者は即座に感づかれてしまうのだ、と……ようやく調べあげたばかりだったのに。

「ど……どうやって入っていけたんだ？」

「説明する必要はありませんね」

アルディーンになりきると、涼には体温がほとんどなくなる。だからセンサーにも反応しなくなるのだが、

〝教えてなんかやるもんか！〟

……真吾警部は理由のわからない暴力をふるわれて、怒りたかったが、リストを見てグッとこらえた。

「とにかく……ありがとう」

「あなたなんかにお礼を言われたくないです」

その言いぐさはなんだ……さすがに真吾警部が声を荒げた。

「いったい何をつんけんしているんだ！　理由を言え！」

闇の皇子はクルリと振りむいた。〝理由だって？　自分の胸に訊いてみるといい！〟

「……あなたという人は、軽蔑です！　恥ずかしくはないんですか？　あんなにたくさんの女の人をだましてッ、汚いッ！」

――好きならたった一人を大切にするべきだ！

「それをあなたは、久美子、薫、未央、リシェール、アリス、由美、泉、と……おまけにウソばっかりついて！」

責められた真吾警部はキョトンとした顔をしている。〝闇の皇子〟に女性関係を非難されるとは思わなかった。

ネオ・ナリタの警察勤務は厳しい。前にもいったように、誰もが問題を抱えているのだ……ストレスをどこかで発散しないと常人にはやりきれない。真吾警部の場合は、それが熱心なガールハントになるわけで、

――いいじゃないか、べつに？　法に触れることをしているわけじゃないぞ！

〝君ひとり〟なんて約束は、誰ともしていないのだから、だましているわけでもないと思った。

「かちあうとそりゃやっかいだけど、みんなも知っているって。それでも、俺といると楽しいから誘われてくれるんだし、まあその大人の……」

汚い。絶ッ対に汚い!!　烈火のごとく怒っているアルディーン。

あぜんとして見ている真吾警部はふと、その素顔を想像してオヤと思った。

――こいつ、もしかすると、ものすごくかわいい顔なんじゃあるまいか？

前ぶれもなく胸にさわられて、アルディーンは首をかしげた。

「なんですか？　これ」

〝なんだやっぱり男か〟真吾警部は、やや残念そうにつぶやいた。
「いや、ひょっとすると実は女の子で、おれに気があるんじゃないかと思ったから……」
「あ……あなたにはそれしか考えることはないのかッ？」
真吾警部の頭上をめがけて、ありとあらゆるあたりの物体が降ってきた。
「頭を冷やせッ!!」
そのとき、彼らの背後で激しい爆発音がひびきわたった。
――えッ、なんだ!?
思わずふりかえった涼が目をみはる。
七賢人の支部が燃えあがっている。
「なんだ、あれは!?」
ガラクタをはねのけて、真吾警部が走りだした。急いで後を追う。
ビルの近くにいくまでに、また数回の爆音が炸裂した。
「ひどいぞこいつは、いったい何をやったんだ……」
ビルの正面で彼らは立ちすくんだ。一台の黒い装甲ベンツがビルの入り口から突っこんでいる。ただの事故とは思われない……かなりの量の爆薬を積んでいたらしい。あたり一面にガラスやコンクリートの破片が飛びちっているありさまだ。
爆音は、いま、ビルの内部からひびいてくる。悲鳴や激しい怒号がかすかに聞こえる。

「おい待て、アルディーン！」

真吾警部がとめようとしたが、涼は身をひるがえしてビルの中に駆けこんだ。内部はもう、警報装置もなにもめちゃめちゃだ。悲鳴や爆発音は、上の階にうつっていた。

――爆弾ですべて破壊しながら進んでいるのか!?

階段を駆けあがり、音のする階にたどりつくと、生々しい血の匂いがドッと流れてきた。ケーブルが切断され、ライトがつかなくなっている。壁ぎわでショートしているらしい火花と、月明かりだけがあたりをてらしていた。

そこで涼が見たのは、一人の黒衣の男が立って、無言のまま部屋の中の人間をみな殺しにしている光景だった。

七賢人の男たちが、かたっぱしから血煙をあげて倒れていく。もはやほとんどが手負いか、死にかけているようだ。

動ける人間は懸命に銃を出して彼に応戦しているが、男のメタルブラックのウエアは強力な防弾スーツになっているらしく、きき目がない。

逆に彼の持つ拳銃は、当たれば一発で人間の胴を二つにするほどの威力があった。

「チクショウ、来るなッ……来ないでくれッ」

壁ぎわに追いつめられた一人の男が、ショットガンを離して悲鳴をあげた。黒衣の男は無言のまま手をふりあげ、その頭上を一撃した。頭蓋骨のくだける音が響き、死体が床に崩れ

おちる……涼でさえ、思わず目をおおった。

わずか数分たらずのうちに、男は部屋じゅうの人間を血まつりにあげ終え、最後になった一人の喉にその手をかけていた。恐ろしいような力で、宙づりにしている。

断末魔の声がたずねる。

「……貴様は誰だ？」

はじめて男は一語だけ答えた。

「ナイトハンド」

バサッと生命のない体が下に落ちる、その音で涼が我に返った。

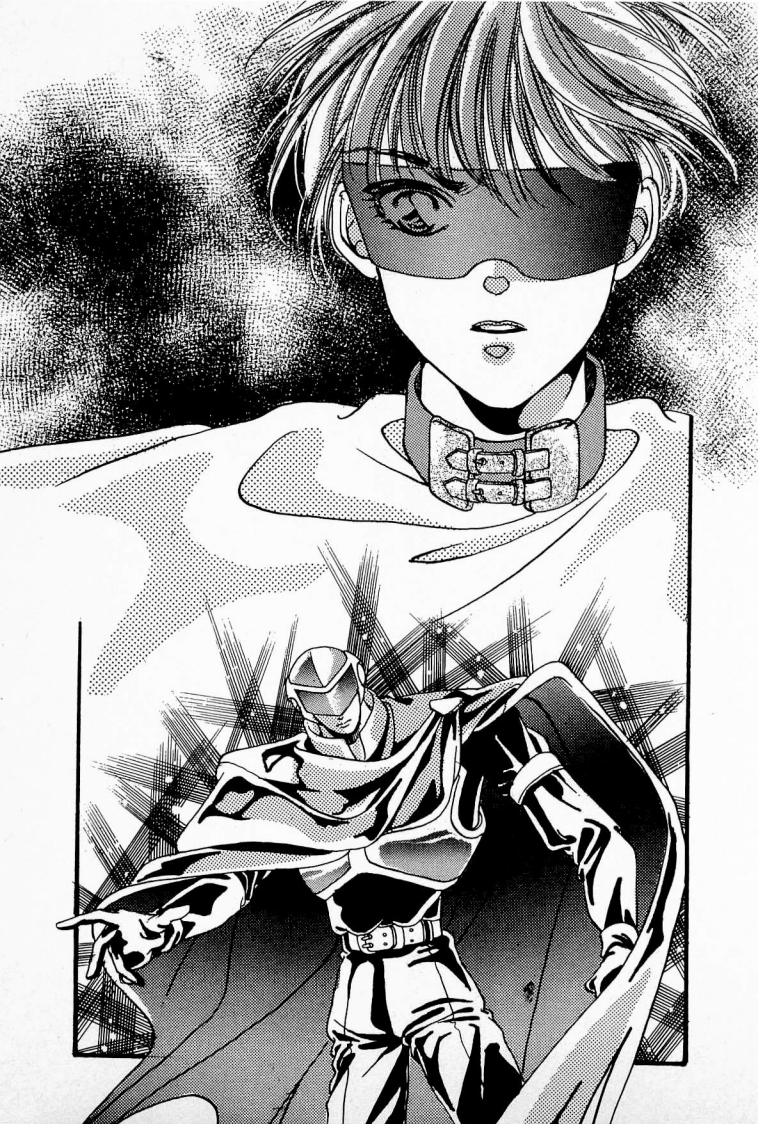
顔をあげると男と視線があう。むこうもこちらを見ているようだ……。

彼らはまるで、ゆがんだ鏡にうつった二つの影のようだった。

全身を黒衣につつみ、同じように顔を隠し、背に不吉なケープを流している……しかし、この男は涼にくらべるとはるかに背が高く、鍛えぬいた身体をして、鉛色のマントは踵にとどくまでに長かった。

折しも、倒れていた死体の山からまだ一人だけ息があった男が、よろよろと立ちあがり男の背後からナイフで切りかかっていった。

黒衣の男は振りむきもせずに、マントの裾をひるがえすと、敵は血しぶきをあげてのけぞった。裾に何か刃物がしこんであることを、涼は知った。



血の匂いがたちこめる中で、2人は向かいあっていた。
床の上の死体は、一ダースではきかない。
ギラギラした目で相手をにらんでいた涼が、ようやく声をだした。
「……誰だ、お前は」
男はまたひとことだけ、その名を答えた。
「ナイトハンド」

それから1週間後、ネオ・ナリタの市長のオフィスで、会議がひらかれていた。
アルディーンとナイトハンド、七賢人に対するこの二つの新しい勢力についての緊急会議である。
日当たりのいい会議室のテーブルをかこんで、雪村市長、ナリタ警察の長官、委員会のメンバー数人、そして現場からの報告者として三日月警部の姿もあった。
ネオ・ナリタの雪村市長は澄んだ青い目をした人物だった。
まだ四十代だが、髪はすでに見事な白髪にかわっている。彼は悩み深い面持ちで、口火をきった。
「この1か月……旧市街の状況に変化が起きているのは、明らかだ。わかっているだけで2

人の人物が、それぞれ独自のやり方でデュークと彼の組織に戦争をしかけている。
　驚くべきことだが、長官、あなたの報告によれば、彼らの行動はそれなりに成功しているのだそうだな？」
　ナリタ警察の長官が立ちあがった。
「たしかにここしばらく、七賢人の動きはにぶっています。すでにかなりのダメージを受けているようで」
「だが、我々はそれを手放しで喜ぶわけにはいかないだろう。何者だ、彼らは？　彼らの動機も背後関係もわかっていないのだ。勝手な期待をして、裏切られたくはない……」
　長官が三日月警部に目くばせした。
「この男は我が署の警察官ですが、どういうわけか両方を間近で目撃しています。特に〝闇の皇子〟とは、数回出会っているようで、いま署内でもっともくわしい男です」
「君の名前は？」
「三日月真吾であります」
「ウン、君の考えを聞かせてほしい」
　彼は立って、考えをのべはじめた。
「……あの二人がたがいに無関係だということは、まず間違いないと思われます。どちらも七賢人に対抗していることは事実ですが、アルディーンのほうは……いろいろ道具立てこそ

不気味ですが根は非暴力主義者のようです。彼が人を殺したという話はまだ知りませんし、数人に重傷をおわせていますが、その場の状況でそうなったものです。

『ナリタ日報』があれを〝仮面の自警団〟と呼んでいるのはうまいと思いますよ」

「……彼の望みは旧市街の治安回復だと思っているのかね？」

まず、間違いなく……真吾警部はうなずいた。

「ナイトハンドのほうは、まるで逆です。奴の目的は、犯罪者のジェノサイド（大量虐殺）ですね。抵抗をやめて逃げようとしている者まで殺す……まきぞえも気にしない。アルディーンとは違いますよ」

彼は口もとをゆがめて笑った。

「現場の職員としては、どちらも大歓迎です。やめさせたいとは思いませんよ。だが、どちらを先にやめさせるかといえば、ナイトハンドのほうでしょうね。やめさせたいのは闇の皇子ですが……」

「なぜ？」

「あいつが大ケガをする前に、家に帰れと言ってやりたい気もします。ヘンな力はあるが、あきれたウブな奴で、話をするとまだまるで子供だ」

市長がふと笑顔を見せた。

「……どちらかがナリタ署の職員ということはあるかね？　特にアルディーンが？」

一人の委員の声に、真吾警部が不快な顔をした。この委員が、この前アルディーンからもらった内通者のリストに入っていなかったのは、運がよかっただけだと思っていた。

長官も厳しい表情になり、

「闇の皇子が我が署の人間ということはありえません」

「なぜそう断言できるのかね？　奴の素顔を見たものはいないじゃないか！」

長官はニッと笑って、かたわらの三日月警部を指さした。

「体格が違います……ここをどこだと思っておられる？　悪名高いネオ・ナリタですぞ！　ネオ・ナリタの警察官の採用基準は身長１８０センチ以上、体重75キロ以上！　ああいうきゃしゃな体型の者は、内勤もふくめてナリタ署には一人もおりませんね」

女性でないことも、真吾警部が確認済みだ。

「おかげで痛いめを見た」

数人がこらえきれずに爆笑し、さっきの委員ただ一人が顔色を変えた。

「バカを言っている場合じゃないぞ！　いずれにしてもあれは〝アルディーン〟なんだろうが？　殺さなくてもいいのかねッ？」

「そもそもアルディーンとは何かね⁉」

別の委員の一人が席をけたてて立ちあがった。

「だいたい、そんなのは旧市街の迷信にすぎないかもしれないだろう！　根拠も証拠もな

いッ……彼がそう名のっているだけで、銃を向ける理由になるものか⁉」

〝いままでの闇の皇子が殺されているのは、彼らが人を殺したからです〟……ナリタ署の長官がいわずもがなのことを言った。

「今回も、たとえ本物のアルディーンであるとしても、あの少年が殺人鬼の兆候を見せないかぎり、当署は出動命令は出しませんよ。それでなくても忙しいのです」

ついに、市長が手をあげて混乱をしずめた。

「わかった！　とにかくみんな座ってくれたまえ」

そして、あるスケジュールについて話しはじめた。

「……知ってのとおり、この市には今度重要な客がおとずれる。香港からくるナサニエル・ゴードン氏だ」

香港の大富豪、ナサニエル・ゴードン。彼はまだ非常に若く、年齢は二十歳といい、

「経歴も不思議にはっきりしない人物だが、とにかくたいへんな資産家であるらしい」

「……香港では暗黒街とのつながりも噂されています」

長官が低い声で言った。

「身体が不自由だということで、めったに表には出ませんが、車椅子は使えるようです」

莫大な財産も、犯罪で手にしたものかもしれない。

「しかし、現実に証拠はない。香港警察も彼の事業をかなり調べたらしいが、どこも完全に

合法的なものだった。そうだろう？」
　不承不承に長官も認めた。
「ともかく、その人物がネオ・ナリタにくる。その目的というのが、どうやらビジネスのようだ。先日、こちらに打診があったのだが、旧市街に放置されている工場を買いとりたいというのだ」
　人々は全員顔を見あわせた。
「……まさかエルクハート旧工場のことですか？」
　そうだ、と雪村市長はうなずいた。
「しかし、あれは……」
　ためらうのも無理はない。エルクハートというのは、7年前、デュークによって虐殺された7家族の一つだった。
　家族……といったが、エルクハートの場合は1人しかいなかった。
　それまでネオ・ナリタで最大の勢力をにぎっていたエルクハート翁だ。
　傲慢で情けをしらないと恐れられていたエルクハート老人だが、七賢人のいきなりの来襲までは予想しえなかったらしい。
　その夜、エルクハート邸にいた人々は無差別に惨殺され、屋敷は炎上した。
「エルクハート翁の縁者は現在まで一人もあらわれていない。ただこれが本当にいないの

か、それともデュークと七賢人を恐れてあらわれないのかがよくわからない。

したがって彼の財産は宙に浮いた形だが、ゴードン氏は7年たったいまでは、相続権は市にあるのではないかと言ってきたのだ」

会議室は一瞬ざわめいた。

「……司法局では可能性はあると言っている。現在の市街の治安の悪さと、七賢人教団についてゴードン氏は承知しているらしい。それなら私としては、ぜひ彼に工場を売りたい！市の財源もおおいに助かるし、なによりもあの工場が再建できたら、旧市街の人々にとって大きな働き先ができる」

彼は人々の顔をゆっくり見渡して、

「三日後、私は契約前の最後の確認のために、エルクハート旧工場に出向く予定になっている。知ってのとおり、私は七賢人教団の暗殺リストの上位にはいっている……おそらくは筆頭者だろう。エルクハートの工場では、きっと彼らの襲撃があると思う」

ナリタ署の長官に目をむけて、

「本来なら私は危険を回避する方向を選ぶのだが、今回は状況が違ってきた。七賢人のあるところ、闇の皇子とナイトハンドがあらわれる確率がおおいにある。そこで賭けをしたい」

これら二人が敵か味方か、なんとしても早く見極めなければならないのだ。

戦わねばならぬ相手なら、早いうちに知りたい。

「闇の皇子……ナイトハンド……彼らと接触するチャンスが欲しい。どうだろう、三日月警部。君の意見はどうかね？」

長官の横の真吾警部に、わざとたずねる。真吾警部はやや不敵な表情で、

「まともな思いつきとは、おせじにも言えませんね。でも、この街はまともじゃやっていけないところだ……それならこちらとしては、いつもの準備をするまでです」

「準備というと？」

「市の病院にベッドを確保しておきます」

七賢人相手に大きな作戦をたてるときには、いつも警察側の負傷者のために部屋をめいっぱい開けさせてあると言い、

「ナリタ市の病院はあそこしかありませんし、ケガ人を収容しきれないと、署の留置場に寝かされるんです。自分は職務で負傷して留置場に送られるのはごめんです。美人の看護婦くらいつかなけりゃ……まして今回はアルディーンとナイトハンドがからんできた。何があるかまったくわかりませんからね」

美人の看護婦はできればいっぱいほしいと、真吾警部は言ってのけた。

さて……予想どおり、市長のオフィスでの会議は、デュークのもとに内通されていた。

雪村市長の言葉は、なかば間違っている……暗殺リストの筆頭は、いまではアルディーンとナイトハンドに変わっていた。

デュークの前に立っている男は、七賢人の幹部だった。彼にじかに会える数少ない人間の一人である。

デュークによってふつうの二倍の力が出る身体になっており、彼の片腕だと思われていた。

ひとわたり、報告を聞いてから〝デューク〟は彼を見やった。

「……なるほど、エルクハートの工場か」

冷ややかな声でつぶやいた。彼は非常に背の高い男だった。座っている椅子の中で、痩せた影法師のようなシルエットがゆらめく。

「ナサニエル・ゴードンとかいう男は、あんなところをいまさらどうするつもりかな？」

「事業家だという話ですから、おそらくは……」

デュークは答えなかった。

――つまらない退屈な男だ。

彼のほうはまったく男を片腕だなどと思っていなかった。ほどほどの役にたつから、いまは使っているが、代わりはいくらでもある。与えた能力はいつでも取りあげられる。

――二人の邪魔者のほうが、よほどおもしろい……特に闇の皇子は。

ナイトハンドについては、デュークにもまだきわだった策はなかった。
「たぶん、どこかの愚か者がはじめたことだろう……一人きりではないのかもしれん。機会をとらえて消してしまえ。もう一人のほうは、どうやら本物のアルディーンらしいな」
いくつかの報告を聞いて、そう思えるようになってきた。
「〝闇の皇子〟の力に憑かれて、まだ正気でいられるというのはおもしろい。だが、それならば話は楽だ……」
エルクハートの工場の見取り図を出させると、デュークは細かく指令を出していった。
「……市長もナイトハンドも殺せたら殺せ。だが第一の目標は闇の皇子だ。いいか、簡単なことなのだ。手勢をできるだけ用意しろ。人数がいる、武器もだ。そして……」

3日後。日暮れ近く。エルクハート旧工場には役者がそろっていた。
雪村市長とナリタ警察の護衛。
あちこちで待ちうけている七賢人教団の殺人部隊。そして黒衣の二人の登場者もまた、すでにそれぞれこの場所に来て、ひそんでいた。
市長の一行は慎重に警戒しながら、工場内を見まわっていく。市の建築課の役員や司法局の人間も一緒だ。

中庭まで出たときに、同行していた真吾警部は、ふと殺気を感じた。
「高いなこの工場は……8階建てだと言ったね？」
市長の質問に誰かが答えている。
「そうです。ひと昔前の建築ですので、それだけ技術も高く、システムも精巧です。本来ならこの工場内のすべてのロックや空調設備は、コンピューターで集中管理できるはずです。現在は使用不可ですが……」
「この工場の持ち主、エルクハート翁が急死した時点でパスワードを知る人間がなくなり、メインコンピューターがダウンしてしまったわけです」
と、これはコンピューター関係の専門家らしい。
「ですから、この建物の電気系統や照明設備も、基礎から配線しなおさないとダメですね」
見通しのきくど真ん中で、そんなことを言いあっている。
——グズグズしないで、さっさと動いてくれ！
真吾警部がジリジリしていると、突如、激しい撃ちあいの音が〝上階〟から響いてきた。
爆音とともに、2階あたりの壁が内側からこっぱみじんにくだけて、死体がひとつ落ちてくる……。
——はじまったぜ！
「みんなすぐに態勢をととのえろッ！　市長を守れ！」

真吾警部の号令で、部下がすぐ一行のまわりに集合し、防衛体形をとる。
「真吾警部、これは彼らかね？」
「そうです、市長。七賢人の連中、予定が狂ったな……たぶん上の階で待ちぶせしていたところを、先に襲われたんでしょう」
おそらくナイトハンドのほうですッ……真吾警部が怒鳴ったあたりで、七賢人の攻撃がこちらにも向かってきた。中庭にいる一行に、上から銃弾が雨霰とふりそそいでくる。落ちてきたガレキの陰に隠れるが、ほとんど弾よけにもならない。
アッというまに、二人の刑事が深手を負った。
「……これではダメです！　市長、退かせてください！」
雪村市長もこの状況では持ちこたえられないと判断し、うなずいた。
「やむをえない、あきらめよう」
真吾警部はそこで刑事たちと市の一行を避難させる作業にとりかかったが、すでにかなり困難だった。中庭の外に出られれば車もあり、逃げきれるのだろうが、入ってきたゲートまで数十メートルの距離が上から狙い撃ちに格好の場所だった。
――ナイトハンドが上の奴らをみな殺しにするまで待つわけにはいかない。その前にこっちが全滅しそうだ。ちくしょうめッ、なんとかしないとやられてしまう。
たった数十メートルなんだ！　……歯をくいしばった瞬間、黒のオートバイが一台、ゲー

トから飛びこんできた。
「真吾警部ッ！　掩護します！」
「アルディーン!!」
黒衣の少年はゲートとの距離のど真ん中でバイクをとめると、肩からさげていたバズーカ砲のようなものをおろして、狙いをさだめた。
七賢人の手勢からは当然撃ってきているのだが、気にするようすもない。
「なんだあれは……当たっていないのか!?」
雪村市長がさすがに仰天して息をのんだ。少年の前にはまるで目に見えない壁がはられているように、銃弾がことごとくはねかえされている。
「当たってもほとんど平気みたいですよ。しかし、あいつめ何をする気だ？」
アルディーンの撃った砲弾は正面の壁に当たると、いっきに煙幕をはった。
「はやく真吾警部……いまのうちです！　僕の前までは安全です、撃ってきても僕がはねかえせます。後ろは無理ですが……煙幕でいまなら妨害できているはずですから！」
はやくッ……アルディーンの誘導で市職員から先に中庭を脱出することができた。
「……助かったぞ、アルディーン！」
息をあえがせて走ってきた真吾警部が言うと、闇の皇子はうなずいて、
「とにかく雪村市長を無事に外へ……僕は上に行かなきゃなりません！」

例によって悲鳴と爆音が響いてくる方向に目をやった。
——ナイトハンドがまた殺しているんだ。放っておけない。
どうしても行かずにはおられなかった。
真吾警部もまた、外で車の部下に叫んでいた。
「あとはまかせたぞッ、おれは中にもどる……どうしても奴を捨ててはおけない！」

工場の3階付近で、警部はアルディーンと合流した。
「あれ、真吾警部……なにしにきたんですか？」
思わずムッときた。
——子供は家で寝る時間だぞ！
殺戮の物音は、すでにさらに上の階へとうつっている。顔を見あわせたあとに、2人は階段を駆けあがった。最上階、つきあたりのホールでナイトハンドを発見した。
——ひどいこれは、いくらなんでもやりすぎだ！
足もとに死体がゴミのように転がっている。
いましもナイトハンドはホールの中央で、数人を相手にしている。この男の戦う動きは高度に訓練されていた。筋肉質の重い体重に、凄まじいスピードをのせて攻撃する……その破

壊力は素手でも簡単に人の骨をくだいた。

いましも一人の男の喉に手をかけて、宙につりあげた……。

「……下司め、生まれてきた日をくやむがいいッ！」

恐ろしい笑いのまざった声を聞いて、アルディーンが思わず前に飛びだした。

「ナイトハンド、やめろ！　これ以上殺すな！」

ハッと手をゆるめた瞬間、つるされていた男は下に逃れて、銃をぬき、下から彼を撃った。血は流れなかったが至近距離だったのでダメージがあったらしい……ナイトハンドは一瞬よろめくと、マントをひるがえして走り去った。

「アルディーン、おれたちも逃げたほうがいいぞ」

「……そうですね真吾警部」

まず真吾警部をアルディーンが掩護して、安全な階段の陰まで走らせた。オーケーのサインに手をふると、闇の皇子が〝よし〟と微笑んだ。

続いて彼がホールを出ようとした瞬間。

「アルディーン、後ろだッ！」

真吾警部がその背後で動く人影を見て叫び声をあげる。

焼けたくいが刺さるような痛みが、身体をつらぬいた。声も出せずに涼は呆然と、自分の胸を通ってぬけたワイヤーガンの銛を見おろしていた。

真吾警部の見ている前で、アルディーンはふたたびホールの奥へと引きずりこまれていき……重く扉の閉まる音がした。

「ようこそ〝闇の皇子〟」

ホールの中には、さっきいると思った数倍以上の人数がいままで隠れていたらしい。

涼はまず、自分の胸に刺さった銛を懸命に引きぬくと、本能的にジリジリと壁ぎわに逃げこんだ。七賢人は彼をとめようとせずに、好きなほうへ逃げさせていた。

まだ動ける。まだ動けるが……痛みは気が遠くなるくらいひどかった。

彼らが持ちこんだサーチライトが、強い光でホールを照らしている。

「……もう一人が出てきたために計画がやや狂ったが、もともと君をこの場所で歓迎するつもりだったのだ。よく来てくれたな！」

涼は目をあげて声の主を見た。

「私は七賢人教団の幹部だよ。デュークさまの片腕だ」

男は残忍そうな笑い顔で、一歩近づいた。

教団の手下たちは、どういうわけか二つのグループに分かれていた……。

「あの方はここにはおいでにならないが、君のもてなしの準備はととのっている……」

彼は手をあげて、グループの一つだけにむかって〝かかれ！〟と命令した。
――捕らえるつもりか!?　しゃらくさい！
「無駄なことだ！　僕はアルディーンだぞッ」
涼がすかさず身構えて、飛びかかってきた一人の利き手を捕らえ、投げとばそうとしたとき、
――よせッ、何をするんだ!?
涼の真上で男は、自由な片方の手でナイフをつかみ、自分の喉を真一文字に切り裂いた。
生暖かい血が、涼の顔にドッとかかる。
突然のことに混乱した涼が、なんとか死体の手をふりほどいてわきへ逃れようとすると、また別の男がおおいかぶさるようにして、我が身をめった刺しにしてきた。
「やめろッ、みんな何をするんだ!!」
涼がよろけながら死体をつきとばして逃げるさまを見て、〝デュークの片腕〟が楽しげに笑った。
「……あのお方は君のことをいたく気にいっておられるようですね。我らにできる最高の歓迎を用意しようとおおせられた。いかがかな、アルディーン、この方法は？　あのお方ならばこそ、おできになることだぞ？」
次から次へと果てしなく、涼の前で信徒たちが喉を切り裂く。

「やめろ……やめさせろッ……」

目を見ると男たちはみな、誰かにあやつられているかのように虚ろな瞳で前に進むのだ。

たった一つの扉は閉ざされ、その前を正気の部隊がガッチリと守っていた。

なんとしてもこのホールから、アルディーンを出さないためだ。

涼はついに絶叫した。血の匂い……甘い香り……ゾッとするほど欲しかった。

喉の奥で、激しい渇きを感じた。目がくらむ。身体が勝手に反応しそうになるのだ。

はじめてアルディーンの魔性が荒れ狂うのを思い知った。

――ダメだ、見ちゃいけない！　見たら誘われる……。

血だまりの床をけって、涼がかなたへ飛びすさった。

むせるような匂いと血の感触で、めまいがする。着地はしたものの、そこで膝をついて動けなくなってしまった。

ようやく自由になったと思った先へ、まだ生きている者たちが追ってくるのだ……。

「……嫌だ、来るなあッ!!」

〝あの方のおっしゃるとおりになった〟。床に手をついて、ブルブルふるえているのを、満足げに見ながら、

「どうした……もう動けないのかね？　遠慮をすることはない、よく見たまえ！　ほしければまだいくらでもある。アルディーン……ともに邪教の使徒ではないのか？　七賢人はい

つでも君を歓迎するぞ」

〝彼が血の誘惑に屈して、我らの教団に入るなら、生け捕りにして連れてこい。その前にのっとられて正気を失うようなら、ほうっておけ……旧市街に放してやれ〟

あとは警察と自警団が始末してくれる。

デュークの片腕がしゃべっているあいだも、涼は必死の力をふりしぼって、死のうとする男たちの手を〝押さえ〟ていた。しかし、その力にも限界がある。

またも何人かの喉から血しぶきがあがった。

血が細い流れになって、涼のいるほうまでゆっくり広がってきた。膝がひたされて暖かい。

――もうダメだ……瞳の色が勝手に変化していく。

赤く変わっていくのが自分でもわかった。

はっきりと、殺したさに身体がふるえるのがよくわかった。

――ダメだ、気が遠くなる……苦しいんだ。もう自分を抑えきれない。どうしよう、このままでは僕はアルディーンに負けてしまう……。

涼がついに倒れかかったそのとき、ホールの通風口から異変が起こった。

いきなり、ごう炎が吹きこんできたのだ。

壁ぎわにいた者たちが、火だるまになって転げまわった。

「なんだ、どうしたんだッ!?」
ホールのスピーカーから憎しみに満ちた男の声が響きわたった。
「死ね……死ね、貴様たち、みんな死んでしまえ!!」
――ナイトハンドだ。
……その声を夢のように聞きながら、涼は火の海になったホールをつっきって窓を目指すと、体当たりでガラスを割り、後先かまわず外に飛びだした。
8階から落下していく途中で、何度か建物の鉄材に当たり、そのたびに骨がくだける痛みがはしった。
地面に激突した涼の耳に、しばらくしてから生き残りの七賢人たちの声が聞こえてきた。
「捜せッ！　奴ら生かして帰すな!!」
完全に逆上している声音に〝捕まれば殺される〟と思った。だがもう動けはしない。
――死にたくない……だけど、アルディーンの魔性に支配されるよりは、ここで殺されたほうがいいのだろう。
目の前に黒こげのピストルが落ちていた。涼はふるえる手でそれをとった。
――せめてアカデミアの生徒として、誇りをもって死にたい。
これほど弱っているいまなら、銃で死ねると感じる……〝アカデミアの誇り〟。もしも学長が、これまでのことを知ったら、はたして誇りに思ってくれただろうか。

「……さようなら、真夜子。ごめんね」
引き金を引こうとした手を何かが強く打った。続けて誰かの手で身体をかつぎあげられ、あまりの痛さに涼は気を失った。

気がついたときは、夜明け近かった。
起きようとして、痛みでつい声をあげた。
「まだ起きないほうがいい……」
横になったまま視線をやるとナイトハンドが立っていた。
ここは、どこかの廃墟になったビルの中のようだ……床に石油缶が置いてあり、火がたかれていた。
涼は硬い机の上に寝かされていた。
「……たったいま、痛みをとめる薬をうったばかりだ。効いてくるまでまだしばらくかかるだろう」
ゴーグルは外され、折れた箇所やひどい傷に簡単な手当てがしてある。さすがに傷はまだほとんどなおっていないようだった。
——ナイトハンドが助けてくれたのか。

彼が近寄ってくると、身に染みついた血の匂いがする。だがもうなんともなかった。
「……よかった」
涼は長く息をついた。ナイトハンドはそんな彼を上からのぞきこんだ。
「これにこりて、二度とバカなマネはしないことだな。お前はまだ子供ではないか」
ナイトハンドも彼なりに、少し驚いているようだ。
「ろくに殺せもしないのに、あぶない夜遊びはよすことだ！」
静かな涼の言葉が、彼に逆らった。
「……殺すのが解決だとは、僕は思わない」
ナイトハンドのマスクの下で、瞳が凶暴な光をおびた。
「バカを言うな、あいつらはデュークの信徒なんだぞッ……人を生け贄にして自分の欲をかなえようとするやつらだ！　殺すんだ!!」
「そう……彼らはわかっていないんだ。デュークはあの人たちにわざと間違った夢を見せて誘っているけど、彼についていけば闇に落ちるだけだ」
虫ケラのように殺されていった、あの信徒たちを思いだして身ぶるいをした。
「一人残らず殺してやれば、七賢人の悪はなくなる」
涼は首をふった。
「ナイトハンド……あなたのやり方では何も解決しない。何人殺しても、デュークはすぐに

代わりを得られるんだ。まだ信徒でない人を誘って、引きこめばいい……」

そうなるとネオ・ナリタの全人口を殺しつくさないかぎり、七賢人の壊滅はありえない。

「僕は、デュークは許せないけど、彼に誘われてしまった信徒の中には、きっとまだもどれる人もいると信じている。もう一度もとの光を夢みてほしい……そうしたら七賢人が悪夢だとわかるはずだ。だから僕はもう一度、彼らに正しい夢を思いだしてもらいたい……」

〝お前の夢みるものはなんだというのか？〟ナイトハンドの問いに、涼は笑顔を見せて、

「日のあたる石畳や、赤い自転車や、大事な人の笑顔や、そんなものです」

――このバカめッ！

ナイトハンドが手をあげて涼をなぐろうとした……涼が静かに見返すと、懸命に怒りを抑えているようだった。次に口を開いたとき、彼の声は低かった。

「いいだろう……そんなことを続ける気なら、いずれお前は疲れ果てて死ぬだろう。自業自得というものだ」

それから彼は、涼から離れ部屋を出ていこうとした。

ドアの前で一度ふりかえって、

「私の望みは七賢人をみな殺しにすることだ。デュークも信徒たちも、なにもかも！」

邪魔をすれば、お前も殺す。

そう言いすてて、彼は去っていった……夜明けの最初の光がさしはじめる時刻だった。

涼はいそいで窓際まではいよって、下を見おろした。一台の黒い車が、すべるようにあらわれてナイトハンドを乗せていった。

——そうか、彼は一人じゃなかったんだな！

涼はうなずいてから立ちあがった。痛みどめはようやく効きはじめたようだ。

顔に手をやって、あわててゴーグルを捜す……この姿を見られる前に、家に帰らないといけないぞ！

顔を見られてしまったな、と思ったが、それほどクヨクヨはしなかった。

なぜなら、こちらも彼について多くのことを知ったからだ。

あの激しい憎しみと怒り……深い傷のある心を見たと思った。

——なによりもあの炎だ。あんなことをするためには、ホールの通風口を思いどおりに作動させなければいけない。ところがあれはエルクハートの工場で、空調システムを動かすためには、コンピューターのパスワードを熟知していなきゃダメなんだな。

と、いうことはナイトハンド……。

「……彼は間違いなくエルクハートゆかりの者なんだ！」

第四章　美しい沙羅

「もうッ、なんてドジなの!?　涼、あんたってッ！　寝ぼけて階段から落ちた、ですってえ!?」

……翌朝、真夜子はさんざんに涼をののしった。

「ごめんなさい、真夜子」

涼は例によっておとなしく頭をさげている。

アルディーンの力をもってしても、昨夜の傷は真夜子が目をさますまでに回復しなかった。で、しかたなく涼はウソをついた。

「どこよッ、どこケガしたの!?　見せなさい！」

「い……いいよ、真夜子。ホラ、たいしたことないんだからッ」

涼はあわててあとずさって、軽く動いてみせた……さいわい、そのていどなら、もうできる。

――フン、なによ！　いっちょまえに恥ずかしがる柄かしら!?

でもよかった、どうやらたいしたケガでもなさそうね……ホッとした真夜子は、怖い目で涼をにらみ、

「いい、涼？　あんたは人より頭悪いんだから、ボンヤリしていちゃダメなのよ！」

そのあと、お姉さん気取りで手をのばして頭をなでると、

「痛いでしょう、バカねェ……本当に大丈夫なの？」

「うん、大丈夫だよ」

涼がすっかりうれしくなってごろごろいっている。

〝ちゃんと病院に行きなさいね！〟

うれしい涼は、つい言われたとおり病院の前まで行って、あわてて引き返した。

まだ肋骨が何本も折れているのに、動けるところなんか医者にみせられない！

それから1週間ほど、涼は家でおとなしくしていた。

食堂での仕事にさしさわりはなかったが、例の夜間行動はまだ無理だ。

そんなわけで、ネオ・ナリタではそれから1週間、闇の皇子の姿が見られず、かわりに涼は家で、ある作業に熱中していた。

いまや、2階の涼の部屋は、そこいらじゅうがコードや器材に完全に占拠されてしまって

いる……外の廃品置き場がうつってきたみたいだ。みんな表の山から拾ってきたのだ。見る人が見れば、それらがかなり精巧なコンピューター機器であることがわかっただろう。だが、

——真夜子が見れば、絶対捨てろって言うぞ！

彼女はめったに上まであがってこなかったが、涼はこっそりドアにカギをつけた。

しばらくあとのあるとき、真夜子はこれを知っておおいに疑った。耳をすませ、部屋の中をうかがい、

〝猫でも飼ってんじゃないかしら？〟

部屋に隠れていたのは実は子猫などではなく、捜査用のコンピューターだった。

アカデミアで最新システムを学んできた涼が、そういつまでもちゃちな盗聴機で満足していられるはずはなかったのだ。

——ネオ・ナリタと七賢人に関する情報を、ぜんぶ集めて分析してみよう。何か新しい事実がわかるかもしれないぞ。

涼は毎晩着々と作業を続けた。

とうとう全部の配線をつなぎおえてから、しばし考えることは、

——データは、ぜんぶあわせたら膨大な量になるはずだな。

警察や市のコンピューターに侵入させてもらって、集めるつもりだった。

ナリタ署の電話回線も、今度は三日月警部にかぎらず、全部いったん記録してデータにしたい。

――でもそうなると、このていどの機械じゃとてもまにあわないし……。

もっと容量もあり、計算・分析能力ともに大きいコンピューターと接続させたい！　しかし、警察や市のコンピューターでやったら、すぐにバレてしまうだろう。だけどネオ・ナリタでほかにどこがあるだろうか……ハッと涼の顔が輝いた。

指先がすばやく動いて、キーボードを操作する。青白い画面に文字が浮かんだ。

〝アカデミア・ネオ・ナリタ・グランドコンピューター／パスワードをどうぞ〟

〝158175　リョウ・アマミヤ〟

認識番号を入力すると、画面にオーケーのサインがでる。

「よし、やった！」

思ったとおり、まだ番号は〝生きて〟いた。

涼はすぐそれをロックし、ほかからのアクセスができないようにした。これでパスワードなしでは、この回線は絶対に開かない。

書類と違って、コンピューターに入っている情報は外から見えない……グランドコンピューターが容量いっぱいまで活用されないかぎり、新しい回路の存在は誰の目にも見えないのだ。

アカデミアのこのコンピューターはもっぱら授業に使用されていた。その大きさは世界でも指おりのものだ。〝クソッ、どうしてこんなに資料があるんだよ！〟と、よく来龍がボヤいていたのを思いだして、クスッと笑う。

アカデミア初等科・中等科の生徒たちが、そろって突然に、かつての涼のようなレベルになりでもしないかぎり、グランドコンピューターは永久に余裕たっぷりのはずだ。

——誰にも気づかれっこない。

涼はニッコリしてから、パスワード変更の手続きをとった。万が一これから間違って、あるいはイタズラで涼の番号を使う生徒が出たときのためだ。新しいパスワードは、と……少し考えてから涼が打ち込んだ。

〝１５８１７５　アルディーン〟

これで、よし。

七賢人との戦いに使う目的で作ったコンピューターだったが、準備がととのってから涼がまっさきにしたのは、まるっきり別の調査だった。

せっかくのコンピューターを、涼は何に使ったのか？

〝ナイトハンドの正体を知りたい！〟

いつも血の匂いのするこの男に、たまらなく興味をひかれていた。
好奇心でワクワクしながら、回線をひらくと、
――彼が、デュークに虐殺されたエルクハートの関係者であることはあきらかなんだ！
それならまず、エルクハートについて調べてみようか？
市とナリタ署と、海外のコンピューターまで……あたれるかぎりの資料を夢中で調べたが、結果はがっかりするようなものだった。
W・エルクハートは天涯孤独な老人で、どこにも縁者はいなかった。
事業家としては、強欲で無慈悲な人間で、間違いなく誰にも愛されてはいなかった。
しかも、
――なんだ、彼はあの事件の当時、もう寿命で死にかかっていたんだね。
その前、ほぼ2年にわたって、エルクハート翁は公的行事の際にも姿をあらわしてはいない。必死に隠してはいたが、寝たきりの病人だったようだ。
たとえあの虐殺の夜を生きのびたとしても、もう確実に死んでいる。
彼の財産も……彼の死とほぼ同時に、80パーセント以上がチリヂリになっているようだ。
おそらく、重役や悪徳弁護士たちが勝手に着服してしまったのだろう。
工場などの不動産がかろうじて残されているばかりなのだ。
――ウーン、ナイトハンドの影もかたちもないなァ……。

涼が残念そうにタメ息をついた。

あの黒衣の恐ろしい青年の、怒りも執念も……少なくともエルクハートとは無関係のようだ。

なにかの事情で、パスワードだけ知っていたのかもしれないな……涼はあきらめて、本来の仕事にもどった。七賢人の組織の追求だ。

七賢人教団については、当然のことだが謎が多い。

支部のいくつかは場所が知られていて、違法な銃器を持ったガードの手で厳重に守られていた(……その一つがこの前、ナイトハンドの手で壊滅させられたばかりだ)。

だがその本部……特にデュークがいて、邪悪な儀式が行われているような場所は秘中の秘とされて、警察ではその場所さえ特定できずにいた。

手がかりがないので、涼は逆に、事件と教団の動きをかたっぱしから見ていった。

——気の毒に、ナリタ署はやはり、ものすごく苦戦をしているんだな!

そのとき、ふとひらめいたことがあった。

涼は、手をとめて〝その数字〟をつくづくと見た。それから、データバンクを使って各戦地のデータを呼びだした。

そのあと、もう一度ナリタ署の記録にもどった。

「ああ、やっぱりね……」

しだいにある仮説が心に浮かびはじめた……七賢人の謎をひとつ解いたようだ。

ところで真夜子はそのころ念願の新聞記者になれて、はりきっていた。
「オッ、真夜ちゃん。お昼かい？」
いつも、がんばっているね……ナリタ日報の編集長が、ある日、声をかけた。
「あ、はい、編集長」
「おや、お弁当だね」
気軽に肩ごしにのぞきこんでみて、思わず目をみはった。
サラダにデザートまでついている。
「これ、ぜんぶ君が作ったのか⁉」
まさかね⁉　ついジロジロと見てしまう。記者としてはたしかに熱心でいい子だが、この世にも乱暴な少女に、こんな料理が、まさか⁉
真夜子もさすがに顔を赤くして、
「いえ、これはうちの居候が……」
ああ、と編集長が笑顔になった。
「そうかそうか、あのエプロンをかけた彼だね！」

思い出して、彼はなぜかワハハと笑った。

実は彼はこのあいだ一度だったが、真夜子の家に来たことがある。はじめての記事の校了で、遅くなってしまったのを送っていったのだ。

〝大丈夫です〟と、真夜子は言ったが、もう日が暮れていたし、特ダネ持参で採用されたこの少女が、どんな生活をしているのか知りたくもあった……18だと言ってはいるが、本当は16だということも知っていたのだ。

廃品置き場に住んでいる……と聞いて、すこし不安だったが、行ってみると倉庫の家からは明かりがもれていて、意外に居心地よさそうである。しかも、

「……ただいま、帰ったわよ！」

扉をあけると同時に、見たこともないほどかわいい男の子がエプロンをかけて飛んできて、上気した頬で、

「おそいおそい、真夜子！　今日はマスターがお肉をくれたから、ごちそうなのにッ」

うれしそうにそう非難してから、見知らぬ客の姿に気づいたようすだ。人みしりするように、もじもじしている。

「あッ、あの編集長！　これうちの居候の涼ですッ」

真夜子はすでに顔を真っ赤にして、すごい目で涼をにらんでいる。

——もうッ、涼のバカ！　恥ずかしいわね！


Birthday

さそわれて一緒に食べていくことになった編集長は、腕前にかなり感動した。
「すごいなあ、ホワイトソースってこんなにうまいもんだったかなァ！」
とろけるようなシチューを夢中ですくっていた彼は、ふと中のにんじんの形に目をとめた。もしや、これは……？
「……うさぎさんとアヒルさんだ」
「へ、編集長、それはッ！」
テーブルの下で、真夜子が思いきり涼の足を蹴とばした。
「ど……どうしてこんなことするのよッ⁉」
痛いッ……男の子が半泣きになって言い訳した。
「だ、だって真夜子、この前僕がこれにしたら、残さずにんじん食べてくれただろう？」
——キャーッ、もう殺してやりたい！　バカバカッ、涼のバカ！
結局、編集長はおかわりを2回して帰っていった。
「……女房が新婚のころは、ああいうのを作ってくれたっけなァ」
思いだして、なにか懐かしむように編集長がつぶやく……それから、急に手をたたくと、
「ちょうどいいや、真夜ちゃん！　君とあの彼とで取材に行ってきてほしいところがあるんだ」
「涼とですか？」

「ああ、今度、オペラ・ホールで市が主催のチャリティ・パーティーがある。知ってるだろう？　例の香港からきた大金持ち、ナサニエル・ゴードン氏の歓迎レセプションだよ」

謎の富豪ゴードン氏は、めったに人前に姿をあらわさないから、このパーティーが取材のチャンスだ。

「まあ、どうせマスコミとは話さないだろうが、写真くらいほしいからね……行って撮ってきてくれ。これ、招待チケット……報道用のチケットだから、服装は気にしなくていいが、カップルでないと入れないことになってるから二人でいきたまえ」

チケットさえあれば、必ず中には入れてくれるから……と編集長は言って、ポンと真夜子に手渡した。

オペラ・ホールは古い建物で、旧市街の中にあった。

さすがにこの建物のまわりは、旧市街とはいえ、それほど荒れていない……今夜は続々と高級車がその前に集まっていた。

着飾った男女が笑いさざめきながら中に入っていく。

「……ネオ・ナリタにも、こんな人たちがいたんだねえ！」

涼がびっくりしているのを、真夜子がわざと鼻で笑い、

「これが社交界ってやつなのよ」

自分も見たのははじめてなのに……素直じゃないんだから。

これらの人々はみんなネオ・ナリタ郊外の住民で、事業主やその家族たちであった。

パリやニューヨークなどの都市とは比較にならないかもしれないが、それでも上流階級といえよう。

チケットを見せて中に入ってから、真夜子は涼に命令した。

「ここでちょっと待っていて！　あたしはゴードン氏を捜しにいかなきゃならないけど、あんたが来ると足手まといだもの！」

動くんじゃないわよ……真夜子は言って、人ごみをかきわけて行ってしまった。

残された涼は、しばらくは言いつけどおりにその場所で待っていたが、入り口に近いそこは人の出入りが多く、けっこう邪魔にされる。あまりぶつかったり、こづかれたりするので、涼はとうとう嫌になり、もうすこし静かな場所を捜すことにした。

あてもなく歩いて行くうちに、奥へ迷いこんだらしい……女の子の泣き声に、ふと足をとめた。

「……あたしじゃありません、本当です！」

声は窓の外、さらにその上から聞こえた。

——2階から？

涼はあたりに人気がないのを確かめてから、ひらりと窓を出て、上に躍りあがった。ちょうどバルコニーがあったので、その陰からソッと中をうかがうと……。

部屋には華やかなドレスを着た六、七人の少女たちがいて、なにかあったようすだった。粗末な身なりの、これはメイドらしい少女が立って、泣きながらくりかえしている。

「ペンダントなんて、あたしは見ませんでした！　知らないんです、お嬢様、本当です！」

一人の少女が、困った表情でためらいながら、

「そうは言っても、私たちがいなくなってから、この部屋にいたのはあなた一人だし……ね、お願い。あれは私のお母さまの形見で大切な品なの。もし……返してくれれば何も言いません！　お金がいるのだったらさしあげるから……」

しかし相手は必死の声で〝なにも知りません〟と言いつづけた。すると、

「もういいわよ、ヘレン。この子が盗ったに決まっているじゃない？　警察を呼ぶしかないと思うわ！」

なかでひときわ美しい少女がでて、冷たい声でそう言いはなった。

「でも沙羅……かわいそうだわ」

「かわいそうだなんて言うことないわ、だってあなたのものを盗んだのよ？　警察にやりましょう、メイドなんて、どうせいくらでも代わりがいるでしょう？」

……娘がワッと声をあげて顔をおおった。

「どうしたのかね、いったい？」
そこで大きな、よく通る声が入ってきて……涼はあわてて、また下に飛びおりていた。
部屋に入ってきたのは、沙羅と呼ばれた少女の父親だった。
「何かあったのかね、沙羅？」
沙羅はつややかな黒髪をふって、父の腕に手をかけた。
「いいえ、お父さま。たいしたことじゃないんです」
「そうかね、それならいいが……お前にちょっと大事な話があるのだよ」
父は満足げに愛娘を見おろして、うなずいた。我が娘ながら、実に美しい。
——これなら、きっと……。
彼は娘をつれて隣の部屋にうつり、二人きりになってから話をはじめた……。
「……かわいい沙羅、実は今夜、お前に一人の青年を紹介しようと思っているのだ」
まあお父さま、どんな方かしら……うれしそうな声に、ちょっとためらって、
「フム……彼は外見はあまりよくない。左の脚がすこしねじれていて、車椅子なのだ。それと片頬にちょっと目立つアザがある……子供時分からあって、どうしても消せないのだそうだよ。こらこら、沙羅、そんな顔をしてはいかんよ」
父はめずらしく真顔で注意をした。
「なぜかというと、その男はたいへんな富豪なのだ。わかるね？　香港からきたナサニエ

ル・ゴードン氏だ。彼はそんな理由もあってまだ独り身だが、お前は嫌がらずに、ぜひ親しくなってもらいなさい。いいね……かわいい沙羅？」

沙羅は、はっきりと瞳を輝かせてうなずいた。

「ええ、お父さま。よくわかりましたわ！」

それから彼女は父につれられ、白いドレスをひるがえして階下のホールへおりていった。

ポケットにはルビーのペンダントが入っている。

盗んだのは彼女だった。

一方、涼は急いでもとの場所まで戻ると、ドキドキする胸を押さえていた。

――あの子、かわいそうだったな！

本当に彼女が盗ったのだろうか……顔をくもらせてうつむいていると、真夜子が戻ってきて声をかけた。

「涼、おまたせッ、ゴードン氏を見つけたわ！　何枚か写真も撮ったけど、もうすこしねばっていいシャッターチャンスを狙おうと思うわけ！　あんた、いつまでもここじゃ退屈でしょう？　だからむかえに来てやったわよ」

真夜子に連れられて明るいホールの中に入る。

「いいわね、ボケやったら殺すわよ！」

きらびやかな人々がたくさんいるのだ……同じ年ごろの少女たちが、見たこともないようなドレスを着ているのを見つめ、物陰から真夜子がタメ息をついた。

「……すッごく素敵ねえ」

涼は、いつものジャンパーとジーンズの真夜子を見た。じゅうぶん、かわいいと思った。だが、ほんのすこし真夜子の気持ちもわかっている。あのヘレンや沙羅のようなドレスは、よく知らないがキラキラする飾りもついていて、とてもきれいだった。

「真夜子、ああいうのが好き？」

そうねえ……真夜子の声を聞きながら、涼がふと遠い目をした。

——もし……もしも真夜子があんな服を着て、社交界やパーティーに行きたいなら、僕はそうしてあげられるんだよ。

いまからでもアカデミアに連絡はできる。いろいろ事情は聞かれるだろうが、ウソでも説明はできるだろう。そしてどこかの公使になる？

少しも気は進まないが、可能なことだった。そうすれば、もし彼女が望むなら、ドレスもパーティーも思いのままにしてあげられる。涼はひそかにタメ息をつき、手をにぎりしめた。

——もし真夜子が本当にそう望むなら、僕にはできる……真夜子のために。

「……本当にああいうのが好きなの？　本当にそう思う？」
涼ったら、不思議な目つきで自分を見ている……真夜子はふと首をかしげた。
「バカね、涼……もちろん大好きよ。あたりまえじゃないの！　一度は着てみたいわァ……でもきっと一度でたくさんかもね？」
そう言ってペロリと舌をだした。
「あんなの着たら、あたし動けなくなっちゃいそう。それにあの格好じゃ取材できないわ」
真夜子の望みは、あくまで花形記者であった。
「そうね……いつかあたしが超一流の記者になって賞とかとるわけ、そうしたら授賞式には絶対着ていくわ!!　あんなのとか……あれもいいな！」
涼の顔がみるみる明るくなる。
「そのときは、僕も一緒でいい？」
「会場のすみっこならね！」
〝うん、おとなしくしているよ〟。涼がうなずいたとき、真夜子がハッと彼の手を引いた。
「見て、あれがゴードン氏よ！」
一台の車椅子が、会場に出てくると同時に人々にとりまかれていた。
もっと近くに行くわよッ……真夜子はドンドン人垣に切りこんでいく、顔が見える距離まで近よってようやく足をとめた。

「わあ、見てごらんなさいよ、涼……あのゴードン氏のそばにいる女の子！　あの子、素敵ねェ！」

指さした少女を見て涼がハッとした。あの沙羅という娘だ。

たったいま、誰かの手でゴードン氏に紹介されるところらしい。

「どうしたの、涼？　最高にきれいじゃないの……うっとりしない？」

涼はためらいながら首を振った。

――あら、あんたにしちゃめずらしいわね。いつもなんにだって感激するくせに！

涼は彼女のむごい言葉と、冷たそうな笑顔をおぼえていたのだ。

だが、しかし……ナサニエル・ゴードンが見たのは、まったく別のものだった。

彼は20歳の青年だが、身体が不自由ということで、いつも車椅子に乗っている。上等な夜会服につつまれた左の脚は、膝から下がむざんにねじれていた。

顔も、それだけなら浅黒い端正な面だちなのだが、片頬……目尻からあごにかけて一面に血のようなアザがひろがっていて、たいていの人間は、見るとすぐ目をそらしてしまった。

めったに人前に姿を見せなかったが、今夜はひさしぶりに夜会にあらわれ、洗練された態度で、人々のあいさつに応えている……その前に、いま一人の少女が紹介された。

「沙羅・アッシャーでございます」

純白のドレスを着た美少女が、しとやかに頭をさげる。

——なんて美しい少女だろう……。

ゴードンはふと頬に手をやった。はじめてこの顔のアザが、ひどく嫌な気持ちになったのだ。だがさいわい、この美しい娘はアザを気にかけるようすもなく、彼の目を見て優しく微笑んでくれた……。

「……ナサニエル・ゴードンといいます。お目にかかれて光栄です」

そう答えて、ふと目をあげたとき、人垣のすぐ近くに一人の少年がいるのが見えた。

——あれは！　あの子供は!!

とつぜん彼の顔からすべての表情が消え、顔色が死人のように青ざめた。

視線がからみあい、激しい火花が飛んだようだ。

手に持ったグラスがとり落とされ、床で粉々にくだけ散る……つぎに彼が目を向けたとき、少年はもうどこにもいなかった。

ナサニエル・ゴードンと目があった瞬間、涼はとっさに身をひるがえして人ごみに紛れこむと、まよわず近くのテーブルの花瓶をひっくりかえした。

「こらッ……お前は！」

間髪をいれずにボーイがとんできて、首根っこを押さえて外に連れだした。

――アッ、涼ったら！　とうとうやったわね、あれほど言ったのに！
真夜子は気がついて、やきもきしたが、まだ仕事があるのだ。
――どうしよう？　まだ取材があるし、レセプションの最後までいなくちゃいけないわ……ああ、もうッ、涼のバカ！　ここに残るしかないわね。
計算どおり、涼は会場から放りだされ、ただ一人になった。
いったん表に出て姿を消す……そしてすぐにまた〝アルディーン〟として戻ってきた。
会場にはまだ人がいっぱいで、ナサニエル・ゴードンも中にいるようだ。
彼のようなＶＩＰは、そう簡単には出てこられまい……涼はもうしばらく待つことにして、ふとつぶやいた。
「……真夜子、どうしているかな？」
取材があるから、たぶんまだ会場の中にいる……勝手に出てきてしまったが、あれからどうしただろう？
どこにいるのか、ちょっと捜しにいこうかな？
そのころ、ちょうど真夜子のほうも同じように考えていた。
――あのとんま！　本当にドジなんだから……ちゃんと一人で帰れたかしら？
会場を離れて、バルコニーから庭を見ていた真夜子は、
――あんな奴でもいないと気になるじゃない？　あのバカったら、先に出ていくんだもの

……本当は追いだされたんだけど。最低！

本当は華やかなパーティーで一人になって、心細くなってしまったのだが、真夜子が素直にみとめるわけがない。

――あいつめ、人に心配かけて！　帰ったら、しっかり怒ってやらなきゃ！

突然、背後から声がして、真夜子がふりかえる。

「……お一人ですか？」

「アルディーン！」

黒衣の闇の皇子がいつのまにか立っていた。

「また、お会いしましたね。記者さん？」

「ま……真夜子というのよ」

真夜子……アルディーンは微笑んで言った。

「いい名前ですね……すごく好きな名前だ。私も、そう呼ばせてもらっていいのですか？」

――ドキッ！　心臓とまるんじゃないかしら!?

真夜子は思わずあとずさって、ジャンパーのすそを夢中で引っぱっていた。

「え、ええ、もちろんですッ」

――アルディーンだわ、どうしよう？　すごい、ラッキー、また会えちゃった！　あああッ、そうだ、こんなことなら夕べ髪を洗っておけばよかったわ！

いそがしく身なりをととのえている真夜子である。涼はふきだしそうな気持ちをがんばってこらえて、

「あなたの書いた記事、読ませてもらいました。おかげで、とても助かっています」

「そんな……お役にたててうれしいだけだわ」

キラキラと輝く瞳、ふるえる優しい少女の声。ふだんの真夜子とは別人のようだ。

涼はふと、なにかの魔法にかかったような気持ちがした。

「あの……アルディーン、ここへは何をしにあらわれたの？　七賢人が来るの？」

それは取材ですか？　……闇の皇子の言葉に、真夜子はドギマギと首をふり、

「え……そうね、取材もあるけど、あたしが知りたいだけでもあるの。会えてとてもうれしいわ、アルディーン……笑わないでね、あたし、あの……ずっとまた会いたくて」

信じられないことに、アルディーンもうなずいて手をさしのべたのだ。

「……私もです、真夜子」

漆黒のケープが頬にふれ、優しいけれど力を秘めた腕が、真夜子を抱きしめた。

しばらく時間がたって、アルディーンがそっと言うのが聞こえた。

「冷たいでしょう、私は妖魔だから……」

いいえ、そんなことないわ……氷のような腕の中で、真夜子はうそをついたとも思わなかった。見あげると、アルディーンはうれしそうに笑った。

「ありがとう、あなたはとても優しい人だ」
——でもそんなこと、とっくの昔から知っているんだ。優しい真夜子……誰よりも大好きだ！
くちびるをよせる勇気はなかった……この時刻、身体は死者のように冷たいとわかっている。そのとき、ホールから音楽が流れてきた。
黒衣の少年は目を輝かせて、真夜子の手をとった。
「聞こえますか？　ほら、ダンスがはじまった……」
あたし、ダンスなんか……真夜子はためらったが、闇の皇子はとてもうまく彼女をリードしてくれた。
——アルディーン、不思議な人。
たったいままで、真夜子はこのオペラ・ホールで一人ぼっちの気がしていた。
まわりはみな、きらびやかな上流社会の人々だ。みすぼらしい格好で強がっていても、本音は一人でビクビクしていたはずなのに……そんな気持ちは、もうどこにもなかった。
彼の腕にいると、不思議なほど安心できるのだ。
どうしてだろう？　とっても素直な気持ちになれる……まるで家で、涼と一緒にいるときのように。おとなしくて、怖がりで、すぐ泣いたり笑ったりする涼……真夜子はもうずっと前から、彼があの家にいるような気がしていた。

帰ると家に明かりがついている。いつも温かいご飯と涼が待っていて、2人でおしゃべりして、おやすみを言って……いまもきっと廃品置き場で、自分の帰りを待っているだろう。

——ちゃんと帰れたかしら？　また泣いてないかしら？

こんなときになぜ、あの居候のことを考えたのか……。

「……涼」

ハッとした瞬間には、アルディーンの腕から離れていた。

見まわしても黒衣の影はもうどこにもない。

その場で真夜子は思いッきりくやんだ。

——キャー、やだッ、なんてこと!?　せっかくあの方と一緒だったのに、どうしてそこで、今世紀最高のバカの名前を呼ばなきゃならないわけ!?　ドジドジッ、真夜子のドジ!!　じだんだ踏んで自分をののしっている真夜子。

——我ながら愛想がつきるのね！　最低娘ッ……見なさいよ、あの方あきれて行っちゃったじゃないの？　あたりまえよ！　ああ、アルディーン、そんなつもりじゃなかったの……きっときっと怒っているでしょうね!?

……闇の皇子は、バルコニーから少し離れた屋根の上で、自分の心臓の鼓動を抱きしめていた。

——僕の名前だ……僕の名前を呼んでくれた！

幸せで息がつまりそうだった。
真夜子が好きだ！　こんなに大好きだ！　できるなら何度でも叫びたかった。
「愛してる、真夜子」
やがて彼は夜の風に向かって、そうささやいた。
こうして夜の闇につつまれていると、彼にはアルディーンの力の性質がよくわかる。ドク・佐矢霧でさえ知らないだろう、闇の皇子は夜風の霊だ。
自分だけにはわかる。この街の夜の風は、みなそのしもべ……だから涼は風に向かって、静かにささやいた。
——おいき、夜の風。真夜子に伝えておいで……アルディーンは君を、愛しているよ！
……一陣の夜風が、たしかに真夜子の頬をかすめて去り、少女は驚いて顔をあげた。
言葉はわからないが、誰かが耳もとで優しくささやいていったような気がしたのだ……。

……それから涼は、下の動きに目を向けて、気持ちをするどく引きしめようとした。
ようやく人々が帰りはじめている。
ナサニエル・ゴードンの車は黒のベンツだった。運転手らしき老人が、彼を助けて中に乗せ、ドアを閉める。二人が気づかぬうちに、小柄な黒い影が近づいていた。

車の窓をコツコツたたく音がして……目をやると、そこに黒衣の少年が立っていた。
「失礼、入れてもらえますか？」
なかば涼は、車がそのまま逃げだすかもしれないと考えていた。だが、ドアが開き……車は黒衣の影を吸いこんで、なめらかに走りだした……。
後部座席で、ゴードン氏とならんで座る。
「こんばんは。おたがいに初対面でもないから紹介の必要はありませんよね？　ごぞんじでしょう、僕はアルディーン」
謎の富豪の顔をのぞきこむようにして、アルディーンが笑った。
間近で見るこの青年の顔は、さっきとは別人のように厳しく、暗かった。
「そして、あなたがナイトハンドだ」
そこで涼は、相手がこらえきれずに大きく息を吸う気配を感じた。
獲物をしとめたハンターに似た、すこし残酷なスリルが胸にひろがる。
あのとき、ホールで偶然顔をあわせた瞬間に、彼が顔色を変えたのを見て、すべてわかってしまった。
――アカデミアの関係者をのぞいて、僕を見てあれほど驚く人間はこの世でただ一人、ナイトハンドだけなんだ！
すでにして、彼からはなじみのある何かが感じられた。涼にはまごうかたない、染みつい



た血の匂いだった。

荒い息づかいを無理に殺して、ナサニエル・ゴードンがたずねる。

「それで……いったい何をしにきたのだ？」

ナサニエル・ゴードン……あるいは闇の殺戮者・ナイトハンドだ。

正体を知られたとさとった瞬間、洗練された昼の仮面は消えさり、荒々しい第二の顔がそこにむきだしになっていた。

「貴様、何が目的でやってきた⁉」

……火を吹くような目を、涼は見つめ返した。

「七賢人についての大きな情報をつかみました……知りたいですか？」

凶暴な目の輝きがなによりの答えだろう。ナイトハンドの手がグッと握られた。

「彼らの本部かもしれない場所を見つけたと思っています。だが、あなたに知らせるにはひとつ条件がある……」

〝どこだ、そこは⁉〟

ナイトハンドの性急な声を前にして、涼はまず自分の意志を通そうとした。

「ダメです！　まず、僕の条件をのんでくださらなければ……ア、アアッ」

いきなり相手の手もとからロープがのびてきて、まるで生きているかのように喉にからみついた。ナイトハンドは座席の一方の端から、それをあやつり、容赦なくしめあげはじめ

た。

「言いたくなければ、無理にでも言わせてやる！　サア、その場所とはどこなんだ!?」

金属のロープには、なにか特殊な仕掛けがしてあるらしい。あやつり手のわずかな力も数倍に増幅して伝えるように。

ナイトハンドはそれを力のかぎり引きしぼっている……涼は、もがきながら、なんとかはずそうと苦戦していた。

「旦那さま!!」

運転席からさっきの老人が叫んだが、青年の耳には入らないようだ。

目をらんらんと光らせて、いっそう強く力をこめる。

「苦しい……離せ」

「言え、貴様、言わないかッ……それともこのまま脊椎を折ってほしいのか!?」

苦しまぎれの涼の〝力〟が革ばりのバックシートをずたずたに引き裂いていた。

このままでは本当に殺されかねない。涼はありったけの声をふりしぼって叫んでいた。

「……やってみろ！　このバカ野郎！　一度は自分で助けた生命を、そんな気まぐれで殺せるものなら、あんたは見たこともない大バカだッ！」

……数秒後、喉もとからロープが離れた。

闇の皇子はあえぎながら、金属の蛇がまた、ナイトハンドの夜会服の袖のどこかに消える

のを見ていた。

「……条件とはなんだ」

これ以上殺さないこと……涼の言葉を聞いて、ナイトハンドは氷のような声で、

「とうてい無理だな」

「それならせめて、必要がないかぎり殺さないでほしい!!　少なくとも、今度だけはそうしてもらう！」

涼は祈るような気持ちで、相手の顔をみつめた。

――頼むから……ナイトハンド。

不安に緊張した気配がやがてフッとゆるむと、ナイトハンドは〝条件〟をのむと言った。

それから、はじめて自分の周囲のシートがズタズタになっているのに気づいたらしい。目をあげて驚いたように、

「これはッ……お前の力か!?」

涼はうなずいた。

「……なぜ私を切らなかった!?　これほどの力を持ちながら、さっきなぜ私に使わなかったのだ……バカな」

――死にたいのか？

自分のところだけ、台風の目のようによけているのを、やや呆然としてながめている。

死にたがっているわけではない……とっさのことだから、自分でもよくわからなかったが、しばらく考えたあと、涼は返事をした。

「たぶん僕が、あなたを信じていたからだ。きっと途中でやめてくれると、心の底では思っていました」

……旧市街、廃品置き場から少し離れた四つ角で、涼は車から放りだされるようにしておろされた。

〝明日の昼、この同じ場所で〟

返事もせず、ナイトハンドはドアを閉めて行ってしまった。

翌日、約束の時間きっかりに、ナイトハンドは四つ角に姿をあらわした。

濃いサングラスで顔を隠し……来ようかどうしようか、そうとう迷っていた気配が感じられた。

「ついてきてください」

先に立って案内する涼に、スタスタとついていく。サングラスがなくとも、誰も彼の正体はわかるまい……涼はチラリとそう思った。

赤黒い頬のアザは、きれいさっぱり消えている。

左脚を不自然な形に曲げていたストラップをはずすと、ナサニエル・ゴードンは背が高く、力強く、どこも完全な身体の青年だった。

涼の視線に気がついた彼は足をとめた。

「何を見ているんだ？」

「いえ、あの……今日は車椅子はいらないんですね」

とまどった涼はバカなことを言った……ナイトハンドはくちびるをゆがめて、

「私が人前でマスクをはずすことはありえないが、ナサニエル・ゴードンは動けないことにしておいたほうが、なにかと便利だからな」

「じゃあ、ずっと……？」

ナイトハンドはあっさりうなずいた。

〝富豪の〟ナサニエル・ゴードンと〝闇の〟ナイトハンド……二つの顔の印象は、できるだけ違えておいたほうがいいとはわかる。

――だが、そのために彼はあんな姿でずっと通してきたのか⁉

若い顔に人が目をそむけるほどのアザを塗らせ、苦痛をともなうストラップで身体をねじ曲げて……信じられない！

不思議さを、涼は胸の中だけでかみしめた。

「おい、どこへつれて行くつもりだ。ここから先はゴミ捨て場ではないのか？」

すこしばかりいらだった声で、ナイトハンドがたずねる。
この先が僕の家です……涼は彼を住みかの倉庫まで連れていき、扉を開けようとした。
まだ昼なので真夜子は仕事に出ていっていない（ちなみに涼は定休日だった）。
「ここが？　お前の家？」
ナサニエル・ゴードンが思わず眉をしかめた。
〝汚い〟
「やっぱりゴミ置き場ではないか……」
彼にはこんなところに人が住めるとは思えない……涼が少し気を悪くしたようだ。
「どうぞッ……入ってください！」

上の部屋の機械群を見て、ナイトハンドの目の色が変わった。
専門の知識はないが、それでもこれがかなりの設備だとわかる。驚きを隠せずにいる彼を見て、涼はやや得意そうだった。
――これはなんなのだ？
ちょうどそばの機械のランプがついた。
「ああ……それはナリタ署の電話回線です」

これから話そうとしていることにも関係がある。涼は手をのばしてヘッドホンを取りあげ、説明した。

「ナリタ署にはいってくる電話はすべて聞きとれます……いまはいちおう捜査課にあわせてありますけど。聞いてみますか？」

違法だってことはわかっているんだ……だが、さんざん考えたあげくに、涼はそれを無視することに決めていた。

ナイトハンドは、はじめからそんなことは気にしない。彼がうなずいたので、涼はボリュームを大きくあげた……通話が流れはじめる。

「うん、そう、ハニー……また今夜、会おうね。待ち遠しい？　おれもさ！」

――しまった、これは真吾警部だ！

あやうくヘッドホンを取り落としそうになる涼。

――やばいよ、また女の人だ……あの人、どうしてこうなのかなァ！

いつにもまして甘ったるい真吾警部の声が続く。涼の考えでは、今日は一段とひどい！

「愛してるよ。いますぐ飛んで会いにいきたいくらいさ。そうしたらキスしてくれる？　そう？　なら、おれ本気で羽はやしちゃおうかな、なんて。カルメリータ、好きだよ。君のかわいい泣きぼくろを早く見たいな……」

「これはナリタ署の……三日月か？」

ナイトハンドの妙に押し殺した声。涼はうわの空で、真吾警部の空想の羽をむしりつづけている。

——真吾警部のバカ！　よりによってナイトハンドのいる前で、あああッ、もう穴があったら入りたい!!

嫌いだ！　大嫌いだ！　電話の声はおかまいなしに、

「じゃあね、今夜ね……キスをいっぱいとっておいて！」

と、ささやいて話をすませた。相手の受話器が置かれたあとも、なぜか電話を切らずにかすかな機械音が伝わってくる。

——ん？

涼がいぶかしんだと同時に、うってかわったような怒鳴り声がボリュームいっぱいで響きわたった。

「アルディーン!!　てめえ、そこにいやがるんだろう？　やっとわかったんだからな、貴様、署の電話を盗聴しているんだな!?」

どうやらこれは録音テープとみた。

「……貴様が盗み聞いているのは勝手だが、おれのプライベートに口を出すなッ！　ガキに大人の気持ちがわかってたまるか！　おれが不潔ならてめえはなんだ!?　ハン、どうせ貴様なんかキスもまだだろう？　免許もまだの子犬ちゃんのくせに、Ｆ１ドライバーに説教しよ

うってのが図々しいぞ!!」

——まさか……彼は、これを電話のたびごとに??

あぜんとしている涼の後ろから、異様な気配が伝わってきた。

ふりかえると、ナイトハンドがすごい形相で立っている。涼はギョッとした。

くちびるをきつく噛み、こぶしを握りしめているのだ……いまにもかんしゃくが爆発する寸前と見うけられた。

——どうしよう、彼、怒っているよ!

昨夜の出来事を思いだして、無意識に手が喉をかばう。

そうだ間違いない! この男の性格からして、きっと許せないはずだ。そして絶対に、気が短いかんしゃく持ちで……涼の背筋がゾッと凍りついた。

〝真吾警部と僕があぶないッ〟

「あ……あのッ、彼はときどきこうなるけど、ちゃんと捜査はしているし、これさえなければむしろすごく信頼できる、有能な警察官……」

喉をおさえてジリジリあとずさる……ナイトハンドはそのまま無言で肩をふるわせていたが、やがてグッグッという妙な音がしたかと思うと、

「アーッハッハ、アハハ、アハハハ」

彼はとうとうこらえきれずに、大声で笑いだしていた。

「なんてことだ、アルディーン！　そうか、お前はこ……こんなことまで言わせておくのか！」

身体を二つ折りにして、苦しいのにやめられないらしい。あのクールな彼が、もはや別人のようなありさまである。

「……誰でも彼でもみさかいなく信用するから、こういうことになるのだぞ。ハハハッ、苦しい……〝子犬ちゃん〟……アーッハハハ」

とめようとしても、とめられない。

――知らなかった……ナイトハンドは、めったに笑顔も見せないが、笑うときは一、二年分まとめて笑うらしいや。

目を丸くして見ている涼の前で、彼は息をつまらせて笑いつづけた。

――笑い上戸とは知らなかった!!

……ナイトハンドの発作がおさまると、ようやく涼は本題にとりかかれた。

コンピューターの画面を見せて、あらわれたデータの説明をする。

もとはナリタ署の事件記録を調べていて、気がついたことなのだが……。

「見てください……この数字を。ナリタ署の警官で、この3年間に殉職した人間の数です」

「ひどいものだ。デュークの軍勢はそれだけ手ごわいというわけか」

「僕もはじめはそう思っていました……」

アルディーンは言って、キーボードをすばやく操作した。

「たしかに七賢人教団が持つ銃火器は、圧倒的です。警察署としてはどこよりも重装備のナリタ署と、十分に互角だ……でも、これを見て！」

〝ためしに個々のデータを打ちだしてみましょうか？〟

アルディーンの言葉に続いて画面に文字が浮かぶ。

〝トミオ・葛岐。右脚貫通銃創。ナリタ病院収容後、手当てのかいなく死亡。死因・出血多量〟

〝ハロルド・木島原。胸部骨折、病院で腹膜炎を併発して翌日死亡〟

〝ヨウジ・小杉。背後からショットガンで撃たれ、ナリタ病院に収容。ショックによる心臓停止〟

「どれもこれも〝手当てのかいもなく〟だ！　おかしい……攻撃で即死した人間も、もちろん多い。けれど、なにかおかしいとは思いませんか？」

画面に奇妙な比較表が浮かびあがった。

「あちこちの戦場からデータをひろってきました。負傷者が病院に保護されてから、死亡する割合です。ヨーロッパ、アジア、南極……過去のどの激戦地とくらべても、ナリタ署の人間の死亡率は異様に高い！　全快して退院できるケガ人は、ふつうの数字のほぼ半分なんて……。

わかりますか？　ナイトハンド……これらの殉職した警官の大半は、いったんは病院まで収容されてから死亡しているんです」

アルディーンの瞳がものいいたげに向けられている。

「いずれの場合もすべてナリタ病院です」

「しかし……もともとこの市に公営病院はひとつしかないのだから、それはあたりまえではないのか？」

死亡率の高さも、現場から運びこまれるのが遅すぎたせいかもしれない。

アルディーンは漆黒の髪をゆさぶって、一本の録音テープを巻きもどした。

「これを聞いてください」

さきほどとは別人のようにキビキビした真吾警部の声が、部下に命令している。

〝吾妻……今夜出動の用意をしておけよ！　装備はフル、人数は3班全員だ！　ナリタ空港に七賢人の密輸品がくるらしい……奴らにこれ以上、武器を渡せるか！〟

「これは僕が、彼に内通者のリストを渡したあとの作戦です。この会話が、僕以外に盗聴されていないことは、自信をもって言えます！　それでもこの出動は七賢人にもれていた」

さまざまな指示と綿密な打ちあわせのあとで、真吾警部が笑いながらこう言った。

〝以上だ、それから病院へも忘れずに知らせておけッ……いいか、てめえが無傷で帰れるとはかぎらないんだぞ！　そのときになって泣きをみたくねえだろうが？〟

ナイトハンドの表情が変わりはじめた……。

「……病院から情報がもれた、と？」

――つまりこういうことか？　出動がある前、ナリタ署からは、かならず病院に連絡がある……病院からデュークに連絡が行く？

「ナリタ病院に、おおがかりな手引きをする者がいるというのか？」

それだけとはかぎらない。闇の皇子が考えながら言った。

「七賢人の副業に臓器売買があると聞いています。獲物は人狩りで集めている……そして集めた人体から臓器を摘出するにも、保存するにも、最適なのは病院じゃありませんか？僕はあの病院自体が、デュークの手のうちなのではないかと考えています」

まさか……ナイトハンドが思わずつぶやく。

「僕は一度、あの病院にいって、あまりの血の匂いに驚いた」

「病院から血の匂いがするのはあたりまえだろうが！」

「でも、いつも地下から？」

ナイトハンドがわずかに息をひいた。やがて眉をひそめて、記憶をたどるように、

「実は私は数日前、ナリタ市の客として市長に連れられてあの病院を案内されたのだ……」

病院の各階や入院棟。だが、地下は……。

ナイトハンドの顔色が、今度こそ大きく変わった。

「アルディーン、雪村市長はあのとき、あの建物に、地下はないと言っていたぞ！」

――もしそうだとすれば、ナリタ署はたいへんな裏切り者を後ろだてにしてきたことになる！

アルディーンが彼に向かって、まっすぐな目で、

「十中八九、病院の地下は七賢人のアジトだと思います。職員にもかなり混じっているのかもしれない。

ここは、落とすなら僕はいっきに落としたい！　そうでなければ、多くの獲物を逃がしてしまうと思うから……だからナイトハンド、今回、僕はぜひあなたの力がほしい。あなたには武器があり、おそらくはナサニエル・ゴードンとして手勢もいくらか持っているはずだ」

それについて、ナイトハンドは否定はしなかった。

「それでお前は私に殺すなというのだな？」

そう、せめて今度だけは……闇の皇子がうなずいた。

ナイトハンドの瞳は暗く、何を思っているのかよくわからない……しばらくののち、彼は嫌そうにタメ息をついてから、

「よかろう、今度だけは。はじめからその約束だったのだ。それで決行はいつにする？」

〝できれば次の満月の晩に〟という涼の答えを聞いて、彼も低い声でハハハと笑った。

――歯向かってくる者については、知らぬからな？

あるいは不吉な響きが気に入ったのかもしれない……。

それからナイトハンドはふと感情を見せると、不思議そうに涼に向かって〝お前、本当に何者だ？〟とたずねた。

「本当にお前はその……アルディーンなのか？　例の新聞に書いてあったように？」

それ以外には説明のつかない、この少年の不思議な力をナイトハンドは数々見てきた。しかし彼もまた、根がネオ・ナリタの住民ではなかったのだ。

「ええ、あの記事は、１００パーセント本当です……」

……涼は笑いながら、彼にこれまでの話をうちあけた。ナイトハンドが目をみはる。そんなものを身体に入れて、シレッとしていられる神経が理解できない！

――なんという奴だ、まったく……。

「……おそろしく妙な奴だな、お前は」

「近ごろでは、僕もそう思いはじめていますよ」

涼はクックッと笑った。ナイトハンドはつくづくとその顔を盗み見て、

――そうだ、この目だ……こいつはこのくもりのない目が恐ろしいな。人の心を見透かすような……。

ナイトハンドは視線をそらした。

「アカデミアの人間だと言ったな……帰りたくはないのか？」

おだやかに涼が首をふると、彼はひどく奇妙な声音で、
「そうか」
とだけつぶやいた。涼にはそれがやけに気になり、しばらく考えてからようやく、
――ああ、もしかして、彼にはどこか帰りたいところがあるのだろうか？
とだけ考えついた。今度は涼が相手の顔を見つめる番だ。
ナイトハンドは暗い顔をそむけるようにした……。

次の満月。
19時をすぎると同時に、アルディーンとナイトハンドが市の病院におそいかかった。
計画は綿密にねられ、またたくまに地下の組織が狩りたてられていった……アルディーンの思惑どおり、病院の地下は七賢人の巣となっていた。
まず、たいがいのセンサーにはひっかからない特技を持つ闇の皇子が、入り口から奥へ忍びこみ、催涙弾や爆音で信徒たちを外へと追いたてた……その先にはナイトハンドが待っている。
無関係な職員や入院患者が人質にとられることを、アルディーンはいちばん恐れていたが、建物のあちこちにナイトハンドが手勢を出して守らせてくれた。

ただ一人、運よくナイトハンドの手をすりぬけられた男がいた。
頬に傷のあるその顔に、涼は見おぼえがあった。エルクハート旧工場で、自分を撃った男だ。
男が病院の薬品庫に飛びこんで、手あたりしだいに火の手をあげようとしたとき、後ろから声がかかった。
「待てッ！」
ふりむいた彼は、闇の皇子の手にあるワイヤーガンを見て、悲鳴をあげた。
手にぶっそうな火炎放射器がにぎられている……涼は正確なねらいでワイヤーを発射し、すくみあがった男の手からそれをからめとって取りあげた。
足もとで気絶している彼を見おろして、アルディーンが小首をかしげている。
――まさか彼、僕がこれで人を撃つとでも思ったのかなァ？
……真吾警部が駆けつけたときには、ほとんどかたがついていた。
「アルディーン、生きていたのか!!」
通報を聞いて飛んできた彼は、てっきり七賢人による襲撃だと思っていたのだが、そうではなかった。
〝そうか、やっぱり無事だったのか！〟
一瞬だけ、ホッとしたような声をあげた彼は、すぐにあたりの惨状を見て顔色を変え、

「この妖怪小僧！　これはいったいなんのマネだ!?」
「みんな生きてますよ、ご心配なく……」
アルディーンは数人の襟もとからペンダントの鎖を引きだして見せた。例の炎のような形。七賢人の信徒のしるしだ。
「ほら、みんなデュークの部下なんです」
〝だがなぜ、こんなに、こんなところに？〟
その言葉にアルディーンはどこか困ったような表情で立ち上がり、真吾警部を地獄へと案内した。
病院の地下はアルディーンが予想していたよりもはるかに広い空間になっていて、儀式のためのちいさな祭壇まであった。
巨大な冷蔵設備。解剖室、麻薬庫……独房のような部屋の前で、いきなり立ちどまってふりむいた真吾警部の顔は完全にひきつっていた。
「それじゃ、いままで俺たちはこれに気がつかなかったというのか!?」
土気色でゆがんだくちびるを見て、闇の皇子が目をそらす。
負傷してこの病院に収容された人間の中で、助かるはずの半数近くがひそかに息の根をとめられているはずだった。
おそらく何人かはここに運びこまれ、知っていることをすべてしゃべらされたうえで殺さ

れたのだろう。

「いったい、どうして誰もッ……それじゃおれは、いままで部下たちをここに送りこんでいたのかよッ⁉」

壁にこぶしをたたきつけて、真吾警部が叫んでいる。

涼には、ただ見ていることしかできない……。

視線をそらしてふるえている彼の肩に、いつのまに来たのかナイトハンドの手がおかれた。

「……行こう、アルディーン。あの男は大丈夫だ……これしきのことでダメになる奴ではないから安心しろ」

何度もふりかえりたがるアルディーンを、上手に外に連れだすと、黒い車のドアを開けてこちらを向いた。

今日はあの運転手の老人はいなくて、自分で運転するつもりらしい。

「乗っていけ。またあちこち、ケガをしたようではないか？」

自分も数か所に傷を作っているナイトハンドが、仮面の下で歯を見せて言った。

「よければ屋敷まで来るがいい。ウォルフがいる」

彼は運転手でなく執事だという。

「ウォルフなら、ケガの手当てもなれているぞ。どこの医者よりうまい……それに」

ナイトハンドが皮肉な笑顔を見せた。
「なんといっても、今夜はもう病院は使いものになるまい？」
涼はちょっとためらってから誘いにのった。
――このていどの傷なら、すぐになおるけれど……。
あいかわらず謎につつまれたこの男の屋敷に入れるいい機会だ。

……車がナサニエル・ゴードンの屋敷につくと、大きさのわりに人の気配がなかった。
ホールや廊下にまで、絵画やぜいたくな調度品が飾られているが、ナイトハンド自身はそれらに少しも興味を持っていないように思われた。
――本当に信用する数少ない人間しか、そばによせつけないのだろうな。
そう考えると涼はさらに、あのウォルフという執事について思いだそうとつとめた。
かなりの年寄りで、髪も眉も白く、運転手の白い手袋をはめていたっけ……。
ナイトハンドが確実に彼には正体を明かしている……時には運転手として冒険につきあわせてもいるようだ。
――この彼が、そこまで信頼できている相手なのか……。
その執事はまず、ナイトハンドの横にふたたびアルディーンがいるのを見て、すこし驚い

たようすだった。

先に立って居間に入ったナイトハンドは、待っていた執事の老人に軽くうなずいてみせた。

「いま帰った、ウォルフ。すまないが、私とこいつの傷を頼む」

負傷しているナイトハンドを見て、ウォルフ老人はひどく青ざめた。

「は、はい、ただいま……」

よくそろった医療器具を取りにいくため、速足で歩きだして二、三歩……なにかにつまずいたように、一瞬グラリとよろめいた。

ナイトハンドがすばやく駆けよって、それをささえた。

「ウォルフ、あなたは心臓がよくないのだから……」

眉をよせて、そうささやくのが涼の耳にも入ってくる。

不思議な関係だと強く思った。

第五章　七賢人都市——最後の決戦

……しかし結局、病院は七賢人の本部ではなかった。
アルディーンとナイトハンドが倒した人数の中に、デュークや彼の側近の姿はなく、警察が地下の空間を徹底的に捜索したが、デュークにつながるものは発見されなかった。
そこはあきらかに七賢人の大きなアジトであり、胸の悪くなるような貯蔵品が山とあったが、デューク本人がそこにいたという形跡はない。
真吾警部が凄まじい執念で、地下を総ざらえにするまで調べたが、抜け道や隠し部屋などは見つけられなかった。デュークにつながるものは何もなかった。
病院は七賢人の本部ではなかったのだ。

ちょうどそのころ、旧市街のアパートの一部屋では、ドク・佐矢霧が資料に埋もれつつも、目を輝かせていた。

「……ウン、そうだ、きっとそうなんだ！」

〝デュークの素姓について知らせたいことがある〟

ドクからの連絡で、涼があわてて彼のアパートをたずねると、ドクもまたわくわくして待っていた。

「アルディーン、確実ではないが、デュークについてわかったかもしれないぞッ」

「ドク、本当ですか！」

佐矢霧もそれまで手に入る資料をあたって、彼なりに七賢人について調べてくれていたらしい。彼の調査の方向は、アルディーンとは違っていた。

「僕はあの7年前の虐殺から調べてみたんだ……いわゆる〝七賢人の虐殺〟事件だよ」

7年前、ネオ・ナリタで起きた、おそらく史上最悪の犯罪である。

デュークという名を、ナリタじゅうの人々が知るようになったのは、まさにこの事件からであった。

「知ってのとおりデュークは、そのときネオ・ナリタで彼の邪魔になりそうな者たちを、一夜で、家族ごと抹殺してしまったんだ。その中には当時のナリタ署の長官なんかもふくまれていた。あと資産家や高い地位にいた人物で、教団に逆らいそうな人たちとか……思いきった恐ろしいことをしたものだよ」

この事件の後、七賢人は急激にその勢力をのばした……それはそうだろう、逆らう力のあ

る者はすでに根こそぎ殺されており、生き残った者もふるえあがっていたのだ。
「デュークがネオ・ナリタで最初にしたことというのが、この虐殺事件だった」
だが佐矢霧はここで、少々の不思議を見つけたという。
「……エルクハートのことなんだがね」
――エルクハート？
涼の目がキラリと光った。ドク・佐矢霧はうなずいて、
「七賢人の虐殺の夜、たしかに旧市街のエルクハート邸も襲われていた。主のエルクハート老人以下、使用人もみな殺しにされて屋敷ごと燃えあがったはずなのだが、その後ちょっと妙なことがあってね。調べるとそのあとでエルクハートの財産が動いているのだ」
動かせるかぎりの財産の、80パーセント以上が、そのあとすぐに何者かの手によってこまぎれにされ、どこかに消しさられてしまった。
だが、その話なら涼もすでに知っている。
「あれは……会社の人なんかが勝手にしてしまったわけじゃないのですか？」
ドク・佐矢霧は首をふった。
「たぶん違う。それにしてはあまりにも手際がよすぎるんだ。
君はもちろん知らないだろうが、エルクハート老人は途方もなく利己的な人物でね。自分の財産については二重、三重のガードをしていた。ほとんどを海外の銀行に隠してしまって

いて、誰にも教えてはいなかったはずだ。
ところが彼の死とほぼ同時に、それらがみな魔術のように消されている。とても上手に行方をくらませてあるので、どうなったのか見当もつかないくらいなんだ……」
そして、強い確信を持って、
「やはり違うな！　あの強欲な老人のまわりの、いったい誰が隠し口座や、保管庫の場所をすべて知っていたというのか？　それらの引き渡しのパスワードまで……エルクハート翁が人に教えるものか！」
会社の人間などの仕業とすれば、彼らはまず資産の隠し場所から調べなければならなかっただろうし、それにはもっと時間がかかるはずだ。
「それじゃあ……誰がいったい」
巨額の財産はどこにいったというのか？　涼が眉をよせて考えこんでいる。
「そこで僕はヘンなことを考えてしまったんだよ、アルディーン……」
佐矢霧がグッと声をひそめて、
「彼は本当に、あの夜死んだのだろうか？　あの事件について、ナリタ署の記録はあまりたしかじゃないんだ。なにしろ、長官の一家まで殺されてしまったんだからね。
それに現場は完全に焼け落ちていて、どの死骸もほとんど見わけがつかなかった。特定できないが、どれかがエルクハートの死体だろうと言うことになったが……」

エルクハートがもし生きていれば、財産や貸し金庫の説明はごく簡単にできる。
「それで僕の推理はこうだ。エルクハートはデュークの襲撃の夜には死ななかった！　それどころか、彼がデュークに手を貸したのかもしれないぞ。それでデュークがはじめにどこからあれほどの武器を調達したかがわかるしな。
〝七賢人の虐殺〟はデュークとエルクハートの共同作戦で、デュークは誰か……あの老人の意を受けた者ではないだろうか？」
「でも、ドク！　エルクハード老人は何のためにそんなことをしたというのですか？」
「ウーン……気が狂っていたんじゃあるまいか？　病気だったというし……」
ドク・佐矢霧がはじめて自信なさそうに頭をかいた。そこを言われると、たちまち困るのだ。
「さもなければ、あの夜襲撃されたほかの家族全部に、何か個人的な憎悪があったとか？」
どちらもちょっと信じられない……涼の感想に、佐矢霧はがっくり肩を落とした。
「やっぱりね、僕もやや無理があるとは思ったんだが……だが、エルクハートについての疑惑は本当なんだよ！」
……調べるのが生きがいの彼である。
その彼の目の前で、アルディーンがなぜか大きくうなずいた。その目が奇妙な輝きを見せはじめていた。

「ええ、ドク。その話はきっとたしかだと思いますよ！　ただ、それをデュークにつなげるから無理があるんです。その謎は、たぶん七賢人とは直接の関係はない……それでも僕はわかったような気がします」

「何がかね⁉」

「エルクハートの財産がどうなり、現在、誰の手に渡っているのか……」

それから突然のようにたずねた。

「エルクハート老人という人は、そんなに身勝手なむごい人物だったのですか？」

「ああ、そうだったね。わがままで残忍な富豪だったよ」

佐矢霧がとまどいながらうなずく。

「そうですか……」

パズルの最後の一枚を、ドク、あなたが見つけてくれたようだ。

アルディーンの瞳に、危険な光があった。

――そうだとすれば、僕には許せないぞ……。

その後すぐに闇の皇子は、ナサニエル・ゴードンの屋敷に姿をあらわしていた。

白髪の執事のウォルフがでてきて、主人はいまはいないといった。

「まことに申し訳ありませんが、旦那さまはただいまおでかけでいらっしゃいます」
彼はすまなそうに言って、涼に頭をさげた。
――ナイトハンドはいないのか……。
涼はそれでもかまわなかった。そのほうがむしろいいかもしれない。
「実は僕、おたずねしたいことがあるのです」
どこかあらたまったようすで、執事の顔をジッと見つめた。
その瞳の奥に、今日は奇妙なさぐるような光がある。
「わたくしに、ですか？　ええ、なんなりと」
彼はおだやかな表情のままで、不思議そうに首をかしげた。
こうして向かいあって見ると、彼にはどこかしらするどい知性のひらめきがあり、ナイトハンドへの忠実さがあった。〝なんなりと〟と言ったが、彼の不利になるようなことはたとえ殺されても口にしないだろう。
そして、彼には何か重い悩みがあるように見えていた……。
「うかがいたいのは、ナイトハンドの素姓です。彼はそもそもどういう人間なのですか？」
「それは……お答えいたしかねます」
涼は肩をすくめて、わざと無邪気に、
「それじゃ、あなたとナイトハンドの関係はどうです？　彼はなぜ、あんなに七賢人の教団

を憎むのですか？　そしてなぜあなたは彼に力を貸したのです、ウォルフ……いいえ、ミスター・ウォルフガング・エルクハート！」

一瞬だけ、顔が驚きでゆがんだあと、老人は静かに口をひらいた。

「よくわかったものだな、坊や……いったいなぜ、どこまで知っているのだ？」

涼は正直に首をかしげて答えた。

「たいしたことではありません。ただ、ナイトハンドがエルクハート旧工場のパスワードを知っていたこと……それからエルクハートの財産が、事件後、何者かによって動かされていることと、焼け跡の死体がはっきりしていなかったこと……だから、あなたがただのウォルフではなく、ウォルフガング・エルクハート氏であること」

〝あとは、たいしたことは知りません〟

ナイトハンドからたどって調べても、エルクハートとの関係は何も出てこなかったが、執事の老人に的を向ければ、すべては一つにまとまる。

老人は静かな声で笑った。

「それだって、たいしたものだ……」

「それより質問に答えてください！　あなたとナイトハンドのあいだには、どんなつながりがあると言うのです!?」

涼がわずかにいらだった調子で、

「僕の考えを先に言いましょうか？　7年前、デュークが襲ってきた夜に、あなたは奇跡的に九死に一生をえていた。屋敷が焼け、死体の確認があやふやだったから、誰もあなたが生きていることを知らなかった。それをいいことにあなたは香港に渡り、七賢人への復讐を誓った……ここまではよろしいですか？」

まあ、だいたいのところはね……老人は軽くうなずいてみせた。

「虐殺を生きのびた者がいるとわかれば、七賢人がふたたび狙ってくるのは確実だったから、あなたはすべてを隠して秘密裡に、ご自分の財産を可能なかぎり香港に移した……移動の痕跡もじつに上手にくらました」

「そういうことにかけて、私は慣れていたのだよ」

どこか皮肉なひとりごとのようにウォルフガング・エルクハートがつぶやいた。

「そうらしいですね……そして、準備がととのうと、あなたはたぶん人を捜したのではありませんか？　失礼だが、あなたは老人だ。自分の意のままに復讐を実行してくれる人間が必要だと思い、どこからかぴったりの若者を捜してきた……それがナイトハンドだ！」

涼の目に怒りに似た危険な光がやどっていた。

「彼がなぜ、七賢人を憎むのかよくわからないが、あなたはそれを利用して彼に武器をあたえ、富豪のナサニエル・ゴードンにしたててネオ・ナリタに送りこんだ」

青年富豪の謎めいた莫大な資産は、旧エルクハートの遺産だったわけだ。

息をのむほどの財力の本当の主は、執事の老人だったとは……。

涼の言葉でその目がしだいに、ぎらつくような光をおびはじめていた。

「ミスター・エルクハート、あなたはひどい人だ！　どういう手を使っているのか知らないが、あなたの意志が彼をしばって人殺しをさせているのですね？　それがナイトハンドのそもそもの望みだったのですか⁉」

――僕は信じない、自分から殺人鬼になりたがる人間がいるわけがない！

あの黒衣の青年に涼がこれほどにもひかれる理由は、血の匂いばかりではなく、その苦しみの気配を感じていたからだ。

会うたびに、激しい苦痛が感じられた。血に染まった手を誰よりも嫌がっているのに、なぜか自分ではそれに気づかない。なぜ⁉

おそらく、この老人がそうさせているのだと思った。

怒りのあまり、窓ガラスのいく枚かにひびが入る。

「……なぜです？　彼はなぜ殺しつづけるのです？　あなたのためですか？　卑劣な……もしそうなら、とても許せない！　彼があなたのあやつり人形だとしたら、僕はあなたを絶対に許せない！」

突然、涼の目の前で老人が肩を落として顔をおおった。そして、

「そうだッ、私があれを殺人鬼にしてしまった！」

ひとこと、悲鳴のように叫ぶと、苦しげに左胸を押さえて倒れかかった。
「大丈夫ですか!?」
涼があわてて駆けよると、老人はつらそうな動作でそばの椅子に腰かけ、息をととのえた。
「……すまなかったね、私はあまり心臓が丈夫でないのだ」
涼はつい、いたわるように彼の手をとってしまった。
その澄んだ瞳をつくづくとのぞきこんでから、老人は長くタメ息をついた。
「美しい目だ。あれの昔の目のようだな」
「あなたは彼を昔から知っていたのですか!?」
涼はたぶん、ナイトハンドは香港で老人に見いだされたのだと思っていた。
だが、ウォルフ老人は首をふった。
「違う……私はあれの両親からよく知っていたよ。ナサニエルの父親と母親……彼らは私にとっては天使だった」
……それから、低い声で悲惨な物語がはじまった。
「7年前、私に心臓の持病があって死にかけていたのを知っているだろう」
「あ……はい」
彼はどこか遠くを見るような目で、

「私はそれまで強欲で情け知らずの男だった。他人を踏みつけて財産を築き、汚い手を使って人を利用し、用がなくなれば残酷な手段で追いはらった……年をとってからは、ますますそういう人間になっていった。

病で倒れたあとで、それがどんな報いを呼ぶかはじめてわかったものだ。私の周囲の者は、みな私が死ぬことを望んでいた」

エルクハート老人の心臓は、手術をすれば助かる可能性がまだ5割あった。

だが、人々が陰で手を握りあい、老人の生命をつぶそうとした。

「むずかしい手術だったから、やれる医師の数もかぎられていた。奴らは医者たちを買収して、手術を断らせていった……私が脅しても、金をどんなに積んでも役には立たなかった。フフ、思えば簡単なことだ、奴らはただこう言いさえすればよかったのだからな。〝あの老人はどうせすぐ死ぬんだ、そうなればあとは我々のものだ〟」

失敗の確率も5割あるのだ。エルクハート老人の報酬がどれほどの額でも、手術をしてもし彼が死んだら、そのときは目もあてられない。

「使いきれないほどの金も、こうなってはなんの価値もない……私はくやしかった、死にたくなかった。どうにかして生きて、私を殺そうとした奴らに復讐してやりたかった。

あきもせずに、あがきつづけているあいだに、たった一人、執刀を引きうける医師があらわれたのだ。それが……ナサニエルの父だった」

その若い医師はエルクハート老人に向かって率直に、長いこと病状を放置していたから、生きのびる確率はすでに5割よりさがっていること、それでも手術を受ける気があるかとたずねた。老人の答えは一つだった。

さらに彼は、手術後、患者が回復するまでのあいだ、妻と子とともにエルクハート邸にいることを願い出た。それは当然の願いだ、外にいれば狙われてしまうだろう。

「私は承知した……妻子を人質に取られて、やっと見つけた医師に裏切られるのはご免だと思ったからだな」

愛らしいその妻はナースの資格を持っていたので、看護や手助けができると彼は言った。子供は12歳でナサニエルといい、素直で優しい性格だった。

そして、手術がおこなわれた。

「危険な手術だった。そのあとも私は老人だから回復が遅く、いくども死にかかった。そのたびに手をつくして私をはげまし、瀬戸際から救ってくれたものだ。しだいに私にもわかってきた……。

最初、私は彼らが金に目がくらんで、報酬のために大きい賭けをしてみる気になったのだと思っていた。だが、そうではなかったのだ。彼らはただ、私を死にかけているあわれな老人だと知っていて、それで助けてくれようとしたのだ……」

彼は、ふと息をついた。

「生死の淵からもどってくると、人は変わるという話だ。だが、私ほど大きく変わった人間はおそらくいないだろう」

心を洗われるような出来事が何度もあった。

「それでついに私にもよくわかった、あの二人は天使だったよ。はじめて、他人を愛することを教えられた。彼らと幼かったナサニエル……まだ生きられるとはっきりしたとき、私は本当にうれしかった。これからは違う人間になれると思ったからだ。

回復してもずっと身近にいてくれるように、彼らに頼むつもりだった。彼らのそばでならもっとよい人生が送られる……そう言えば、きっと承知してくれたと思う。さいわい小さなナサニエルは、私になついてくれていた。だから、幸せになれるはずだったのだ……あの夜までは！」

血を吐くように、老人は言った。

「……7年前のあの夜、私は部屋にいてナサニエルと二人で遊んでいた。その翌週、あの子の13の誕生日がくるはずだった。私は、その席で彼の父と母のどちらか……あるいは両方を養子に迎えたいと思っていた。だからその前に幼いナサニエルの了解を得ておきたかったのだよ」

七賢人の手勢が屋敷になだれこんだとき、警報システムはいっさい作動しなかったという。

「私はネオ・ナリタで誰よりも敵の多い男だったから、屋敷の警備にはたいへんな費用をかけていた。だが、すべての装置が内側から電源を切られていた……機械をあつかうガードの中に、デュークに寝返ったか、洗脳された者が何人もいたのだろう」

ほかの犠牲者たちの屋敷もそうだったに違いない、と言って、

「だが私の部屋には鏡の裏側に緊急の避難場所があって、私は物音を聞くと、すぐにナサニエルをつれてそこに飛びこんだ」

モニターは役にたたなかったが、屋敷のあちこちから爆音や破壊の物音がした。

ナサニエルの両親はどうしただろうと、彼が案じているそのときに、

「デュークの手下たちが、二人を引きずってこの部屋につれてきた」

彼らはその夫婦に、エルクハート老人の居場所を言えとせまった。

「あの二人には前に、鏡の裏のしかけを教えていた。だから当然、彼らは私がそこにいるだろうと知っていたが、ひとこともしゃべらなかった」

相手が言うことをきかないので、手下たちはまずナサニエルの母を殺した。

「母親の胸に銃が向けられるのを見て、あの子は必死に飛びだしていこうとしたが、私が力ずくで押さえつけた。出ていけば二人とも殺される……私の生命など少しも惜しくはなかった！　だが、出ればナサニエルも殺されるとわかっていたのだ！」

父と母もおそらく、そのことを考えていたに違いない。

さんざんなぐられたあげくに、いよいよ自分の喉にナイフがかかった一瞬……父親は鏡に視線を向けて、かすかに笑って死んでいった。

彼らが殺された瞬間に、エルクハート老人は屋敷に仕掛けられていた自爆のスイッチを押していた。

「以前の私が、何かのときのために作っておいたものだった……あの屋敷は私が燃やした、中にいた七賢人もろともに。それから私は子供をかかえ、抜け道から外へ脱出した」

香港に逃れるまでは夢中だったという。

そして、香港から彼は手をまわし、事件の混乱の中で可能なかぎりの資産を手元に奪回した。

だが……そう言って、ふと口を閉ざした老人の顔は、疲れはてたように暗かった。

「だが、両親を目の前で惨殺されたナサニエルはすっかり正気を失っていた。眠りもせず、食べもせず……薬で眠らされているとき以外は、たえまなく悲鳴をあげつづけるのだ」

医者たちも役に立たなかった。

「どいつもこいつも、どうすることもできなんだ！　あの子はみるみるうちに衰弱していき、あとはもう死を待つばかりと言われたとき……」

彼はふるえる手で呪わしげに頭をかかえこんだ。

「……死にかけている子供に向かって、私ができることは一つしかなかった。父と母が殺さ

れる幻影を見ている子供の耳に、私は昼も夜もささやきつづけたのだ。〝かたきをとれ！〟と……」

〝かたきをとれ!!〟〝生きて、奴らをみな殺しにしてやれ！〟

「私はただ、あの子を死なせたくなかったのだ！　そのためには手当たりしだい、なんでもやっただろう。現実に、私が思いついた言葉はたった一つだった」

〝復讐するんだ、ナサニエル！〟

〝いつかあの街にもどって奴らを殺してやろう！　氷のように冷たく、悪魔よりも強くなって!!〟

……その言葉は子供の魂にとどいたようだった。

「ナサニエルは死ななかった……食事をとるようになり、無理にも眠ろうとするようになった。ようやく起きられるほど回復すると、あの子はすぐに自分自身の訓練をやりはじめた」

死の入り口から戻ってきたその顔には、かつての子供らしい面影はどこにもなかった。瞳の底の冷たい炎と、あからさまな復讐の決意だけが残っていた。

「私は求められるままに、あの子に武術の教師をつけた」

クンフーから、コンバットスタイルまで、香港にはそんな手だれの者が山といた。

「教師ははじめから超一流で、訓練は想像を絶するほど厳しかった。私自身、わざとそうさせたのだ。すこしでも、あれに嫌がる気持ちが見えたら、すぐにもやめさせるつもりだった

……」

だが彼は、さらに激しい練習を望むばかりだった。

いまや遅しと待つエルクハート老人の心とはうらはらに、鉄をもつらぬく意志の力で、ナサニエル・ゴードンはどこまでも指導についていった。

次々と教師をかえ、習得するかそれとも死か……といったような狂気の沙汰がつづき、

「我々がやとった者の中には、本物の殺しのプロまでいた。だがそのうちの誰一人として、もはやあれにはかなうまい……爆薬や破壊工作の知識も」

そう語る老人の顔は、はげしい自責の念にみちていた。

こうして、あらゆる殺人技術の粋をおぼえたナイトハンドが誕生した。

「何度も私は思ったものだ、なぜ私が死ななかった⁉　こうなるくらいなら、あのとき……いや、その前に私が死んでいればよかったのだ！」

殺される瞬間の父親の目をおぼえている……〝子供をたのむ〟と言っていたのだ。

「その子供に私は何をしたのだろう？　私が死にかけているナサニエルに毒を使った……天使の子供をナイトハンドにしてしまった！」

こんなつもりではなかったのだ。

いよいよネオ・ナリタにもどろうと、ナサニエルが言いだしたとき——それは彼がもっとも恐れていた言葉であったが——エルクハート老人には、どうすることもできなかった。

金で手にしうるかぎりの武器と重火器を集め、確実な機関から私的な傭兵を雇いいれた。
「せめてあの子の危険を減らすためだった」
……涼はすべての告白を青ざめた顔で聞いていた。
「なんてことだ、そして彼はネオ・ナリタに戻ってきたのですね？　正体を隠し、富豪のゴードン氏として……」
そうだ……力なくうなずく老人の声に、なぜかあらたな恐怖がくわわっていた。
彼はいま、心から恐れていたのだ。
「アルディーン……あの子はこの街に来てから変わってしまった！　どうなっているのか、私にもわからない……だがあれがどんどん遠くへいってしまうような気がするのだ！」
一人でも多く殺そうとする……そのためには自分の生命ですら、かまわないように。
「以前から、夜よく悪夢にうなされていることは知っていた。だが近ごろでは、毎晩のようにあれの部屋から悲鳴が聞こえるのだ……私には、もうけっして近よらせてはくれない」
しばらく前、ウォルフ老人はナイトハンドが老人に黙って、香港から何かをとりよせたことを知った。自分に隠すように……不安に思った彼は、こっそりその品を捜しあてて調べた。
「禁止されている劇薬だった。使えば人間の神経を刺激し、戦闘能力がけたはずれにあがる。そして身体にはおそろしい害がある……真に無慈悲な将軍なら、捨てごまの兵士に使

うかもしれない」

〝まさか彼はそれを自分に!?〟

涼がゾッとして叫ぶと、老人は、

「まだ使ってはいない。私がすぐに隠してしまった……私に知られたのをさとって、ナサニエルもいまはとどまっている。だが、このままではいつまたあれを手に入れて、使おうとするかわからないのだ！」

老人がいきなりすがるようにアルディーンの肩をつかんだ。

「アルディーン、あれを救ってくれ！　君はナサニエルが助けた、ただ一人の相手なんだ。あれは君になら心を開くかもしれない。頼む！　なんとかして止めないと、あの子は今度こそ……」

しばらく、老人のすすり泣く声だけがしていた。

闇の皇子は無言でその手をとりながら、遠いまなざしで宙を見ていた。

――ナイトハンド、なんということだろう、君は……。

子供時代から心をすて、人間らしい希望のすべてを投げすてて、復讐のために悪魔になったのだ。

――いま君は強い、望みどおり多くの七賢人の使徒を殺している。

だが、彼は殺人機械になりきれたのだろうか？

涼は首をふって、タメ息をついた……あの痛み、あの苦しみが、いまにも彼を内側から引き裂こうとしている。薬を使おうとしたのも、そのためかもしれない。

助けを求める声が聞こえるからこそ、追わずにはいられなかったのだから……。

ふと涼は老人にたずねた。

「……ナイトハンドはいま、どこにいるのですか？」

老人は顔をあげ、沙羅・アッシャーという少女の家に招かれていると答えた。

はじめて彼の表情に、ほんのかすかな希望がさしたように見えた。

彼女はこれまで何度も自分からたずねてきたし、車椅子の昼の姿を見ても目をそらさなかった。

そして彼女は輝くような美少女だった。

「とても美しい娘だ。ナサニエルもあの少女には、好意を持っているように思える」

あの少女の面影が復讐を忘れさせるほどになるといい……老人はそんなはかない希望を抱いているらしい。しかし涼はふと不安を感じた。

「……沙羅・アッシャーですか？」

オペラ・ホールの夜会で見た、白いドレスの美少女のことだろうと思った。

盗みの嫌疑をかけられたメイドに、あんなにも冷たく、警察を呼んだ少女。

涼は彼女が自分でペンダントを盗み、小間使いに罪をなすりつけたとまでは知らなかっ

た。だが、それでも疑惑が胸をかすめていた。

――ナイトハンドはたしかに誰か愛する人が必要なんだ！　だけど、それが沙羅・アッシャーというのは……。

あのきれいだけど冷酷な娘。アルディーンが不安げに身じろぎをした……。

……その少し前のある夜のこと。七賢人教団のデュークのもとに、新しい信徒たちが願いを述べにきていた。

一人の男は競争相手の呪殺を願った。

「いいだろう、私の目を見るがいい……」

デュークはその男の瞳の奥に何をしかけたのだろうか？

「これでいい。明日になったらその相手の家をたずねて、向かいあって話でもするのだ。お前が帰ったあとで、その男はかならず自殺する」

次に連れられてきた娘はまだひどく若かった。わずかにふるえる声で名前を言った。

「沙羅・アッシャーでございます」

……闇の皇子とナイトハンドが、このところ教団の組織に打撃をあたえていた。

病院の地下のアジトが潰されたのは、もっとも大きな痛手だった。

だが……一方でこうしてデュークのもとに、新しい信徒がいまもやってくる。

――愚かな奴らだ。

デュークは信徒たちが何人殺されようがかまわなかった。二人の挑戦者は結局、自分には指一本ふれられないとわかっていたからだ。

あわてることはない、好きなだけやらせてやろう。いずれ彼らも隙を見せる、そのときは……デュークは冷酷に微笑んだ。

アルディーンとナイトハンド、できれば苦痛と絶望の果てに殺してやりたいものだ。

何もかも、彼には退屈しのぎにすぎなかった……。

さて、沙羅・アッシャーの若さを見て、デュークでさえやや目をみはり、問いかけるように側近をふりかえった。

「この娘の望みは、ある男の心だそうです」

男？　デュークはすべてを見通すような視線で、少女の瞳をのぞいた。

――だがこれは誰かを愛する心ではないぞ。

実際、沙羅・アッシャーは誰も愛してなどいなかった。彼女はナサニエル・ゴードンの財産だけが目当てである。いまよりもっと思いのままの贅沢がしたかった。

自分のように美しい娘はめったにいないことを、沙羅はよく知っていた。

ゴードンは古風でつつましやかな娘が理想のタイプらしい。だから、彼の前では清楚に優

しくふるまってみせた。

だが、まだ何かが足りなかった。たしかに自分に魅かれてはいる……だが、どうしてもそれ以上近づかせることができなかった。手管をつくしても、愛していると言わせられない。いらだった沙羅はついに決心した……。

「なるほどそういう理由か……そしてお前は私に忠誠を誓うのだな？」

「はい、望みさえかなえてくだされば」

「私のために人を殺すか？　命令なら、たとえ親兄弟でも？」

少女ははっきりとそう誓った。

「お前自身の生命もさしだすな？　たとえば儀式のとき……」

七賢人の毎月の集会では、平信徒の中からも生け贄が選ばれると聞いていた。

それはくじによって一人が決められるとか……沙羅はくちびるを噛んでうなずいた。

――私ならすぐに幹部になってみせるわ！

そうすれば、生け贄の心配などなくなる。ナサニエル・ゴードンの財力が手にはいれば、不可能ではないはずだ。

〝どうしてもあの男の心がほしいのです！〟

冷たく光る沙羅の瞳を見つめて、デュークが楽しげにうなずいた。

――この少女のワナに落ちれば、ゴードンという男の一生は、さぞみじめなものになるだ

ろうな。

「いいだろう、美しい娘。私の目を見るがいい……お前に力を貸してやろう」

そしていま、望みどおりに彼女はナサニエル・ゴードンの腕のなかにいた。

「沙羅……愛しています、愛している」

夢うつつのような気持ちで、彼はつぶやいていた。

この少女の美しさと清純さには、ずっと強く魅かれていた。それでも彼は決して彼女の手を、自分から取ろうとはしなかった。

ナイトハンドの厳しい自制心。復讐を忘れるときはなかったからだ。

たぶん沙羅・アッシャーの見せかけの優しさでは、本当に心をうたれるはずもなかったのだろう。この日までは……しかし、今日は何かが違っていた。

沙羅・アッシャーの目を見た瞬間から、デュークの呪法が効力を発揮しはじめた。

はじめてのように彼女の美しさがまぶしく、優しい言葉が胸に染みいってくる。

心があやしくときめくのだ。

彼にはもう、どうすることもできなかった。

「沙羅、心から愛しています！　でも私はこんな身体で、あなたに愛される資格などないん

だ……」

ためらいながら、車椅子に少女を引きよせる。沙羅はすかさずその頬にくちびるをよせ、

「いいえ、ナサニエル！　そんなのなんでもありません、私もあなたを愛しています！」

「沙羅……私の愛する人だ！」

ふるえる手で、彼は恋人の肩を抱きしめていた。沙羅の瞳が彼を見ている、まるで何かにあやつられるようにくちびるがあった。

抱きあったまま、熱にうかされたような声が彼女の耳にとどいていた……。

「愛している、誰よりも優しい美しい沙羅！　もう離さない、あなたにはもう何も隠しておけない！　聞いてください、沙羅。私は……」

恋人を腕に抱いたまま、彼はふるえる声でおのれの正体をうちあけはじめた。

「……信じてください。私は本当はあなたを腕に抱いて、走ることもできるんだ」

そのときたぶんナイトハンドは、破滅の扉を我が手で開いたのだ……。

さて、魔の都市ネオ・ナリタは、そのころどんな状況だったのだろうか？

アルディーンとナイトハンドの力によって、七賢人教団の組織は、かなり乱れてきていた。

教団の下っぱたちは、もう以前のように好き放題な悪事や略奪は、おこなえなくなっていたし、ナリタ署や市庁にいたデュークへの内通者たちも、ほとんど一掃された。
それまで旧市街を支配したつもりの使徒たちが、いまでは暗闇を恐れていた。
そこでは魔界の闇の皇子が笑いながら手まねきし、憎しみに燃える復讐鬼が待っている……。
けれど、一方でアルディーンたちも、次の手がかりをさがしてさまよっていた。
ナイトハンドは七賢人のアジトをかたっぱしから叩きつぶしていき、アルディーンもまた犠牲の血が呼ぶ方向をつきとめて、隠された支部を見つけていった。
しかしただ一か所、デュークのいる本部だけがつきとめられずにいた。
――秘密って、結局は人がもらすものなんだな……。
涼は近ごろシミジミとそう考えていた。
デュークにかぎって、生きている者の口から秘密がもれる心配はない。
ひとたび彼に会い、彼の顔を見た信徒ならば、かならずデュークによる暗示がかけられていた。
たとえ、どんなことがあっても彼についてだけは話してはならない。逃れられないときには、死を……その威力は絶大である。
ナリタ署の尋問は注意ぶかく行われていたが、担当の刑事がうっかり口をすべらせてたず

ねようものなら、容疑者は恐怖の表情とともに、自分から生命を絶ってしまう。
これでは涼も手をつけられない。
……もちろん、戦っていたのは彼らだけではなかった。
警察も市のチームも懸命に七賢人を追いあげようとかかっていた。
港と空港は、厳重に封鎖され、組織が武器の補充をするのをとりあえずはおさえている。
〝旧市街はアルディーンにまかせて、七賢人の補給を断て！〟
真吾警部のむちゃくちゃな英断で、市中へまわす人数の半分までさいて空港組にくわえているほどだ。
ネオ・ナリタの新聞社では、『ナリタ日報』が勇敢な動きを開始していた。
彼らは七賢人の資料すべてを紙上に公開し、デュークに関する情報を、なんであれ求めると宣言した。
『ナリタ日報』は真夜子がいる新聞社である。涼はさすがにあせってしまった。
――もしも社が襲われて、真夜子に何かあったらどうしよう!?
言っても聞くような真夜子ではない。しかたなく涼は、毎晩『ナリタ日報』をガードする決意をかためたが、そこにはすでに周到な警備がしかれていた。
さりげなく目だたないが、かなりの人数が配備されている。
――ナイトハンドの私兵だ！

涼は彼に心から感謝した。
お礼を言わなくちゃいけないな……ちょうど涼が物陰から、ナリタ日報社の裏口をのぞいてそう思っていたとき、誰かが後ろから乱暴にその腕をひねりあげた。
「よし、小僧……さわぐと生命はないぞ」
暗がりで、黒衣のケープにネオンが反射して、青と黄のジャンパーのように見えたらしい。新聞社のアルバイトか、配送係によくある服装だ。
腕がクレーンにはさまれているような感じだ。背後の男は満足そうな低い声で、
「やけに守りのかたい奴らだが、ようやく一人つかまえたぞ！　こい、小僧……デュークさまにお会いするんだ！」
――デュークの力で洗脳して、内部から役立てようというわけだね。
男には勝手にしゃべらせておいて、冷静に涼は考えた。
――この怪力！　どうやらかなりの側近みずからのおでましだぞ……。
〝なぜこの子供は、こんなときにクスクス笑うのだろう？〟
男は次の瞬間にはその答えに思いあたっていた。ひねりあげたはずの少年の腕が、人とは思えぬ力でもとに戻されていく……。
「き、貴様、アルディーン!!」
金属的な不気味な声が、楽しそうに悲鳴に応えた。

「そう……知られたからには帰せないなァ」
ふりむきもせず、みぞおちへの一撃で男はくずれ落ちた。
倒れた男の姿を見下ろして、アルディーンが考えている。
――間違いなく、この男は七賢人の幹部クラスだ。デュークにもきっと会っている！
だけど、彼に居所をたずねるわけにはいかない。そんなことをすれば死んでしまうだろう。この暗示の力があるかぎり、デュークの身は永久に安全なままなのだ。
闇の皇子が深くタメ息をついた。
――このままじゃいつまでもどうどう巡りだ。
早く、どこかに突破口を見つけなければ、七賢人を倒せなくなる!!
立ちなおる時間をあたえたときの、彼らのまきかえしが恐ろしかった。
だが、破局はアルディーンの思ってもいない方向から来ようとしていたのだった。
この夜……教団の本部では、無月の集会が行われていた。
この月、願いをかなえられた信徒たちは全員前に出て、幹部から小さな鈴をうけとっていた。みな両手でしっかりとつつんで、鈴をうけとる。
中に一つだけ鳴らない鈴があって、それを選んだ者が儀式の生け贄となるのだ。
沙羅・アッシャーの鈴は鳴らなかった。
「こんな……こんなことって……」

蒼白になって、膝がふるえはじめた。はじめての集会で、まさか自分の身にこれが起こるとは！

両側から腕をとられ、デュークの前にひきすえられたときに、少女は狂ったように抵抗をはじめた。

「嫌ッ……私は嫌よ！　やめて、離して!!」

信徒の黒い服装がみだれて、長い髪がほどける。デュークがおもしろそうにそれを見ている……沙羅が必死に叫んだ。

「お願い、助けて……死にたくないッ！」

「気の毒だがお嬢さん、これは〝掟〟なのだよ。死にたくない？　なるほど、誰もそうだろう……だが結局は君が選んだことなのだ」

「お金を出します……いまならいくらでもあげられるわ！　なんでも言うとおりにあげるからッ」

何を代わりにすると言っても、効果はなかった。デュークには何の意味もないのだ。

長い剣の刃先が胸にあたったとき、少女は声をはりあげて、こう叫んでいた。

「……ナイトハンドの正体を知っているわ！」

一瞬、剣を持った幹部の手がとまると、ふりかえってデュークの指示をあおいだ。

デュークは片手をあげ……男はそのままいったん剣をおさめた。

「話してみろ。本当ならお前にほうびをやろうではないか……」

……沙羅がすべてを言い終えたとき、デュークの目は残忍に輝いていた。

――エルクハートの生き残りだったとは！

7年前の夜に殺したはずの老人と、被害者の遺児か……彼は心から感嘆した。見事なものだ！　両親の仇うちたさに、あそこまでなったとは！

――フフ、すばらしい執念だ！　ナイトハンド、それならこちらも相応の報復をしよう。まずそれなりの用意をしなければ。

デュークは〝ほうび〟として自分の手で沙羅・アッシャーを殺し、それから部下たちに命令をくだしていった……。

「残った銃器をすべて集めろ……足りなければ用意はある。奴の身のまわりには、おそらく相当なガードがしかれているに違いない。調べあげるのだ」

きっと血みどろの抵抗があることだろう。楽しみだ。

ところで。

ネオ・ナリタがひさしぶりに晴れたある日のこと、真夜子は旧市街の家にいて、一人きりでのんびりとしていた。

記者になってはじめてのお休みである。涼がいないのがちょっとさみしい。
——でもしかたないわよね。あいつは食堂の定休日じゃないと休めないもの。まつわりつくバカがいないんだから、かえって気楽よ！
「そうだ……スニーカーの整理をしようかな？」
ふと思いたって、玄関近くの棚をかきまわしてみる。
——たしか前に、赤いの放りこんだっけ。あれ、まだはけるかしら？
このところ、掃除もなにもかも涼にまかせきりにしてあったから、どこに何があるかさっぱりわからない。荒らしまわっていると、壁と棚の隙間で手にふれるものがあった。
「……何、これ？　アクセサリー？」
引っぱりだして見ると、銀色の卵形の〝なにか〟だった。
アクセサリーではない。中央にボタンがついている。真夜子は思いっきり何度もそれを押してみた。音はしない。
——知らない、これきっと壊れてんのね⁉
だがわずか10分後、ナリタ署の警察官が倉庫の家に駆けつけてきた。
「緊急だ！　家宅捜査する！」
怖い顔の男たちが、断りもせずに土足で家の中にあがりこんできて、そこらじゅうをひっくりかえしていく。

「なによ、あんたたちッ⁉　どういうこと？　ここはあたしの家よ‼」
一人がふりむいて、ツカツカとやってくると手帳をみせ、
「ナリタ署のものだ……たったいま、この家から緊急発信があったのはどういうわけだ？」
そして真夜子がみすぼらしい少女なのをジロジロ見て、
「……まだガキじゃないか、お前の家だって？」
「失礼ね、あたしは『ナリタ日報』の記者だわ！　ほら名刺ッ」
しかし相手は、名刺をチラリと見ただけで床に投げすてた。
「記者だろうと関係ない。誘拐、監禁の疑いがあるので捜査しているんだ。隠すとためにならないぞ！」
けわしい表情で、おどすように詰問したが、真夜子はいまや火がついた猫のように怒っていた。
「誘拐ですって？　ふざけないで！　ここはあたしの家で、あたし一人しかいないわよッ」
言うなりエイッと、手に持ったものを警官に投げつけた。
「おッ……これだぞ！」
とつぜん、警官たちの顔色が変わって真夜子を取りかこんだ。
「こら！　お前、これはどうしたんだ⁉　ナリタ・アカデミアの人間のものだぞ！」
それは涼がもうずっと前に隠して、忘れてしまったアカデミアのコールボタンだった。

アカデミア？　狐につままれたような真夜子に、
「ナリタ・アカデミアの人間は学外での安全のために、かならず各自の発信器を所持している。助けが必要な場合は、ナリタ市内では市の通信用のアンテナがそれをキャッチし、ナリタ署が援助することになっているんだぞ」
「……ヘエエ、すごいのねェ！」
真夜子がつい目を丸くする。
「記者のくせにそんなことも知らないのか？」
――なによ、嫌な奴ッ！
「とにかく、たったいまその緊急発信用の周波がとどいたんだ。この家から……いったい、どういうわけでこれがここにあるんだ!?」
集まってきた警官の一人が、ナンバーを調べた。
「見ろ……158175、氏名は〝涼・雨宮〟だ！」
〝涼ですって？〟
真夜子の耳が一瞬ピクリと動いた。
「間違いない、例の事故機の生徒の認識番号だ……」
そんな会話を聞きながして、真夜子の頭がいそがしく動く。涼がアカデミアの生徒ですって？　本物のアカデミアの生徒!?

――ウッソー！　なんですって⁉
めまいがするほど驚いたが、よく考えればなぜかうなずける。涼のあの異様な世間知らずも、それなら説明がつくではないか！
〝わかった〟
真夜子は一人で結論を出した。
――涼ったら、勉強がつらくて逃げだしてきたんだわ！
きっと創立以来の劣等生で、エリートの集団で毎日いじめられていたのだろう。
何かの間違いでアカデミアに編入し、授業にもついていけずに泣いてばかりいる姿がありありと目に浮かぶ。
無理ないわ、かわいそうに……真夜子はしっかりと度胸をきめて、ナリタ署の警官をにらんだ。フフン、アカデミアがなにさ！
「おい、正直に言えよ！　なぜこれがここにある⁉」
――心配ないわよ、涼。ウソついて追い返してやるから！　なによこんな連中ッ……見てなさい、真夜子がうまくやるわ。あんたを連れてかせやしないわよ！
「これのこと？　アラ、あたし、ひろったんだわ」
〝どこで！〟
真夜子は適当な廃品置き場の一角を指さした。

「あのへん……かな？　わかんないわ、いろんなガラクタがいっつも捨ててあるから。何かなーとか思って、押してみたんだけど」

怖い顔の男たちを前に、平気な顔でそう言って首をかしげてみせた。

真夜子がまだ子供だったことと、例の事故からだいぶ月日がたっていたことが幸いして、彼らはその言葉を信じてしまった。

たしかに倉庫の家には、ほかに人の気配もない……緊張がふっとゆるんだ。

「そうか……やはりな、あの事故で生きているはずはないんだ」

「誤報だな……おい、みんな引きあげよう」

ちょっと残念そうに彼らはうなずいた。真夜子はフフンと心のなかで笑った。

――誘拐じゃなくて、自分から隠れてるとは思わないのかしらね？

そして、帰ろうとして車に乗る警官の一人に声をかけた。

「おまわりさん、たいへんねえ。たった一人の生徒のために緊急出動なんて……アカデミアって本当にすごいのねェ！」

男はふりかえって、ややバカにしたように、

「なにしろ、アカデミア創立以来の天才児だからね」

――え？　なんですって？

真夜子がふと眉をひそめた。

「わずか16歳で首席生徒だったんだそうだ……まったくもったいない。気の毒な事故だよ。生きていれば、いずれは国家元首も間違いないのにな」

車の中から、別の警官が笑いながら言う。

「いずれにせよ、旧市街のガキなんかには関係のない話さ！　見ろよ、この汚い〝家〟！人間の住むところじゃないね、これは」

「でも未来の国家元首なら、ちょっと勉強になるかもしれないぜ……最低の生活ってやつ、アカデミアじゃ、まさか教わらないだろう？」

見くだした笑い声を残して車が行ってしまったあとで、真夜子は一人、倉庫の前にポツンと立っていた。

顔色がとても青い。

――アカデミアの首席生徒ですって？

１５８１７５　涼・雨宮。それが涼の本当の名前だった。

呆然としたまま、家の中に入る。むきだしのコンクリートの壁、まだらの床板、ゴミ捨て場からひろってきた椅子や本棚。

――本当に汚いわね……。

ふとアカデミアを思いだした。夜になるとナリタ市のはるか遠くに、明かりだけ見えている……真夜子に近よった経験などありはしない。人の噂で白亜の別世界だと聞いていた。

将来を約束されたエリートだけがいるところ……。
そこからこの街に来たがる者がいるわけがない。まして、首席生徒だった人間が！
――どうしてよ、涼ッ……なんで!?
急にさっきの警官の言葉が胸につきささった。〝未来の国家元首なら勉強になるかもしれないぜ？〟
いつも自分が何を言っても、けっして怒りはしなかった。家にいるときは、いつもうるさいほどまつわりついてきて、にこにこしながら見つめていた。
そうなの、そんなわけだったの……スラム街で、いつも楽しそうにしていた涼。涼がそばにいると自分も楽しかった。ほかの子とはどこか違うと、心の底では思っていた。
――違うはずだわ、みんなウソだったもの……。
だるそうな手つきで、真夜子は床からさっきの名刺をひろいあげた。これができたとき、あいつなんて言ったっけ？
〝すごいね、真夜子！　かっこいいね！　とうとう新聞記者なんだ！〟
「……かっこいいわけないじゃないのッ！」
かんしゃくを起こして、ビリビリに指でひき裂いた。くやし涙があふれている。
……そして夕方、涼が倉庫の家にもどってくると、真夜子が見たこともない冷たい目をして彼を待っていた。

「ただいま……真夜子？」

血の気のない白い顔をして黙っている……涼が不安そうに声をかけると、

「あのね……涼、今日おもしろいことがあったのよ。棚の後ろで変な発信器を見つけて、押してみたらナリタ署の警官がきて、この家にアカデミアの生徒がいるっていうの。あたしとっさにそんな人いないってウソをついちゃったけど、悪いことしたかしらね？」

涼の顔がサッと青ざめた。

「真夜子……それは……」

「アカデミアの首席生徒なんですってね!?」

真夜子の頬がいきなりカッと赤くなると、力いっぱいコールボタンを涼に投げつけた。

昼間の警官の見くだした笑い声が、まだ聞こえるような気がしていた。

「出てってよ!!　この家から出てってよ！　ゴミ置き場の汚い倉庫なんて、アカデミアの首席生徒さまが長くいるところじゃないものねッ！

ずっとだましていたのね、卑怯な奴！　どうして黙っていたの!?　知ってるわよ……でも、もういいでしょう!?　スラムの生活なら、もうたくさん見れたでしょう！」

くやしくて、目から涙がボロボロでる。

「楽しかった？　いい勉強になった？　じゃあ、もう帰るといいわ、アカデミアへ！」

嫌がる涼の身体を押して、無理に戸口へ連れていこうとする。

「ちくしょう、バカにしないでよッ……楽しそうなふりして、みんなウソだったのね！　あんたはあたしが好きなんだと思ってたわ。本音はどうだったわけ⁉」

怒鳴りつづけて息が切れたらしい、つきとばす力がずっと弱くなった。

涼が必死に真夜子にしがみつく。

「やめてよ、真夜子、追いださないで！」

「ふざけんな、出ていけッ！」

両腕をつかんでつき放そうとしたとき、はじめて顔を見たのだ。

おびえたように目を見開いて、すがりつく手がブルブルふるえている。

「真夜子……お願いだから、ここに置いて！　アカデミアには帰さないで！」

バカ言わないでよ、どうしてそんな……一瞬、手をゆるめた真夜子の耳に、涼のきれぎれの言葉が入ってくる。

「……僕は真夜子のそばを離れるのは嫌だ！　アカデミアではいつも一人だったんだ。みんなが僕を特別な機械だと思っていて、教授も教官も僕の能力だけしか見てくれない。僕は涼じゃなくて機械なんだ！　すごく寒いんだ。さみしくて……」

暖かい本物の涙が手にあたる。

「ずっと一人でいて、自分がさみしいこともわからないくらい一人でいて……息がうまくできなくて、本当に機械になるような気がしていた。ネオ・ナリタで真夜子のそばにいられる

ようになって、やっと僕は泣くこともちゃんとおぼえたんだ！」

自分を機械のように見る人々の前にいると、泣きかたもわからなくなること、真夜子にどう言えばいいだろうか？

「黙っていたのは、言えば真夜子も変わってしまうかと思って……ここを出されたら、僕にはあそこしか帰るところはないんだ。だけど、アカデミアに帰ればまた機械にされる……僕は嫌だ！　真夜子といたい！」

真夜子には涼の言っていることは、半分もわからなかった。

ただ、ふるえている肩や泣きじゃくる声がもっと多くを伝えていた。

――ひどいわ、この子怖がっている。アカデミアに帰るのが、本当につらいんだわ。

何を疑っていたのか、もうよく思いだせなかった。

ここにいるのは涼で、アカデミアの首席だったのかもしれないけれど、ただの16歳の少年なのだ。

人一倍、気が優しくて、誰にでもすぐなつきたがるこの子を、アカデミアの人たちはきっと高価な人形のように扱ったのだろう。真夜子ははじめてタメ息をついた。

……髪をなでる優しい手を感じて、涼はすこしだけ泣くのをやめた。

「お願いだよ、真夜子が好きなんだ……真夜子がいるから、どうしても帰れなくなった」

――それでも出ていかなきゃいけないの？

「バカね、涼……泣きやみなさいよ」
くしゃくしゃの髪をなでていた真夜子が、いきなり身をかがめると、ひたいにキスしてくれた。驚いた涼が顔をあげる。
「みっともない！　よくそんな顔で好きだなんて言えたものね？」
「だって、好きだから……」
ドギマギと言う涼の前で真夜子が笑い、〝情けないわね〟と言ってからなにげなく、
「だけど……キスしてもいいわよ」
――え⁉　真夜子、いいの？
言ってから真夜子も〝しまった〟と思ったらしい。だがもうおそかった。涼がソッと手をのばして真夜子の肩を抱くと、優しい目で見つめる……おそるおそるだが、あたたかいキスだった。
弱虫の涼の腕が、意外にしっかりと自分をささえてくれることにはじめて気づいた。
――ヘンね……あたしずっと前から、涼とキスするかなって考えていたんだわ。やっぱりね、思ったとおりだった……。
「……僕、出ていかなくてもいいんだよね？」
うっとりと幸せにひたっていた涼は、腕のなかで真夜子がクスッと笑う声を聞いて、あわててたずねた。

「どうかしたの、真夜子？」
「やっぱり思っていたとおりだったの……涼ってキスがへた」
〝ええッ⁉〟
ショックで愕然としている涼を平気で見すてて、真夜子はサッサと台所に行ってしまった。
「お腹すいたわ！　何かある？」
断っておくが、真夜子だってキスにくわしいわけではない。だが、それに気がつく余裕は涼にはない。かわりに、かたくかたく心に誓っていた。
〝キスだけは、なんとしてもうまくなりたい！〟
……ファイト！

その晩、2階の窓から外を見ながら、涼はジッと考えこんでいた。
窓にもたれて旧市街の夜を感じながら、静かに暗闇を見つめている。
その後ろ姿の姿勢は、ほとんど闇の皇子だった。
ほとんど……だが、どこかがまだ違っていた。なぜだか今日はアルディーンになりたくなかった。ヘンだ、と涼は心の奥をのぞいた。
——未練だな、これは。

真夜子がいるこの場所から、離れるのがすこし嫌だったのだ。
びっくりするほど優しいキスの感触が、まだくちびるに残っていた。
出ていけば、七賢人との戦いが今夜もはじまる。もしかしたら、ワナにかかってもどってこれないかもしれない……エルクハートの工場のときのように。いまはそれがこんなに怖いのだ。
——でもやっぱり逃げだすわけにはいかない！
デュークを追いつめてここまできたんだ。ネオ・ナリタは現在、かつてないほど治安が回復してきているのに、ここで逃げれば多くの人がまた犠牲になるだろう……。
そしてナイトハンドがいた。
いま背を向けたら、あの黒衣の青年はどうなるだろう？　涼が深いタメ息をついた。
一人殺すたびに自分を追いつめ、暗い闇のなかへ自分から捕らわれてゆく、ナイトハンドが哀れだった。
それに彼は一度、涼の生命を助けてくれているのだ……。
——僕には彼を見すてはいけない。
絶対に！　そう考えて、きっぱりと顔を上げたとき、遠くで激しい爆音がひびいた。
強烈な炎が夜空をこがし、おびただしい人の血の匂いが、こんな遠くにまで流れてくる。
「……いったい、あれはなんだ!?」

階下から、飛びおきた真夜子の叫び声が聞こえた。
「涼ッ、ナサニエル・ゴードンの屋敷が火事だわ！　すごい火……あたし、ちょっと社に行ってくるから!!」

闇の皇子は誰よりも早く現場に到着した。
あの豪邸が燃えあがり、火炎が屋敷のどの窓からも吹きあげている。
――これはただの火事なんかじゃないぞ！
激しい人声でふりむくと、ナイトハンドが狂ったように数人の手に押さえられていた。
「離せッ……中にはまだウォルフがいるんだ!!」
暴れる彼を押さえているのは、この屋敷の傭兵であるらしい。何人かはひと目で、重傷を負っているのがわかった。
目があうと、そのうちの一人がうつろな声で言った。
「突然、入ってきた連中が……なんの前ぶれもなく……」
完璧な武装の一団がナサニエル・ゴードンの屋敷に乱入し、手あたりしだいに殺しはじめた。彼らはこの屋敷の武器庫の場所まで知っており、最初に火をはなったという。
プロの集団だったガードたちが、かなりの人数をやられ、残った者たちも傷だらけで、屋

敷内から脱け出せたのが奇跡だと口々に語った。

「とにかく火を……消火システムはどうして動かないんだ？」

「門の外から給水管をふさがれているんだ！　ぜんぜん手がとどく場所じゃない、せめてレーザー砲が運びだせていたら……」

闇の皇子はうなずいて、その場所まで走っていった。マンホールのふたをはねあげると、たしかに地下5メートルの場所でバルブが溶接されている。

ごていねいに手がとどかないよう、鉄格子がはめこまれていて、しかも二重、三重に鎖がかかっている。

――なんだ、こんなもの!!

アルディーンの瞳が赤く輝き、鎖からジリジリと断ちきられていく……頭が痛む。闇の皇子はくちびるを噛んで、頑丈な鉄格子を必死でねじ曲げた。

さすがに頭の芯がズキズキする……だが、めまいを無理やりこらえて、下に飛びおり、バルブを力まかせにもどした。遅れていたスプリンクラーがいっきに作動する。

門内にもどるとすでにナイトハンドが中に飛びこんで、建物のはりで下じきにされていたウォルフ老人の身体を運びだしてきた。

しかし、もう意識もない。土気色の老人の顔を見て、アルディーンは顔をそむけてしまった。生き残ったガードたちが病院へ運んでいったが、おそらく助からないだろう。

「……奴ら、七賢人だった」

老人を送りだしたあとで、ナイトハンドがポツリとつぶやいた。

「そう言っていたのだ、〝デュークからナイトハンドへの最初の贈りものだ〟と」

「そんなバカな！　だって、どうして……」

――ナイトハンドの正体が彼だと、どうしてデュークにわかったのだろう？

この男の二つの顔を知っているのは、闇の皇子と執事のウォルフだけのはずだ。

ナサニエル・ゴードンとして雇った傭兵たちは、ウォルフ老人がつねに厳しい監視をしており、しかも彼らにはナイトハンドの任務は一度きりしかあたえず、そのあとはかならず香港に帰していた。

雇い主の真の目的と、正体を知った者は、ネオ・ナリタにはいさせなかった。

それなのに、わからない……混乱した頭で涼が考えていると、ふと門のそばに木箱が見えた。

いつのまに、置かれていたのだろう？　近よって見ると、表にカードがとめてある。

〝デュークから二つ目のプレゼントだ。君の裏切り者をつつしんで進呈する〟

沙羅・アッシャーの死体が入っているのを見て、涼は顔色を変えた。

――この娘がナイトハンドを売ったのか！

ふりかえるとナイトハンドは、氷の像のように立って棺桶の中を見おろしていた。



喉に炎のかたちのペンダントがさがっていた……七賢人の信徒の印だ。

……恐怖にゆがんだ死に顔を見ても、ナイトハンドはもう眉一つ、動かさなかった。

凄まじい一夜はすぐ明けてしまった。

こげたガラス、ねじれた金属……闇の皇子の黒衣のまま、呆然と立ちつくしていた涼の耳にナイトハンドの声が入ってきた。

それまでずっと黙っていた彼は、何を思ったのか低い声で、襲撃のようすを話しはじめたのだ……。

「……まったくの不意打ちだったから、警備の人間も対応できなかった。なにより奴らの装備が凄まじかった」

マシンガン、ガトリング砲、レーザー……一人にいくらでも与えられていて、彼らは気ままに使いまくった。

「アルディーン、奴らはどこからあれほどの武器をそろえてきたのだろうか？　我々はずいぶん多くの支部をおとした。隠し倉庫もだ！　だが、まだあれほどの武器が残っていたなんて……どこにだ!?」

闇の皇子が首をかしげて、

「市内にある教団の武器庫は、ほとんど僕らがつぶした……と考えていいと思う。だから補充があったとすれば、きっと本部からきたはずなんだけど……」

密輸の可能性は薄かった。

港も空港も、真吾警部の仕事ぶりを見ていた涼は、〝今度こそどちらも完全に封鎖したぞ！〟という彼の言葉を信じていた。

「……でも、その場所はどこなのだろう？」

涼にはわからなかった。

いつのまにか、生き残りの傭兵たちがまわりに集まってきている。みな疲弊した顔に目だけをギラギラと光らせて、無言のまま二人の会話に耳をかたむけていた。

短い沈黙のあとでナイトハンドがつぶやく。

「レーザーガンを持った信徒がいたのだ。あれはふつうの銃とは違って、弾丸でなくエネルギーを補充してやらなければならない。恐ろしく高くつく代物だ！

ネオ・ナリタにあんなものがあるのが、そもそも不思議なことではないのか？　この街でそれほどのエネルギーを使える場所があるだろうか……私が知るかぎりではない」

たとえば香港の黒社会でも、ふつうはそんなものを持たせはしない。

エネルギーが用意できなければ、ただのガラクタにすぎないからだ。

……ナイトハンドがひどく奇妙な声音で、話しつづけた。まるで答えのわかったパズルを

暗唱するように聞こえる。

「だがネオ・ナリタのごく近くでなら、一か所だけ……それだけのエネルギーを豊富に持つ場所におぼえがある。思えばまだ誰も踏みこんだことのないところだ。アカデミア・ネオ・ナリタ」

涼の声がいきなりはねあがった。

「ナイトハンド、どうかしているんじゃないのかッ!?　アカデミアだって!?」

――ハハハ、バカを言わないでほしい。君は学院のシステムを知らないんだね!?

「アカデミアの生徒には守らねばならない規律がある。けっして気ままに外部に出られるものじゃないんだ!」

スケジュールは24時間単位で決められていて、行動はしばられはしないが、厳しくチェックされている。教官もそれは同じことだ。

「教授たちの場合は全員が客員なんだ、3年たてばみんな交替する!」

世界のトップクラスを集めたアカデミアの講師たちは、一種の名誉職であり、次々ときて交替していく。

「だから、7年ものあいだ在籍した教授なんかいないんだ!　アカデミアの人間はみんなそうだ、教授も学生も、時期がくれば学院を離れなくてはならない……」

〝ただ一人、学長をのぞいては〟

見ている男たちには、ナイトハンドの言葉でアルディーンがなぜ怒りだしたのか、そしてなぜ突然に黙りこんでしまったのかがわからなかった。

しかし彼らの目の前で、闇の皇子の肩がふるえはじめた。くちびるから見るまに血の気が失せていく……デュークがネオ・ナリタにはじめてあらわれたのは、7年前のあの夜だ。

それなら、いまの学長がアカデミアに就任したのは？

〝たしか7年前〟

……いま、涼の心には、たった一つの疑問しかなかった。

――僕の機は、どうして落ちた？

あの日、風は強いが心配はいらないと、ベテランのパイロットがはっきり言っていた。

突然、きかなくなった操縦桿。目の前で燃えあがったファイルケース。

――僕は……卒業後、アカデミアの指導教官を希望していたんだ……。

ありえないことだが、卒業後も学院に残ろうとしたのだ。

学長はとても厳しく反対した。

何度となく呼びだされて説得されたが、涼は気持ちを変えなかった。

涼のような進路を選んだ人間は、アカデミアの記録でもほかに類をみないだろう。

――あのとき、僕はアカデミアと学長のもとに残りたいだけで、ほかに目的なんかなかった！

しかしそれは、アカデミアという場所についてよく知りぬいた鋭い頭脳が、そのまま学院にとどまることを意味するのではなかったのか？

アカデミアの規律は厳しい。〝ここより立ち入ってはいけない〟と指示を受ければ、あえてその先に行く生徒は一人もいない。

だから、あの広い建物のなかには、人の行かない場所もずいぶんあるはず……涼も認めざるをえなかった。

〝さあ、涼。これを持っていくといい。君の在学中の貴重な成果だ〟

学長みずから渡してくれた、あのファイルケース。

目の前で、まるで爆発したように燃えたあのケースは……。

「アルディーン」

ナイトハンドの声を聞いた瞬間、闇の皇子はピクリと身体を動かした。

凍りついたようなその顔が、すべてを物語っていた。

「……ではお前もそう思うのだな？」

――違う……みんなウソだ!!

〝ナイトハンド、よくもそんなウソを！〟

そう叫びたい気持ちと、すべて本当だと認める気持ち。激しい吐きけがはじまり、目の前がグラグラした。

弱々しいそぶりで何度も首をふりつづける涼は、悲しみと怒りで心が完全にひき裂かれてしまっていたが、ナイトハンドは、もはやそんな苦痛には目もくれなかった。

ツカツカと焼け跡に歩いていくと、使えそうな銃を捜す……やがて、あるだけの武器を集め終わると、一丁のライフルを選んで肩にさげた。

「私は行くが、お前はどうする？」

冷たさの極みのような彼の声が、涼を現実にひきもどした。

「どうする……来るのか、こないのか？」

「……僕も行こう」

行かなければ……ならない。アカデミアは彼の故郷だった。

左手が上着にはいり、鎖のちぎれるかすかな音がした。ずっとさげていたアカデミアの認識票は、ふるえる手でポケットにねじこまれた。

運命の皮肉な声が聞こえるような気がしていた。〝ふたたび、アカデミアへ……〟と。

日暮れ近く、アカデミアをのぞむ丘の上に、アルディーンとナイトハンドは立っていた。

ここからなら建物の全景が見える。

一つ一つ指をさして、低い声で涼が建物の説明をした。

「……あの棟は図書館で、1階から7階まですべて資料室か倉庫だ。あの棟は生徒の宿舎。あそこに見える建物は講堂だけど、地下には誰も入らない……」

その場所にいたのは二人だけではなかった。

私兵の中から動ける者数名が、志願してついてきていた。無傷の者はいない。武器もない……いや、彼らはよせあつめのライフルや銃を持ってはいた。だが、本来装備していた武器にくらべたら、素手でいるようなものだ。

彼らは光る目をして説明を聞き、全体の配置を頭にたたきこんだ。

「学長室はどこだ？」

ナイトハンドがたずねる。十中八九、そこに〝デューク〟がいるはずの場所だ。

「あの塔のいちばん上。でも夜には、僕は行ったことはないんだ」

……アルディーンがポツリと答えた。

ナイトハンドはわずかな手勢に、学長の塔の外をかためさせた。

「一般の職員がきたら威嚇して追いはらえ。万が一、警察が駆けつけてきたら、絶対に邪魔をさせるな。塔の中に入るのは、我々二人だけだ」

アルディーンが静かにうなずいた。

本当に七賢人教団の本部がアカデミア・ネオ・ナリタなら、あの塔にこれから入る人間は、きっと生きては出られない。

「敵はおそらく、昨夜の襲撃で我々が全滅しているものと思っているのだろう。こちらにとっては、それがチャンスだ……」

だが、そういうナイトハンドに、いつもの武装はないのだ。

……日が沈み、闇の皇子の力が満ちてから、攻撃は開始された。

闇にまぎれて塔に近づき、二人が侵入するまでは、とても早かった。

実際に塔に入りこむまで、涼は心でまだ〝まさか〟と信じる気持ちがあった。

だが、あきらかに学院の者ではない男たちが、銃を手に、階段を守っているのを見て怒りがすべてを忘れさせた。

ものも言わずに飛びかかって、喉笛をくだいた。隣でナイトハンドが、やはり相手に悲鳴をあげる隙さえあたえず、背骨をへしおっていた。

3階に上がるまで誰にも気づかれなかったが、そこまで来たとき、下で騒ぎが起こった。どうやら塔の外で銃撃戦がはじまったらしい。すぐに内部でも血の雨がふりはじめた。

ナイトハンドはライフルと手榴弾を使って、当たるをさいわい、なぎたおしている。

闇の皇子は身の軽い竜巻のように、黒いケープをひるがえして、行く手の邪魔をする者はなんであれ容赦しなかった。何人もの信徒たちが、その細身の剣で突き刺されていった。

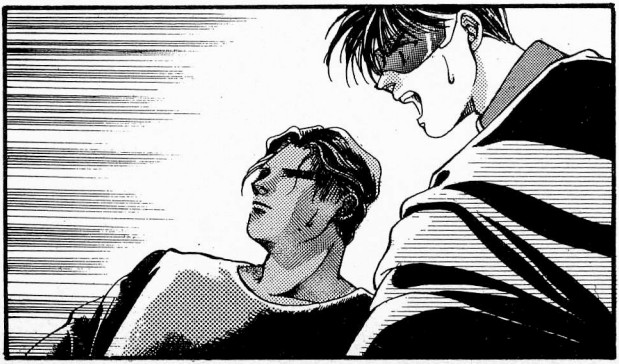
「ナイトハンド……この次が最上階だッ！」

アルディーンが叫んだのは、最後の階段の前だった。

ここが最後の決戦の場所になる……どちらともなくうなずいた。
できるだけ奴らに銃を使わせたくない。ナイトハンドはすでにライフルを捨ててきていた。
漆黒のメタルスーツはなまじっかな弾丸は通さないが、すでにいくつか深手も負った。彼の武器といえるのは、鍛えぬかれた殺人の技だけになっていたが、しかし彼はそれでもなぜか魔人のように強かった。
刃をしこんだマントの裾で、正確に男たちの胸や喉を切り裂いている……。
上の踊り場で戦っているアルディーンの耳に、ふとナイトハンドの声が聞こえた。
見おろすと彼は、段の中途で一人の敵と向かいあっていた。
いままでの相手より格段に大きく、ナイトハンドをしのぐ体格だった。ジリジリと間合いをつめていったナイトハンドは床の血で足をすべらせてしまったらしい、一瞬よろめいた彼の背中から、相手はマントをひき裂いてうばった。
「……くそッ、よくも！」
ナイトハンドにたてなおすチャンスをあたえずに、男はすばやく首に手をかけて締め殺そうとする。デュークによって力を得ているらしい、常人ではありえない怪力だった。
「ナイトハンド!!」
アルディーンは、彼と離れてしまったことを心から後悔した。







——しまった、僕たちは一対で戦うべきだったのにッ！

もどろうとしても、もはや遅い。そのあいだにも男の力は、ナイトハンドの呼吸を徐々にとめていった……涼が息をのんだ最後の瞬間、ナイトハンドの手が男の両腕をくだいていた。

「グアアッ！」

男が思わず悲鳴をあげてあとずさると、ナイトハンドはすかさずそのひたいを壁にたたきつけた。卵がつぶれるような嫌な音のあと、男は死骸となって転がり落ちていった。

「ナイトハンド、大丈夫か⁉」

踊り場で最後の敵を倒したアルディーンが駆けよると、勝ったはずのナイトハンドが床の上にゆっくりと崩れ落ちるところだった。

鉛のような顔色、激しい苦痛をこらえるように身体がけいれんしている。

「……どこかケガを⁉」

ナイトハンドは楽しげに首をふり、自分をあざけるような口調で、

「やはり二回目になると、身体がもたなかったなァ……」

アルディーンはハッと思いあたった。

「まさか……あの薬を使ったのかッ？」

そういえばナイトハンドは疲れも知らず、恐ろしい強さのままで涼についてきた。さっき

の男の腕を折ったとき、二度目のカプセルを使っていたとしたら……。
苦しそうに荒い息をついている彼を、涼は必死にゆさぶった。
「しっかりしろ！　こんなところで倒れてどうする⁉」
だがナイトハンドは起きようとはしなかった。〝仮面をはずしてほしい〟とだけつぶやいた。
素顔になると、彼が身体の内部からくる激痛に耐えているのがよくわかった。
――ナイトハンド……なんてバカなことを！
「もういい。もういいんだ、アルディーン……すまないがこの先には、お前だけで行ってくれ。私はもう動けない」
やがて麻痺がおとずれたらしい。ナイトハンドは力を抜いた。
やっと休む場所を見つけたような表情で、血の海に横たわっている。
「許してくれ、もう進めないんだ。もう嫌だ、私は……終わりにしたい。父も母も死んだ、ウォルフも……私にかかわった者はみんな死ぬ！」
笑うようなククという声がもれた。
「……死ぬんだ。みんな死んでしまった。一人も生かしておけなかった……もう誰もいない、私もすぐに死の行進に入るんだ、それで終わりだ」
だが……まるで遠くを見るようなまなざしが、ふと涼に向けられた。

「アルディーン、お前だけは違ったな？　お前は不思議だ……」
この相手の考えは、ナイトハンドにはついにわからなかった。
「だが、もし……一度でいい……お前のように愛してみたかった」
そのまま目を閉じようとする頬を、アルディーンが力いっぱいなぐっていた。
「卑怯者ッ……目をさませ!!」
嵐のようなののしり声が、階段の天井にこだました。
「起きろ、このいくじなし！　僕は許さないぞッ……ナイトハンド、あと一歩でいいから前に出ろ！　まだ死んでいないだろう？　まだ、君は生きられるはずだ！」
気がつくと、出口のない暗い迷宮にとじこめられていたのだ。
――あきらめちゃいけない、僕だって同じだったんだ！
「たとえいまは一人だって、君の手をとってくれる人は、きっとどこかにいるはずなんだ！　信じることを怖がるな……ウォルフだってまだ死んだとはかぎらないだろう!?　夢みていれば、いつかはかなうんだ！　だからあと一歩でいいから……ナイトハンド、それでかならず抜けだせるから!!」
――アルディーン……。
そのとき、階段の下からドヤドヤと駆けのぼってくる足音が響いてきた。
「七賢人の新手だッ……いけ、アルディーン！」

ナイトハンドが身体をひきずり起こして、手近の死体から銃を奪った。
今度の敵はレーザーを持っている。灼熱の光線が、黒衣のわきをかすめていった。
「急ぐんだ！　ここは私がくいとめる!!」
ナイトハンドにつきとばされて、アルディーンが階段を駆けあがった。

――これはみんな悪い夢ではなかろうか？
人気のない、塔の最上階の廊下をたった一人で走りながら、涼・雨宮がいぶかしんでいた。廊下のつきあたりのドアには見おぼえがある。
かつて何度もおとずれた、アカデミアの学長室だ。
怖い夢でする行動のように、涼はゆっくりと扉を開いた。いま、自分は目が覚めるはずだ……いま覚めるはず……。
学長の机の前に〝デューク〟が立っていた。
やせて背の高い、鷹のような横顔……見おぼえのないのは、そのまがまがしい黒の長衣だけ。
……その手にピストルを握っている。
〝闇の皇子〟が力でそれを手からはね飛ばした。そして妖魔の声で、

「……驚いたな。アカデミアの学長が、七賢人の黒幕だったとは！」

かつては敬愛していた人物の顔に、見たこともない邪悪な表情が浮かんでいるのを、胸の痛みだけで受けとめていた。

デュークはゆっくりと笑った。

「では、とうとうここまで来てしまったのか。闇の皇子……ナサニエル・ゴードンの屋敷からも、意外に多くの生き残りが来たらしいな」

「デューク……もう逃げられないぞ」

闇の皇子は警戒しながらも、ジリジリと近づいていった。背後からはまだ誰もこない。デュークはすでに、いかなる武器も持ってはいなかった。

「ひとつ、聞かせてくれないか？　アカデミアの学長ともあろう人が、どうして七賢人の主になった？」

邪悪な笑顔のままで、デュークは答えた。

「どうして？　そう……いつのころからか、私はもっと多くを支配してみたいと思うようになった。私にはそのための力もある。この力は……私がずっと隠してきたものだった。なぜならこれが知られれば、私は見世物になってしまうからね。おまけに、望みどおりの権力を手にすることもできなくなる」

そして、どこか遠くを見るようなまなざしで、

「人よりすぐれた能力を持ちながら、つまらない人間どもと同じ生活をするのは、息がつまる思いだった。しかし、この街にきて……ネオ・ナリタはすぐに私を魅了したよ。あの貧しさ、すさんだ人々、邪教の記憶。すぐにも全市を支配することが可能だった」

あとから邪魔になりそうな人間は、先に片づけてしまった。

アカデミアには自治のための武器庫があった。

「そして支配したものならば、どうしようと勝手にしてみたくなるものだよ。その運命から手にするのでなければ、支配などなんの値打ちもない」

「……だから意味もなく人を生け贄にして楽しんだのか⁉」

デュークは軽く手を振ってから、

「そう恐ろしい顔をすることはなかろう、アルディーン？　君の勝ちだ！　ネオ・ナリタの組織はほとんど壊滅状態にあるし、ここで私がやられてしまえば、二度と再建することはない。君にはまだその剣があるが、私にはもう武器もないのだ……」

だから勝負はもう決まったも同然……そう言ってデュークは笑った。

「だがね、たった一つだけ、私にも生きのびるチャンスがあるのだ。アルディーン、これはどうだ！」

いきなり電撃にあったようなショックが心臓をつらぬいた。

――な……なに⁉　苦しいッ！

闇の皇子はのけぞったまま、床に激突した。焼けつくような痛みが全身に流れる。まるで金縛りにかかったように、身体の自由がきかない。けいれんして、のたうちまわっている彼の耳に、近づいてくるデュークの足音が聞こえた。

反撃などできない。気絶しそうになる意識をこらえるのでせいいっぱいだった。

「涼・雨宮……やはり君だったのだな」

頭の上で学長の声がする。

「〝闇の皇子〟の噂を聞いたとき、まっさきに私が考えたのは君のことだった。アルディーンに憑かれて人の意識を保てるのは、君くらいなものだとね。だが君は、あの事故で抹殺したはずだった」

——抹殺？　それなら、やはりあのときの事故は……。

床の上で苦しんでいる涼の瞳が、やや光って学長のほうを見た。

「そう……もちろん、私だったのだよ」

彼はそう言いながら、ふと手をのばすとアルディーンの喉もとを確認した。

「規定どおり首にかけてはいなかったのだな。もし、そうなら一撃で生命をとめてやれたものを……」

「な……ん……ですって？」

手は次に涼のゴーグルをはずした。はじめて二人の目が向かいあう……学長は笑ってい

た。

「158175……君の認識票は、はじめから特別製だったのだよ。はじめから特殊な仕掛けがつけられていてね。私のスイッチ一つで、何万ボルトという電流が流れるのだ。

私のただ一つのチャンスというのがこれさ。君がもし、私の知る涼・雨宮で……私が知っている彼のように、いまでもアカデミアの認識票を身につけているとしたら、君の生死は私のものだ」

〝なぜ、いったいなんのために!?〟

懸命の努力で涼が叫んだ。

「実を言えば、私は君がこの学院にきたときから、君が怖かったものだ……」

6年前、涼・雨宮がナリタ・アカデミアに入学してきたとき。

すでにデュークとしてネオ・ナリタに君臨していた彼は、ひとめで涼を恐れた。

知能と精神力と、澄んだ瞳をかねそなえている。

いつの日か自分の悪を暴かれるとしたら、この生徒の手によるような気がしたのだ。

「おぼえているだろうね？　私たちは何度もここで、いろいろな話をした……私は何度も君を呼びつけて、君の意識操作をしようと試みたが、まるで効果はなかった。

ESPというのではないらしいな。だが君の持つ能力は、やはり人間ばなれしている……私はますます君を恐れるようになり、安全のために認識票に手をくわえた」

〝いつでも君の生命が奪えるとなって、ようやく安心したものだよ〟

……現実に彼がもちいた手段は〝学内での急死〟より、事故をよそおった安全な方法だったが。

驚きのあまり声も出せずにいる涼に向かい、学長はなおも話しつづけた。

「そうだ、私はどんなに君を恐れていたことか！　君がそのレベルゆえに学内で孤立していたのは知っていたが、私はわざと手をつけなかった。

君がどうなるかと、興味津々で見守っていたよ……昔、私がしてきたように、生まれもった能力を隠して生活するようになり、ゆがんでいくものだとばかり思っていたが、君は違った。心のきれいさをいっこうに失わなかった！」

憎々しげな目で涼を見つめ、

「だがそれもこれでおしまいだ！　ここが貴様の墓場になるんだ……残念だな、アルディーン。お前さえ死ねば、また私はネオ・ナリタに戻ってやろう。あの街はふたたび七賢人とデュークのものになる……さあ、見ろ！　私の目を!!」

ふいにデュークの瞳が異様な光をおびて、その輝きが意識をつらぬくかと思われた。

ジイッと涼の目の奥をのぞきこんで、彼は満足そうに笑い、

「やはりな……これほど弱っているいまなら、私の暗示にもかかるのだな？」

――それなら苦しい死に方をさせてやろう。

彼は床の上から拳銃をひろってくると、涼の手に持たせた。とぎれずに眼光で相手をしばったまま、

「立て！　涼・雨宮！」

命令されると、どんなに苦しくとも動かずにはいられなかった。あえぎながら立ちあがった涼に、デュークは楽しくてたまらないようすで次の命令をくだした。

「それを頭に向けて撃ちたまえ。はたしてアルディーンが何回耐えられるか、ためしてやろうではないか」

手が勝手な意志を持つように、ピストルを持ちあげる。涼は必死で抵抗しようとした。

――なかなかしぶとい、だがどれだけもつかな？

もう一度、優しい声音をつかってデュークが催促した。

その声、その顔も、みな涼が知っていた懐かしい人物のものだった。その人物を涼は父親のように慕っていたはずだ。

その人が僕を殺そうとしている。

――助けてください、学長!!

自由にならない声をふりしぼって涼は叫んでいた。

「……学長、お願いです、やめてくださいッ……助けてください!!」

本当に心から慕っていた。おだやかな、信頼できる言葉でいつも導いてくれたはずだ。彼

の前に出ると、いつでも温かい気持ちで胸がいっぱいになるではないか？

「すべて偽物だよ、涼！　君の感情は不完全な意識操作の結果にすぎず、私はいつだって君を憎んでいた」

そのとき、涼の心で何かが壊されてしまったようだ。

涙があふれてとまらなくなり、こめかみに銃口があてられる。

「……お願いです、助けて……」

「いい子だ、涼。心配することはないぞ……一度で死ねなければ、何度でも私が助けてあげよう」

――もうダメだ……。

「とても残念だよ、アルディーン……君がもし魂から魔物になっていたなら、我々は二人で世界を支配してもよかったのにな」

引き金に指がかかった瞬間、ふいに身体の呪縛が消えた。

涼の目にうつったデュークのひたいから、一条の光線がつらぬいてのびていた……驚愕した顔のままで死体が倒れる。

……背後にレーザーをかまえたナイトハンドが立っていた。

エピローグ——闇の皇子の冒険

今日、涼は真夜子と一緒にネオ・ナリタの空港までいって、香港にたつ飛行機を見送ってきた。

真夜子はもちろん仕事である。彼の地の富豪、ナサニエル・ゴードン氏が出発する記事を書くためなのだ。

「いいわね、涼！　あんたはオマケなんだから、ほかの人たちの邪魔にならないように隅にいるのよ？　でもあんたがそんなに飛行機が好きだとは、知らなかったわ！」

言われたとおりに、涼はゲートの隅から彼を見送った。

どのみち必要な短い会話はすんでいる。ナイトハンドは身体が完全になおるまで、しばらく香港に戻るつもりだと言っていた……とうぶんは本当に車椅子がいりそうなようすだ。

例によって記者たちが取りかこんでいたが、むこうも涼に気づいたらしい。

しぶとくも奇跡的に一命をとりとめた執事のウォルフが、ナイトハンドに注意をうながした。彼は一度だけ、わかるように手をふって去っていった……。

――ナイトハンドのお父さんは、あの人の心臓に何をしたんだろう？

涼はすこし疑っていた。

ネオ・ナリタはいま、都市再建のまっただなかである。

ナサニオル・ゴードン氏は、エルクハートの工場をいずれ再開させると、市長に約束したらしい。

――そうすると食堂のお客さんがふえるのかなァ？

マスターはかなり期待している。

飛行場からの帰り道で、涼には驚くべきことがあった。

「飛行機って素敵ねッ、いつか乗りたいわ！」

などと言って、はしゃぎながら歩いていた真夜子が、いきなりふりかえって冗談のように〝ね、キスしてもいいわよ〟と言ったのだ。

――どうして⁉　だって僕はいま泣いてもいないし、日曜日でもないのに⁉

モタモタしていたから、気が変わってしまったらしい。

「なによ、バカね！　本気にしたわけ⁉」

赤いショルダーバッグで思いきり頭をたたくと、走りだして行ってしまった。

「ひどいよ真夜子、待ってよ！」

「へへーンだ！　のろまの涼……ここまでおいで！」



――アカデミアも再建されるだろう。でも僕はこの街に残るつもりなんだ。なぜならここには真夜子がいる。

ようやく追いついたときには、真夜子はすっかり別のことを考えていた。

「ねえ、涼。アルディーンはどうしたのかしら？」

〝あんたなんかに聞いてもしかたないけど！〟

真夜子の言葉に涼は微笑んだ。

アカデミアでの死闘のあと、くわしい事情は何一つ公表されなかった。

実際に、涼もナイトハンドも隠れたまま沈黙を守ったので、当局もすべてを知ることはなかったのだ。

真夜子はしきりに、涼からアカデミアの情報を聞きだして参考にしようとしたが、涼はいっさいを〝よく、わからない〟で通したため、

――ボーッとしているのね！　こやつは!!

みごと、〝うすらバカ〟の呼び名をとりもどしてしまった。

「涼、あんたは知らないでしょうけど、素敵な人なのよ！　また、いつか会えるかしら？」

――会えるよ、きっと……。

涼は心のなかで、そっとうなずいていた。

いまは静かなこの街だが、いつかはまた嵐がくるかもしれない……そのときはこの僕、ア

ルディーンが、ネオ・ナリタの敵をうつ！

〝……人か、妖魔か、彼こそネオ・ナリタのあらたなる守護者（ガーディアン）である〟

……闇（やみ）の皇子（こうし）の最初の冒険は、こうして始まり、終わったのだった。

あとがき様のお通りだい!!

……みなさま、こんにちは、井上ほのかです♡

いつも推理ものばかり書いているほのかが、なにを血まよったのか妖怪変化。

はじまりは、もう夏のころまでさかのぼります。

夕方。晩ごはんのおかずのことなどを考えながら、フラフラ歩いていたほのかの横に、黒いオートバイが一台、つっこんでくるみたいな勢いで来て、

――涼・雨宮といいます、僕の話を書いてください！

ゲッ、と言ってふりかえったときには、もう消えていましたっけ。

男の子の声だったな……と、思い、どんなストーリーか考えているうちに、浮かんできたのがこの話でした。

いきなり来て、いきなり消えたので、これは絶対にお化けのたぐいに違いないと思いました。それから、オートバイに乗っていた後ろ姿を、見なかったけど見たつもりになって思いだしたら、黒衣の不思議な格好だったわけです。

――なに、あれ……どこの人？
ネオ・ナリタという名前が出たときに、すべてわかりました……それが、つまりこのストーリーなわけです。
なにしろ相手は妖魔の皇子ですから、書かないとどんなたたりがあるか……。
なんてね。
実際には、ほのかは前からアクションものをやってみたかったんですね。
推理も好きだけど、アクションも大好きさ!!
闇の皇子の冒険、楽しんでもらえたかなあ？
ドキドキしてもらえたら、最高にいい気分!!
もし、そうなら第二、第三の冒険も書いてみたいと思っています。

読者のみなさま。いつもたくさんのうれしいおたより、本当にありがとうございます。
はげましのおたよりほど、ハッピーなものはありません！
一生懸命読んでいますし、返事もなるたけがんばります！
これからも、真名子と克樹、セディ・エロルともども〝ひとつかわいがってやってください〟
とお願いします。

ワイッ。
さらに、今回ともに七転八倒した担当の野村さま。
いかした怪奇の『幻影学園』もついに第2巻が出て、ますます絶好調の瀬口先生……と、いつもながら本当にありがとうございました。
これからもよろしくッ！

井上ほのか

パワフルに華麗に新ジャンルに挑んだほのか先生。いかがでしたか？
ぜひ、感想をお寄せください！
♡ファンレターのあて先♡
〒162-91　東京都牛込郵便局私書箱48号　講談社　文芸図書第四出版部気付「井上ほのか」係
いつもすてきなイラストで大人気の瀬口恵子先生。KCフレンド「幻影学園Ⅱ」も発売中です。
応援のおたよりを、どしどしお寄せください。
♡ファンレターのあて先♡
〒162-91　東京都牛込郵便局私書箱48号　講談社　少女フレンド編集部気付「瀬口恵子」係

井上ほのか(いのうえ・ほのか)
1970年1月5日、東京生まれ。やぎ座、血液型B型。「アイドルは名探偵」で衝撃デビューを飾った。克樹と真名子のわがままコンビが活躍する、この「アイドルは名探偵」シリーズをはじめ、読みごたえ抜群の本格推理「少年探偵セディ・エロル」シリーズも好評です。そして、初のSFアクション「都市戦記・妖魔アルディーン」シリーズにも話題集中！
好きなものは、リバー・フェニックス、ハンコ集め、映画に読書、それからローラースケートと、いちばんはなんたって東山紀之だッ。

講談社X文庫

TEEN'S HEART

都市戦記・妖魔(ようま)アルディーン

井上ほのか

●

1991年1月5日　第1刷発行
1993年3月16日　第4刷発行
定価はカバーに表示してあります。

発行者——野間佐和子
発行所——株式会社 講談社
東京都文京区音羽2-12-21 〒112-01
電話 編集部 03-5395-3507
販売部 03-5395-3626
製作部 03-5395-3615
本文印刷—豊国印刷株式会社
製本———株式会社千曲堂
カバー印刷—双美印刷株式会社
デザイン—山口 馨
©井上ほのか 1991 Printed in Japan
本書の無断複写（コピー）は著作権法上での例外を除き、禁じられています。

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にてお取り替えします。なお、この本についてのお問い合わせは文芸局文芸図書第四出版部あてにお願いいたします。

ISBN4-06-190567-8　(文4)

講談社X文庫ティーンズハート 大好評シリーズ&読者のコピー優秀作

世界が1つなんてつまんない だからね、扉をあけて!（熊本・平木あいさん）

シンデレラをつかまえて 秋野ひとみ
今回は、シンデレラ宝石盗難事件で～す!!（絵・赤羽みちえ）

雨上がりにつかまえて 秋野ひとみ
どうして〝雨の降る夜に見る夢が怖い〟の!!（絵・赤羽みちえ）

レモンの木の下でつかまえて 秋野ひとみ
テープに入ってたのは、誰の、どんな話なの…!?（絵・赤羽みちえ）

なな み・海岸物語 空と海の輝きのあいだで— 秋野ひとみ
温室の扉を開けると、なにかが起こる……!?（絵・赤羽みちえ）

なな み・東京物語 —雨上がりの夜空に— 秋野ひとみ
匿名の手紙で始まった奇妙な事件の真相は!?（絵・赤羽みちえ）

なな み・高原物語 —粉雪の降る日まで— 秋野ひとみ
時を越える恋の行方は……!? 3部作完結編。（絵・赤羽みちえ）

なな み・早春物語 —セピア色の思い出を探して— 秋野ひとみ
新しい遠い旅の始まり…。なな み・番外編!!（絵・赤羽みちえ）

バンパイア・シティ 秋野ひとみ
時を止めたいと思ったことがありますか!?（絵・赤羽みちえ）

さよならは、いわないで —バンパイア・シティー 秋野ひとみ
こよみと龍之介の、〝星の散歩〟物語。（絵・赤羽みちえ）

あの日を忘れないで —バンパイア・シティー 秋野ひとみ
好きといってから、すべてがはじまる……!!（絵・赤羽みちえ）

幽霊たちのセレナーデ —バンパイア・シティー 秋野ひとみ
お化けが出るという合宿所で起きた大事件!!（絵・赤羽みちえ）

吸血鬼なんかこわくないっ! —バンパイア・シティー 秋野ひとみ
吸血鬼の生活がどんなものか、知ってます!?（絵・赤羽みちえ）

僕の大好きな吸血鬼 —バンパイア・シティー 秋野ひとみ
吸血鬼・佐伯若葉の改造計画の結末は…!?（絵・赤羽みちえ）

あの娘に会わないで —バンパイア・シティー 秋野ひとみ
龍之介。まだ、涼子ちゃんが忘れられないの!?（絵・赤羽みちえ）

ひまわり日記 あさぎり夕
やっと芽ばえた恋だから、上手に育てたいの。（絵・あさぎり夕）

素顔の君に 麻生ゆう
理央、17歳の春。せつない恋をしました。（絵・麻生ゆう）

ファルコンチーム危機一髪! 阿月ありあ
学園に連続殺人発生! 次は私が狙われる。（絵・摩耶薫子）

きっとずっと好きでいる 石井ゆうみ
ときめきと不安。〝恋〟ってよくわからない…。（絵・岩崎まり子）

好きだよ 石井ゆうみ
彼が卒業したら、ふたりの恋はおわりなの?（絵・岩崎まり子）

素直になれたなら… 石井ゆうみ
恋愛と友情。からまった糸は、ほどけるの?（絵・岩崎まり子）

☆……今月の新刊

講談社X文庫ティーンズハート 大好評シリーズ&読者のコピー優秀作

気がついたら、そこは本の中でした （北海道・匿名希望さん）

好きになるだけで 石井ゆうみ
あなたたちの心の赤い糸、つながっているの？（絵・岩崎まり子）

いつも彼を想ってる 石井ゆうみ
ちょっと大人の恋。せつないほどときめくの！（絵・岩崎まり子）

あなただけ信じてる 石井ゆうみ
他人の噂より、好きな人を信じたいの……！（絵・岩崎まり子）

初恋物語メモリーポエム 石野リホコ
ティーンズハート初登場のストーリー詩集。（絵・川原由美子）

アイドルは名探偵 井上ほのか
狙われた主役候補!? 最年少18歳作家、登場。（絵・瀬口恵子）

アイドルは名探偵2 **それはKISSから始まった** 井上ほのか
宝石探し、暗号、ギャング。真名子大活躍！（絵・瀬口恵子）

アイドルは名探偵3 **愛してるっていわせたい** 井上ほのか
依頼人は、17歳の未亡人!? 真名子大ピンチ。（絵・瀬口恵子）

アイドルは名探偵4 **いつまでもそばにいて** 井上ほのか
愛していないと、解けないミステリーがあるの！（絵・瀬口恵子）

アイドルは名探偵5 **そんなあなたに首ったけ** 井上ほのか
食欲の秋に、真名子、拒食症の謎を追います。（絵・瀬口恵子）

名探偵を起こさないで 井上ほのか
ミステリー好きの眉子に、難事件の招待状が。（絵・瀬口恵子）

スコットランド古城殺人事件 井上ほのか
呪いの人魚がよみがえる。眉子たちの大活躍。（絵・瀬口恵子）

ニューヨーク摩天楼殺人事件 井上ほのか
今度の事件の依頼人は、暗黒街のボスだって!?（絵・瀬口恵子）

都市戦記・妖魔アルディーン 井上ほのか
凶悪都市の黒幕は誰？ 天才少年・涼の活躍！（絵・瀬口恵子）

都市戦記・妖魔アルディーン2 井上ほのか
闘いはじめた涼に、妖艶な美女の危険な罠が！（絵・瀬口恵子）

都市戦記・妖魔アルディーン3 **香港五星家** 井上ほのか
涼の新たな冒険！ 香港三部作、スタート!!（絵・瀬口恵子）

都市戦記・妖魔アルディーン3 **香港魔界行** 井上ほのか
香港を狙う〝黒の主〟に、涼は対抗できるか!?（絵・瀬口恵子）

怪盗デニスの眠れない夜 井上ほのか
怪盗S79号主演のロマンチック・スリラー。（絵・瀬口恵子）

BU・SU 内館牧子
ステキな恋とボーイフレンド、できるかナ？（絵・そうだふみえ）

夢の中のパセリへ 浦根絵夢
青山ぱせり、14歳。不思議な恋をしたの!?（絵・楠瀬敦子）

チョコレート・フェアリー 浦根絵夢
片想い少女の美夜に、チョコの妖精が接近。（絵・くりた陸）

☆……今月の新刊

講談社X文庫ティーンズハート 大好評シリーズ&読者のコピー優秀作

ティーンズハートが恋の時刻をお知らせいたします（北海道・後藤香織さん）

グルーピー♡殺人事件 大島暁美
ロックの会場には、殺人事件が待っていた！（絵・竹原悠理）

ヘビィメタル♡殺人事件 大島暁美
おもしろいBFができて探偵までしちゃった。（絵・悠紀冴子）

レディースルームにご用心 大島暁美
アイドルと恋をしたら退学になるなんて。（絵・悠紀冴子）

恋探偵♡危機一髪！ —レディースルームにご用心2— 大島暁美
ギターが招く怪事件、あたしの恋は大ピンチ。（絵・佑紀沙瑛子）

泣きたいくらいに抱きしめて 大島暁美
あのスーパースターがあたしに、恋してる！（絵・悠紀冴子）

とびっきり！ センセーション 奥井理帆
彼のために、してあげられることって何？（絵・蒔田のりこ）

泣いてなんかいらんない！ 奥井理帆
〝夢〟をつかむまで、だめよ、へこたれちゃ。（絵・蒔田のりこ）

恋人形はミステリー 織田加絵
あこがれの彼が、殺人犯人かもしれない…!?（絵・さこう栄）

恋少女は名探偵 織田加絵
あたしたちが発見した死体が、消えちゃったの!!（絵・垣野内成美）

アイラブユーは聴こえない —恋少女は名探偵— 織田加絵
ファッションショー会場で、殺人事件発生!!（絵・垣野内成美）

恋人ゲーム —恋少女は名探偵— 織田加絵
大好きな直哉先輩と、泥棒事件との関係は!?（絵・垣野内成美）

メフィストとワルツ！ 小野不由美
「好きだよ」、それは悪魔のささやき!?（絵・中村幸緒）

悪霊がいっぱい!? 小野不由美
旧校舎に霊能力者が大集合。怪事件の正体は!?（絵・中村幸緒）

悪霊がホントにいっぱい！ 小野不由美
古い洋館で、不気味にほほえむ人形の正体は!?（絵・中村幸緒）

悪霊がいっぱいで眠れない 小野不由美
天井から女がズルズルと出現。こわさ200%！（絵・中村幸緒）

悪霊はひとりぼっち 小野不由美
人魂とびかうホラー学園に、麻衣が挑戦！（絵・中村幸緒）

悪霊になりたくない！ 小野不由美
行方不明者続出。人を食べてしまう恐怖の館。（絵・中村幸緒）

悪霊とよばないで 小野不由美
神との壮絶な一騎討ち——ナルがやられた！（絵・中村幸緒）

悪霊だってヘイキ！(上)(下) 小野不由美
みんなが消えた廃校。もう麻衣しかいない！（絵・中村幸緒）

夢みるように、愛したい 折原みと
天使に恋を!? 桜子、16歳の、不思議LOVE。（絵・折原みと）

☆……今月の新刊

講談社X文庫ティーンズハート 大好評シリーズ&読者のコピー優秀作

今月はどの恋を楽しみますか？ （北海道・ミルクさん）

天使の降る夜 折原みと
愛里が天使のリョウくんに恋を。桜子は……。(絵・折原みと)

エンジェル・ティアーが聴こえる 折原みと
天使のシンくんと美紅。春の雪は天使の涙!?(絵・折原みと)

ティーンエイジ・ブルー 折原みと
秋生に「輝くBLUE」を見た、奈智の恋。(絵・折原みと)

彼の背中を抱きしめたい 折原みと
スタントマンを愛した美樹の、せつない恋。(絵・折原みと)

桜の下で逢いましょう 折原みと
美生、16歳。生まれかわりの不思議な恋を!?(絵・折原みと)

真夜中を駆けぬける 折原みと
心の闇に負けないで。輝く朝の光を歌おう!!(絵・折原みと)

2100年の人魚姫 折原みと
2100年の世界から来たルウが、可憐な恋を!?(絵・折原みと)

アナトゥール星伝 金の砂漠王(バーディア) 折原みと
ユナ、16歳。星の宿命で砂漠の国の王女に!?(絵・折原みと)

アナトゥール星伝2 銀の星姫(メシナ)上 折原みと
再びアナトゥールを訪れたユナですが……!?(絵・折原みと)

アナトゥール星伝3 銀の星姫(メシナ)下 折原みと
戦闘で傷ついたシュラ王のためにユナは…。(絵・折原みと)

時の輝き 折原みと
看護婦志望の由花、命の輝きを心で見つめて。(絵・折原みと)

時の輝き・2 折原みと
〝白衣の天使〟をめざす亜矢。実習一日目に!?(絵・折原みと)

たくさんの天使たちへ 折原みと
カラー満載!! 待望のイラスト&エッセイ集!(絵・折原みと)

真っ赤な扉(とびら) 覚和歌子
α次元の9つの扉に挑戦。新感覚ファンタジー。(絵・ふやまけいこ)

清里幽霊事件 風見潤
麻衣子と千尋クンのゾ——ッとする夏休み。(絵・かやまゆみ)

スキー場幽霊事件 風見潤
吹雪のなか、リフトに乗った犯人が消えた!?(絵・かやまゆみ)

ミナト神戸幽霊事件 風見潤
神戸で殺された女の人が、そのとき横浜に!?(絵・かやまゆみ)

冬の京都幽霊事件 風見潤
雪の密室からこつぜんと消えたのは鬼の腕!?(絵・かやまゆみ)

長崎異人館幽霊事件 風見潤
麻衣子たちと笑顔で別れた女の子が殺された!?(絵・かやまゆみ)

原宿幽霊事件 風見潤
東京のまん中で消えた麻衣子の同級生。なぜ!?(絵・かやまゆみ)

☆……今月の新刊

講談社X文庫ティーンズハート 大好評シリーズ&読者のコピー優秀作

恋の応援団員　ただいま募集中!!　（愛媛・鈴木麻里さん）

北海道幽霊事件　風見　潤
えーっ！　私も美奈子も殺されちゃった!?（絵・かやまゆみ）

東京ベイエリア幽霊事件　風見　潤
春のベイエリアは危険なかおりでいっぱい！（絵・かやまゆみ）

函館幽霊事件　―美奈子の冒険―　風見　潤
初夏の一人旅は、誘惑と危険の連続！（絵・かやまゆみ）

秋の飛鳥路幽霊事件　風見　潤
謎の古墳で、死体が消えた……？（絵・かやまゆみ）

瀬戸大橋幽霊事件　風見　潤
えっ！　日下くんが殺人事件の犯人なの!?（絵・かやまゆみ）

能登半島幽霊事件　風見　潤
吹雪の露天風呂から消えたのは雪女なの!?（絵・かやまゆみ）

大阪ウォーターフロント幽霊事件　風見　潤
日下君が〝女〟になっちゃうなんてイヤ!?（絵・かやまゆみ）

軽井沢幽霊事件　風見　潤
ロンドンと軽井沢で同じ人が同時に殺された。（絵・かやまゆみ）

秋の十和田湖幽霊事件　風見　潤
40日前に死んだはずの男が、再び殺された!?（絵・かやまゆみ）

クリスマス幽霊事件　風見　潤
殺人現場から走り去ったサンタは、孝夫!?（絵・かやまゆみ）

☆さくらの鎌倉幽霊事件　風見　潤
花びらが残したダイイング・メッセージは!?（絵・かやまゆみ）

やさしさに　ふれたくて…　鎌田絵里
お義兄さんとしてでなく、あなたが好きです。（絵・桐嶋ひろみ）

せつなくて片想い　鎌田絵里
金ボタンにこめられた、私の初恋の行方は!?（絵・桐嶋ひろみ）

夏色のアルバム　鎌田絵里
死んだと思ってたママが、生きていたの…!!（絵・桐嶋ひろみ）

あなたの背中がやさしくて　鎌田絵里
あたし、あなたへの想いで、ハチ切れそう!!（絵・桐嶋ひろみ）

素直なあたしで恋したい　鎌田絵里
人を好きになる気持ち、止められますか…!?（絵・桐嶋ひろみ）

あなたを誰にもわたさない　鎌田絵里
双子の姉妹が、同じ人に恋しちゃったら…!?（絵・進上真樹）

ハートがせつなくて　鎌田絵里
彼のこと嫌なヤツだと思っていたのに……。（絵・板倉真奈）

星くずのおくりもの　鎌田絵里
クリスマス・イブに出会った、不思議な男の子。（絵・板倉真奈）

やさしさにつつまれて　鎌田絵里
違うタイプの男の子二人。乙女心は揺れて…。（絵・板倉真奈）

☆……今月の新刊

講談社X文庫ティーンズハート 大好評シリーズ&読者のコピー優秀作

あまずっぱい 恋のドロップ おひとついかが♡ （大阪・森川有美子さん）

やさしくなりたい 鎌田絵里
永井真理子の大ヒット曲、イメージ小説。（絵・板倉真奈）

思い出は この場所に 鎌田絵里
あなたのやさしさに、とまどってしまう……。（絵・板倉真奈）

時のかなたで恋したい 川名香津美
過去の記憶がないあたしの超おそろしい謎！（絵・赤羽みちえ）

ヨコハマ指輪物語 神崎あおい
彼となら、妖魔だってこわくない！（絵・高橋千鶴）

ヨコハマ指輪物語2―カラドリウスの翼 神崎あおい
指輪に選ばれたあたしと邪悪な妖魔の戦い！（絵・高橋千鶴）

ヨコハマ指輪物語3―緑のノクターン 神崎あおい
炎のアインに宿られた桜木大和VS.ヨコ指一家。（絵・高橋千鶴）

ヨコハマ指輪物語4―哀しみのキマイラ 神崎あおい
ライオンと山羊の頭、蛇の尾の妖魔が出現！（絵・高橋千鶴）

ヨコハマ指輪物語5―嘆きのキマイラ 神崎あおい
キマイラにとりつかれたミクモを救って！（絵・高橋千鶴）

ヨコハマ指輪物語6―水魔ブロケルの怒り 神崎あおい
指輪の秘密を探っていると、新妖魔が出た！（絵・高橋千鶴）

ヨコハマ指輪物語7―水魔ブロケルと第二の指輪― 神崎あおい
妖魔を倒す青い指輪の一つは、ここにあった！（絵・高橋千鶴）

ヨコハマ指輪物語8―マルコキアスの悲劇― 神崎あおい
妖魔の炎で人間が石像になってしまった！（絵・高橋千鶴）

ヨコハマ指輪物語9―死霊の棲む家― 神崎あおい
ゾッとする霊気。チヨコの恐怖体験が始まる。（絵・高橋千鶴）

ヨコハマ指輪物語10―妖魔ラミーの生け贄― 神崎あおい
指輪を後世の少女に託した本当の理由とは!?（絵・高橋千鶴）

ヨコハマ指輪物語11―朱一族の陰謀― 神崎あおい
学園が乗っ取られる!? 美鈴の復讐に一族は…。（絵・高橋千鶴）

追いかけて!! ロックスター 神崎あおい
友達を殺したひとが、あたしの前にいる！（絵・高橋千鶴）

いつだって今が始まり 神崎あおい
うわさの美女リナがあたしの彼の腕の中に！（絵・高橋千鶴）

リフレイン KAORI 1987 神戸あやか
カオリ。ツッパリの高3。あたしの色を、読んで！（絵・三浦実子）

レフト・ビハインド 15歳KAORI 神戸あやか
逃げないで！ サトルからほんとの強さを知った。（絵・三浦実子）

ラジオ・プリンセス 神戸あやか
人気DJ「ぷっつんオイネ」は恋してる!?（絵・清水佳子）

ルーレット KAORI FOR '88 神戸あやか
賭けるのは、あたしの未来。熱い恋の想い。（絵・三浦実子）

☆……今月の新刊

講談社X文庫ティーンズハート 大好評シリーズ&読者のコピー優秀作

主人公みたいな恋がしたい！（兵庫・藤原真理子さん）

ラスト・ラブ・ソング KAORI IN N.Y. 神戸あやか
好きなタツミと、ニューヨークふたり暮し。（絵・三浦実子）

うさぎのバレンタイン 神戸あやか
花の高2、さやかの標的は、32歳の渋い男!?（絵・三浦実子）

君の白い羽根 神戸あやか
夢を捨てない有美と祐樹が、ふたりで翔んだ!!（絵・清水佳子）

カナリヤ・ガール 神戸あやか
モデルの明、砂絵の悩みは、名古屋弁だがや!?（絵・三浦実子）

C 神戸あやか
圭、19歳。童貞なのに「14歳で経験」と公言。（絵・三浦実子）

悲しみは雪のように ―AZとカオル― 倉橋燿子
ママを救え!! あずとカオルが行動開始。（絵・小沢真理）

オン・ザ・ロード ―AZとカオル― 倉橋燿子
カオルのいとこ、杏子の出現に、あずは……。（絵・小沢真理）

風を道しるべに… 全10巻 倉橋燿子
麻央、14歳。両親が事故死して、運命暗転!!（絵・小野佳苗）

夏色の天使 (上)(下) 倉橋燿子
天涯孤独となった、堀江野々香の将来は……!?（絵・沖野ヨーコ）

さようなら こんにちは 全20巻 倉橋燿子
あたしは、いったい、どこの誰なの……!?（絵・沖野ヨーコ）

AGAIN ―瞬間の中へ― 倉橋燿子
暢子の恋人・智己が死んだ！ ところが…!?（絵・さとう智子）

女ともだち 全8巻 倉橋燿子
男の子とつきあうより、女どうしは難しい。（絵・荻丸雅子）

もし、恋がかなうなら 黒川裕也
かくされていた約束に、あたしの恋はピンチ。（絵・福原ふみよ）

生き霊少女魔子 小池きよみ
もう一人あたしがいる！ そして殺人事件！（絵・波津彬子）

好きになっちゃだめ！ 小泉まりえ
親友のカレのこと、好きになっちゃった……。（絵・北川みゆき）

今だけの恋じゃいや！ 小泉まりえ
あたしたち、ハッピーエンドじゃなかったの!?（絵・北川みゆき）

好きな人なんかいないもん！ 小泉まりえ
好きな人がいるってことは、絶対に秘密なの。（絵・北川みゆき）

「好き」って言いたい！ 小泉まりえ
本当はあたし自身が、カレのこと好きなのに。（絵・北川みゆき）

あたしを好きって本当ですか？ 小泉まりえ
「あたしを好き」っていう噂話は、本当なの？（絵・北川みゆき）

好きな人がほしい！ 小泉まりえ
彼氏どころか、好きな人さえいないなんて。（絵・北川みゆき）

☆……今月の新刊

講談社X文庫ティーンズハート 大好評シリーズ&読者のコピー優秀作

とびっきりのエッセンス あなたのハートにふりかけて （埼玉・大矢三枝子さん）

友達の彼が好き！ 小泉まりえ
友達の彼だけど、あきらめられないの……。（絵・北川みゆき）

あたしを好きになって！ 小泉まりえ
あたし、尚之の好みの女の子になりたいの！（絵・北川みゆき）

好きなのは彼だけ！ 小泉まりえ
好きなのは岩館くんだけ、のはずなのに……。（絵・小椋真空）

好きになってもいいの？ 小泉まりえ
ナンパされて、知り合った彼氏だけど……。（絵・小椋真空）

アイドルを好きじゃだめなの？ 小泉まりえ
ケイタはアイドル……だけど、この恋は本気。（絵・小椋真空）

あの子を好きにならないで！ 小泉まりえ
裕太にとって、あたしは、ただの幼なじみ？（絵・小椋真空）

あたしのこと好きだよね？ 小泉まりえ
ねえ、あたしのこと、ずっと好きでいてね。（絵・小椋真空）

あたしはこんなに好きなのに！ 小泉まりえ
夢の中の理想の彼に出会ってしまったんだ。（絵・小椋真空）

同じ人を好きなんて！ 小泉まりえ
ふたごの妹と同じ人を好きになっちゃった!?（絵・小椋真空）

彼女のことは忘れて！ 小泉まりえ
どうして、昔の彼女と、一緒にいるの……？（絵・小泉まりえ）

好きになってゴメンね… 小泉まりえ
あたしが、あなたを好きにならなければ……。（絵・小椋真空）

別れたけど好きなの！ 小泉まりえ
大好きなのに「大嫌い」って言っちゃったの。（絵・小椋真空）

☆好きな人ができたのに… 小泉まりえ
やっと好きな人ができたと思ったのに……。（絵・小椋真空）

ガールフレンドになりたい!! 小林深雪
彼の理想の女のコは、なんとあたしと正反対!!（絵・牧村久実）

ママがいろいろうるさい 小林深雪
超マジメなお嬢様、舞ちゃんが素敵に大変身!?（絵・牧村久実）

ふたりのプリンセス 小林深雪
双子の姉妹が入れ替わり、恋に試験に大騒動!!（絵・牧村久実）

16才♡子供じゃないの 小林深雪
16歳でも、恋する気持ちは、大人と一緒です。（絵・牧村久実）

17才♡奥様は高校生 小林深雪
旦那さまは、なんと、うちの高校の先生です!!（絵・牧村久実）

18才♡ハネムーンへ行こう 小林深雪
「16才」「17才」に続く大人気シリーズ完結編!!（絵・牧村久実）

失恋なんてこわくない 小林深雪
夏やすみ1日めに、失恋しちゃいました——。（絵・牧村久実）

☆……今月の新刊

講談社X文庫ティーンズハート 大好評シリーズ&読者のコピー優秀作

1冊買ったらもう1冊 ドキドキが欲しくてたまらない （愛知・軽石奈津子さん）

ボーイフレンドをつくろう!! 小林深雪
仲よし3人組のボーイフレンド獲得大作戦!!（絵・牧村久実）

プレゼント 小林深雪
贈り物をテーマにした3つの恋のストーリー。（絵・牧村久実）

あなたを忘れる魔法があれば 小林深雪
あなたに彼女がいるなんて、知らなかった。（絵・牧村久実）

好き！ 好き！ 大好き!! 小林深雪
恋に悩む女のコの日記、覗いてみませんか？（絵・牧村久実）

デートしようよ!! 小林深雪
男のコのホンネを知りたい女のコ、必読ッ！（絵・牧村久実）

ふたりのラブレター 小林深雪
ラブレターが入れ替わっちゃって、大騒動!!（絵・牧村久実）

一緒にいられるのは今日が最後 小林深雪
わたしたち、離れ離れになる運命なの……？（絵・牧村久実）

プロポーズ 小林深雪
プロポーズ——それは、最高のプレゼント。（絵・牧村久実）

恋愛小説のつくりかた 小林深雪
少女小説家志望の芽衣ちゃんの恋の行方は？（絵・牧村久実）

☆**ふたりのアイドル** 小林深雪
末々がアイドルに!? そして、奈々は——!?（絵・牧村久実）

ポストカード・ブック ラブ・ストーリー 小林深雪 牧村久実
可愛くって嬉しい！ ポストカード＋詩集!!

彼女になる日を夢見てる 全3巻 西条せつな
ミドはTVで見た甲子園球児に片思い……。（絵・日下部拓海）

突然のボーイフレンド① 西条せつな
麻衣の家に同居することになった男の子は!?（絵・日下部拓海）

突然のボーイフレンド② 西条せつな
あこがれの庄嶋君に誘われた麻衣、だけど!?（絵・日下部拓海）

☆**突然のボーイフレンド③** 西条せつな
あたしの大切な翔君に接近してきたのは…。（絵・日下部拓海）

ハロウィン殺人事件 五月祥子
ハロウィンの夜は、危険と恋がいっぱい！（絵・響 理奈）

春休みには殺人事件！ 五月祥子
古代遺跡で見つけた刀が招く、恋と危険！（絵・響 理奈）

冬休みには殺人事件！ 五月祥子
猛吹雪でとじこめられたホテルでの怪事件！（絵・響 理奈）

ミルキーウェイ殺人事件 五月祥子
星にかけた私の願いをふみにじる犯人は誰？（絵・響 理奈）

スイートメモリー殺人事件 五月祥子
あまい恋の想いを破った恐怖の犯人は誰？（絵・響 理奈）

☆……今月の新刊

講談社X文庫ティーンズハート 大好評シリーズ&読者のコピー優秀作

好きです だから、あなたのそばにいたいのです （三重・松田久美子さん）

バレンタインデー殺人事件 五月祥子
愛をうちあけたい先輩の死で疑われたのは私。（絵・響 理奈）

恋人伝説殺人事件 五月祥子
同級生が泉に浮いて、カレが疑われてる！（絵・響 理奈）

緑の洋館殺人事件 五月祥子
幽霊が出るという洋館で起きた恐い事件と恋。（絵・響 理奈）

☆ホワイトデー殺人事件 五月祥子
2・14から、ドキドキの1か月が始まった！（絵・響 理奈）

夢見通りに気をつけて！ 五月祥子
楽しい遊びの町は、恋と殺人がとなりあわせ。（絵・響 理奈）

怨霊ビルに気をつけて！ 五月祥子
幽霊の出るビルに、すっごい秘密があった！（絵・響 理奈）

妖精の森に気をつけて！ 五月祥子
美少年の甘いささやきは、危険がいっぱい!?（絵・響 理奈）

夢の続きを忘れないで しおざわ千絵
友人のかわりに100mの選手になった星子は!?（絵・青山くみこ）

夢からさめたらあなたがいたの しおざわ千絵
結がアルバイトさきで知り合った大樹は…!?（絵・風間由子）

ラブレターの書き方教えます―なつきの恋愛事件簿― 神保いずみ
そっくりな二通のラブレターの秘密は…?（絵・藤川守・寿亮）

夢の中の恋人を探せ！―なつきの恋愛事件簿― 神保いずみ
未来の出来事が夢の中に現れる予知夢って!?（絵・藤川守・寿亮）

やせたい女のコのための誘拐講座―なつきの恋愛事件簿― 神保いずみ
なつきのダイエットが巻き起こす誘拐事件!!（絵・藤川守・寿亮）

ハッピーエンドを信じてる―聖カルミア学園シンデレラガールズ― 月森ふたみ
チアリーダーは部活も恋も元気いっぱい！（絵・岩崎つばさ）

―Forever―ずっといっしょにいたいから 津月ひかる
神様、オレは綾をひとり残して逝けないよ!!（絵・真柴ひろみ）

☆Boy―きらめく光の中で― 津月ひかる
一度逢っただけなのに、彼が忘れられない！（絵・真柴ひろみ）

星からきたボーイフレンド 津原やすみ
星男くん！ いったいあなたは、どこの誰!?（絵・新井葉月）

地球に落ちてきたイトコ―あたしのエイリアン― 津原やすみ
千晶と星男の、恋と冒険の物語、第2弾!!（絵・新井葉月）

ボクの理科室へおいで―あたしのエイリアン― 津原やすみ
星男！ あたしがデートしても平気なの…!?（絵・新井葉月）

夢の中のダンス―あたしのエイリアン― 津原やすみ
星男！ 素敵なプレゼントを、ありがとう!!（絵・新井葉月）

パーフェクト・キッス―あたしのエイリアン― 津原やすみ
千晶とホシオのファースト・キッスは……!?（絵・新井葉月）

☆……今月の新刊

講談社X文庫ティーンズハート 大好評シリーズ&読者のコピー優秀作

恋のレッスン　何冊うけた？　（大阪・向井美幸さん）

恋のペーパーチェイスーあたしのエイリアンー　津原やすみ
ホシオ！　ずっとウチにいてもいいのよ!!（絵・新井葉月）

おぼつき海岸の流れ星伝説ーあたしのエイリアンー　津原やすみ
真夏の満月の夜、流れ星を見た恋人たちは…。（絵・新井葉月）

初恋のリフレインーあたしのエイリアンー　津原やすみ
千晶とホシオの一世一代の大喧嘩の結果は!?（絵・新井葉月）

身勝手なヒロインーあたしのエイリアンー　津原やすみ
ホシオさんを、あたしに、譲ってください!!（絵・新井葉月）

ふたりと美少年とエトセトラーあたしのエイリアンー　津原やすみ
あたし、ホシオの秘密を、守ってみせる!!（絵・新井葉月）

五月物語ーあたしのエイリアンー　津原やすみ
今回の作品のヒロインは、岡村五月さんです!!（絵・新井葉月）

五月日記ーあたしのエイリアンー　津原やすみ
今回は、少女小説家・岡村五月が主人公よ!!（絵・新井葉月）

悲しみがいっぱいーあたしのエイリアンー　津原やすみ
ホシオが運命的に出会ったという人は誰……!?（絵・新井葉月）

アイドル誘拐プラン㊤ーあたしのエイリアンー　津原やすみ
人違いで誘拐されたあたし。どうなるの!!（絵・新井葉月）

アイドル誘拐プラン㊦ーあたしのエイリアンー　津原やすみ
千晶発見の手がかりをみつけたホシオだが…。（絵・新井葉月）

受験の国のアリス　中原　涼
魔女もドラゴンもハートでイチコロよ（絵・松本洋子）

時間の国でつかまえて　中原　涼
胸キュンベアーのコワ〜〜イお話よ！（絵・原ちえこ）

地獄の国のアリス　中原　涼
このハートで怪物も魔物もイチコロよ！（絵・中山星香）

恐竜の国のアリス　中原　涼
わたしの恋は恐竜しだいよっ！（絵・高橋千鶴）

ツッパリの国のアリス　中原　涼
恐怖学園の一番のワルは？　アリス生きてて！（絵・かやまゆみ）

ゲームの国のアリス　中原　涼
頭と体で怪物と勝負。すっく行くわ、アリス！（絵・かやまゆみ）

偏差値の国のアリス　中原　涼
偏差値の大怪物、ブッ倒せ！　……るかな？（絵・かやまゆみ）

さかさの国のアリス　中原　涼
怪人を倒せ。けど、勝てば負けてしまう！（絵・かやまゆみ）

近所の国のアリス　中原　涼
となりのお寺が原因で町の人が妖怪になる！（絵・かやまゆみ）

ミクロの国のアリス　中原　涼
こわいけど、ヒックリの極小世界で決死の闘い。（絵・かやまゆみ）

☆……今月の新刊

講談社X文庫ティーンズハート 大好評シリーズ&読者のコピー優秀作

片手にはハイネよりこのノベルがうれしいね （栃木・ルカさん）

幽霊の国のアリス
中原 涼
えんぴつ幽霊から食人幽霊王までが大出現！（絵・かやまゆみ）

お江戸の国のアリス
中原 涼
刀で斬られてもいい！ キスしちゃおっ、と。（絵・かやまゆみ）

校則の国のアリス
中原 涼
先生！ 私たちのことを束縛しないでっ。（絵・かやまゆみ）

卒業の国のアリス
中原 涼
アリスを助け出さないと〝卒業〟できない！（絵・かやまゆみ）

失恋の国のアリス
中原 涼
彼と別れないと、アリスを救出できない!?（絵・かやまゆみ）

悪魔の国のアリス
中原 涼
男の子、好きならムリヤリ奪っちゃえ～～～！（絵・かやまゆみ）

占いの国のアリス
中原 涼
適中率100%の恋占いって、本当にあるの？（絵・かやまゆみ）

部活の国のアリス
中原 涼
恋愛特別コースは猛特訓のおまけ付き！（絵・かやまゆみ）

妖怪の国のアリス
中原 涼
えっ、アリスが妖怪オリンピックの賞品に!?（絵・かやまゆみ）

料理の国のアリス
中原 涼
えっ！ アリスがギョーザになっちゃった!?（絵・かやまゆみ）

神様の国のアリス
中原 涼
数学の神様Mr.Iが、なんと女の子様に恋をした!?（絵・かやまゆみ）

うしろの国のアリス
中原 涼
ウシロノ大統領に反抗した胸キュンは死刑!?（絵・かやまゆみ）

真夜中の心霊物語①
中原 涼
霊能少女・志穂が挑む、背筋も凍る心霊現象！（絵・関よしみ）

ABCは知ってても
夏井瑤子
キス、そして彼と外泊。だから事件が……。（絵・唐沢のえ）

Cからはじまる物語
夏井瑤子
〝C〟を経験してしまったの。だから……。（絵・唐沢のえ）

Dかもしれない
夏井瑤子
ABCのDじゃない、もう一つのDが悩みなの。（絵・唐沢のえ）

スーパーガールのゆううつ
なぶらひみ
女の子で超怪力だなんて！ 青春コメディー。（絵・あゆみゆい）

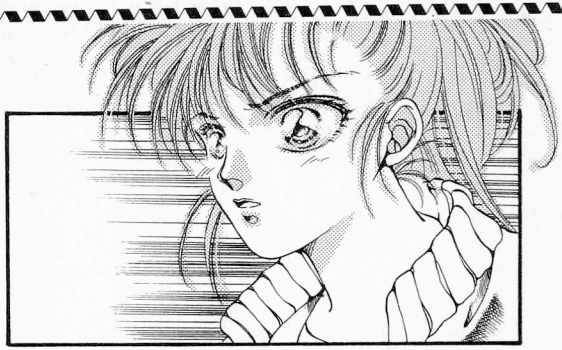
異星人ハンバーガーデート
なぶらひみ
宇宙人の美少年にナンパされてしまった私！（絵・あゆみゆい）

一週間のオリーブ
花井愛子
ウワサの、お妃候補は、17歳の由布子!?（絵・かわちゆかり）

山田ババアに花束を
花井愛子
オールドミスって、かわいい♡爆笑コメディー。（絵・折原みと）

☆……今月の新刊

大人気ティーンズハート



▶真夜子



VOL.1

連邦暦211年。魔都ネオ・ナリタで、天才少年・涼は、愛する真夜子と出会った。だがやがて、恐怖の妖魔にとり憑かれてしまう。すさまじい妖魔の呪力に負けると、血に飢えた殺人鬼になるのだ——。

売切続出！
大迫力に話題集中

妖魔アルディーン

井上ほのかの

都市戦記

愛と闇の新たなる伝説――



闘え！ アルディーン！
愛する者のために！
これが噂の最強新シリーズ!!



◀涼・雨宮
（闇の皇子アルディーン）

VOL.2

ネオ・ナリタの闇の支配者を倒し、街の救世主となった涼に、新たな敵が！ 妖艶な美女・梨花が甘く危険な罠へと、涼を誘いこむ。だがその裏で、本当の〝悪〟が、狂気の計画を進めていたのだ――。

大人気ティーンズハート

アイドルは名探偵・シリーズ



アイドルは名探偵

イラスト/瀬口恵子

真名子&克樹のわがまま・アイドル名探偵コンビが、さっそうとデビューしたのが、この本です。スタジオを舞台に連続殺人が！　事件を追う真名子も追いつめられて……!?　超・話題の1作です！



アイドルは名探偵2
それはKISSから始まった

イラスト/瀬口恵子

ロケ地・ハワイで、真名子と克樹の大活躍！　ギャングたちの暗号を手に入れたふたりですが、おかげで、マネージャーのマキさんが誘拐されてしまい……!?　またまた人気沸騰の〝ドル探〟です。



アイドルは名探偵3
愛してるっていわせたい

イラスト/瀬口恵子

真名子、ごきげんナナメで始まる第3弾。今度の依頼人は、17歳で日舞のお師匠、流し目得意の着物美人。謎の死をとげた彼女の婚約者が克樹にそっくりだとしても……克樹にくっつきすぎよッ！

井上ほのかの



アイドルは名探偵4

いつまでもそばにいて

イラスト／瀬口恵子

抜群のルックスとウソばっかしの口説き文句で、女の子を次々に狂わせてしまう清史郎。この芸能界一の問題児と共演することになった真名子。ホントに大丈夫!?　ところが、その清史郎の秘密に真名子が気づいたときには、恐怖の殺人計画は進められていたのです……。

大人気ティーンズハート



『少年探偵セディ・エロルシリーズ

1 名探偵を起こさないで

本のなかの主人公になりきっちゃうほど、想像力が豊かすぎる人、いませんか？　眉子も、そう。『少年探偵セディ』になって、大人顔負けの名推理を始めるのです。恋人のダンをはじめ、S79号、ゴーバル博士たちも、この本で初めてお目見え。難事件なら、セディにおまかせ！



＊すてきにクラシック。本格ミステリの楽しさがいっぱいです！

井上ほのかの



イラスト/瀬口恵子





2 スコットランド古城殺人事件

名探偵セディの第2の事件は、伝説の人魚がよみがえり、呪われた人々が殺されていくという、ミステリアスで怖い事件です。霧に浮かぶふるいお城の地下迷宮に、大切なダンが閉じこめられちゃった！　救出へ向かうセディとS79号の前に、驚くべき結末が待っていたんです！

3 ニューヨーク摩天楼殺人事件

S79号ことデニスのドジで、いきなり眉子がギャングたちにさらわれてしまった。あわてるダンたちに事件を依頼してきたのは、なんと、暗黒街の大ボス！　真犯人をつきとめられなければ、眉子の命はなくなるし、S79号も悪魔の手先にされてしまう。〝セディ〟なら、解けるのに！